

---

# デュエリスト アシュマ 第八話 対の鬼

高岡 佳司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デュエリスト アシユマ 第八話 対の鬼

### 【Nコード】

N5693F

### 【作者名】

高岡 佳司

### 【あらすじ】

……それは秘密が明かされる時。対の鬼の秘密が語られる時。アシユマは予言の書によって定められた鬼虎の秘密を暴かれないようにするために、またアーヌの天龍鬼の秘密を守るため世界を巡る。そのころクーロン人民共和国の山脈から巨大な岩の円盤が現れた……。SF剣戟冒険アドベンチャー第八弾！デュエリストアシユマ『第八話対の鬼』ただ今参上！

## 主な登場人物

アシユマ・アトー

この物語の主人公。

本名をアシユマ・アトー・ショアク・アシユオン・ヒョウエ・シバと言う。

イレギュラーナンバーと呼ばれる人造人間で、七賢人によって造られた。

年の頃は二十三丁四。

ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。

しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。

彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。

どこか暗い影を刷いている、美形の青年。

謎の多い刀、『万人殺しの妖刀・鬼虎』を遣う。

先のイルドリア武道大会で非公式ながら優勝し、先日ドラステイヌ共和国主催の武芸大会の優勝者と対戦し勝ちをあげ、これも非公式だが、武器を扱う武芸者としては世界一となった。

アーチエルとは恋仲。

アーチエル・アップルトン

栗色の長く伸びた髪の毛に、栗色の潤んだ大きな瞳と、濡れたような桜色の唇を持ち、黙っていれば人形かと思まごうばかりの美形の少女。

レキシタニア王国の王女である。

ただ、人形のようにと言われれば冷たい印象を与えがちだが、見

てみれば温かみがあり優しい感じのする少女で、事実、その通りの物を持つ少女である。

破壊の権化『バヴェル』のキー。

それが故に様々な勢力からその身を狙われる。

弱点といえば、戦いにおいて敵味方構わず、極端なほど血を見るのと死人が出るのを嫌う事。

アシユマとは恋仲。

オルバニアン・マグマイヤー

本名をルーラン・ノリトレアと言う。

ノリトレアの正式な王位継承者なのだが故あって今は黒龍号で寝起きをしている。

刀と銃、両方にいいセンスを発揮しまた、魔導機兵に乗らせれば右に出るものがないほどの腕を見せる。

また、好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

ヨディ・ヨフル

サイコ・フライヤー『黒龍号』の艇長。

年の頃は二十五〜六。

紺碧のストレートのロングヘア、細面でどこか人懐こい顔立ちをしている。

この若者普段は馬鹿なことばかり言うが、時々剃刀を思わす鋭い事を言っつては皆を驚かす。

その正体は、盗賊『ダスト・モンキー』。

しかしのみならず本当の顔はアルスティーン・ノリトレア。

ノリトレア王国の王子であり、オルバニアンの義兄に当たる。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う。

口の悪いのが玉に瑕。

戦利眼なる特殊な能力を持つ身の丈程の大剣使いの少女である。

顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れるはずである。

女賞金稼ぎで、別命『隻眼のアルミナ』

エファール・ソーフア

年齢は二十三。

アシユマを好いていた事もあるが、今はヨディの事が好きで好きでたまらない様。

恋人同士でもある。

剣の実力は折り紙付き。

最近密かに鞭使いだった事が判明。

ただし実力の程は分からない。

玉に瑕なのが怒りに任せると周りが見渡せなくなると言う事。

借金癖があること。

そして酒癖が悪い事。

これさえなければ優しく美しい女性であると言えよう。

『閃光のワルキューレ』とは彼女の事である。

キュポア・アップルトン

レキソタニア王国の第二王女。

アーチエルの実妹。

姉のアーチエルより二つほど年下。

姉に似ているところは少ない。

ただし目鼻立ちにははっきりしている、これもまた美形。

特に特徴的なのが大きい栗色の瞳。

髪の毛はいわゆるプリンセスカットと呼ばれるボブヘアで色は

姉より濃く、黒に近い、栗色。

社交的な性格で、誰とでも話し愛される少女。

リイナ・アナン

アーチエルの級友。

体に似合わず大振りで鉈のようなククリを使う。

正体はアシユマと同じイレギュラーナンバーでコードネームは『  
蜘蛛』。

戦闘のセンスに関してはもしかしてアシユマの次に実力があるか  
もしれない少女である。

それ以外はまだ幼さの残る美少女で、とてもそんな事が出来ると  
は銀龍スタッフのなかでも、思っていないだろう。

アン・デボン

アーチエルより三つ年上。

いわばアーチエルの姉的存在。

元々はアプルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチエルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。  
ただし本人はアーチエルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アベニ・ロー。

以前はどこぞの国で草スパイをしていた。

歳は老いているが、腕は確か。

今は、故あって黒龍号にいて、ヨデイ付きの間者になっている。  
皆に言わせれば影が薄いのだが、それが忍びの者にとっては眼目  
であるといつて喜んでいる。

色々と重宝しているようだ。

最近アシュマ直伝の秘剣・朧霞と秘剣・空蝉を使い多大なる戦  
果を上げている。

アリシアナ・コクレト

黒龍号の整備士

メカニックのスペシャリストである。

程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。

鼻筋の通った中々の美人でもある。

軍曹。

エドス・アプルトン

レキソタニア王国の国王。

アーチエルの父。

エースティール・アップルトン

レキシタニア王国の第一王子で第一位王位継承者。  
アーチエルの実兄。

オロ・エバス

汎用型電脳装置などの基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器なども取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、唯一七賢人と対等に渡り合っていける数少ない人間。

アリア・エバス

濃い黒で少し巻き毛で光沢を放つ髪の毛を持ち、瞳は黒く二重の瞼には長いまつげを湛え、唇は濡れたような光沢を放ち、エキゾチックな感じのする美少女。

オロ・エバスの実妹。

オロはいたく彼女を可愛がる。

リン・シャオリン

オロ・エバス、クーロン支店の総責任者。

クララテリア・アルサ・エミルトン

修理船『トーガイア』の管理官。

ベビーフェイス、見事なボディライン、豊かなバスト、三つ編み、メガネとロリコン趣味の者達には堪らない姿形をしている。

規則にうるさい。

23歳、大佐。

アーヌ

鬼虎でも斬り裂けぬ硬い鎧を身に纏い、アシュマを付けねらう七賢人配下の剣の達人。

その腕はアシュマと拮抗する。

七賢人四人衆の内の一人。

アシュマ最大のライバル。

ウルク

七賢人四人衆の内の一人。

大剣遣い。

カフル

七賢人四人衆の内の一人。

細身の剣を遣う。

カシア

七賢人四人衆の内の一。  
女性型。  
鞭を使う。

ネリア・クーシ・カハデクサン

イーン・イーチャイルドの車椅子押し。

イーン・イーチャイルド

主に兵器産業を筆頭に、医療、電気機器、航空機、素材産業、メディア産業など、世界中に散らばっている企業を取りまとめている  
コングロマリット、イーチャイルド財閥のその総帥。

ルー・ウィロン

先のクーロン人民共和国であった首都爆撃時に死亡したウー・パイタンの後釜に納まった男。

先のクーロン人民共和国首都爆撃で、国家的危機に陥つたのを立て直す事が出来たのも、ルー・ウィロンと言う人物あってこそ、と言われている。

この男、党ナンバー2の男で、先の危機をその剛腕で解決した男である。

軍と太いパイプを持ち、力押しで危機を乗り切ったとも言われている。

トウ・ライ

クーロンの大佐。

豪胆且つ頭脳明晰な男。

アシユマを苦しめる。

ジョージ・W・サバナ

アヘイビア連邦共和国大統領。

イワン・アガツコフ

ノーツ連邦の最高指導者。  
書記長。

テオドール・ブルツクドルフ

レボトミノ連邦共和国の大統領。

ラスコール・シヨウハウゼン

レボトミノ連邦共和国の軍人。  
大佐。

イイヒラシバ十六世

タイン教の総本山レジルデ市国の現法皇。

ロイグネン・ウムラオト

秘剣・朧霞を使うことの出来るガルマインからの刺客。

## 序節

人の戦い。

神人の戦い。

血脈を同じくする者の争い、大地を血で染める事になるだろう。

これは嘆かわしい事である。

招かれざる者に蹂躪される事、これは辱められる事に等い事である。

人の血を天秤で量り売る。

これは人の所業にあらず。

この間、偉大な龍はその眼を潰される。

祝福されぬ命の者、地上に災いの黒い太陽を以って大地を抉る。

大変多くの者を亡者にさせる。

なんと恐ろしい事か。

おお、神よ、私はそれも見た。

嘆かわしい事である。

この世にあつてはならぬ光である。

これで終わりではない。

これが始まりである。

円形の大陸に住まうもの、既に幸福では無い。

その都に住まうもの、半分はもう福音を聞けない。

人々は炎によって半分を失う。

また、その人、巨大な亀に乗って神の都を潰そうとするだろう。

これ、はなはだ不忠な事である。

一時、地上に黒き光を見る。

私はそれを見た。

これはちいさいこそすれ人々を覚めぬ悪夢に導くものである。

その光こそこの世に有ってはならぬものである。

太陽の影で

我らが故郷、戦場になるであろう。

我らが故郷をそれはまさに土足で踏みじめる行為である。

一頻り蹂躪された後、悲しきかな、兄弟と相見えなければならぬ。

その間、祝福されぬ命の者、敵の軍勢の半分を押さえる。

祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る。

この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見えるだろう。

この一対、空に予兆を残す。

私はそれを見た。

はなはだ不吉である。

このとき知恵の半球が出現するのを見た。

これにより我らが兄弟の争い一旦は治まるだろう。

されど将来にわたり禍根を残すものである。

美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の

神。

それらが一つに重なる時、それは秘密が明かされる時。  
対の鬼の秘密が語られる時。

しかしその秘密を語る時はあまりに短い。

その前後、龍は相反する痛みに身を囚われ、聖廟、鷲、鎌等は、  
祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろう。

この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混  
乱する。

あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である。

嗚呼、私はそれを見た。

幾夜に渡りあの黒き光の正体を掴まんと、黒き卵を欲するものが  
いる。

幾つかその黒き卵奪われる。

私はそれを見た。

祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜しまわる。

その間、聖なる学び舎、鷲に襲われる。

学び舎の者、祝福されぬ命の者に助けられ大事には至らない。

この間一人の黒き野心家一人大地に立つ。

私はこの人を見る。

甚だ傲岸不遜な人である。

鷲、これを認めず爪と嘴でこれを喰らわんと欲するだろう。

此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり、矢となる。

その後、もう一人の黒き野心家、鷲の為に敵を打ち倒す剣になる。

私はこの人も見る。神の人に近い間柄である。

聖廟もこれに立つが、頭を射抜かれ大事に至る。

嗚呼、なんと私はそれを見た。

聖廟の信徒激しく怒り、世界を震撼させる。

二人の黒き野心家相容れず、ぶつかるだろう。

この時も祝福されぬ命の者、一方の野心家の盾となり、矢となら  
ん。

病に伏せるもその役目は果たすだろう。

その働き悪魔の如し。

私はそれを見た。

その後一人の野心家もう片方を追いかけてこれを撃ち滅ぼす。

黒き野心家鷲の巢の中からひとり立つ。

ついに月へと至る道を人は見つけるであろう。

祝福されぬ命の者、われの僕の末裔どもを襲う。

祝福されぬ命の者の勝ちとなるだろう。

その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう。

嗚呼、これは有ってはならぬ事である。

祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えさせる。

驚くかな、もう一人の祝福されぬ命の者現れし時、祝福されぬ命  
の者この世に出現す。

私はそれを見た。

世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。

これ世界の行く末占う戦である。

しかしこれの勝者なし。

この間に龍は頭がすげ替わる。

またこの間に日もまた頭がすげ替わる。

この前後に天変地異あり。

祝福されぬ命の者と、祝福されぬ命の者との戦いがある。

私はそれを見た。

破壊の権化と祝福されぬ命の者との戦いがある。

その間、神人、天高く月におられる。

私はそれを見た。

神人、祝福されぬ命の者と月にて相見える。

祝福されぬ命の者、さながら悪鬼の如し。

私はそれを見た。

巨大な閃光が見えた。

是にて新生人類は滅亡する。

私はそれを見た。

我が予言もこれを以って成就する。

神は全てを見通せたり。

かくあるべし。

ターシャーン。

とある、若い男が険しい山を登っていた。

その男は僧であった。

手足に血豆を作り、血を滲ませて。

額に汗をかきながら。

そして時折地図を見ては、

「確かこのあたりのはずだと」

息を切らせながら、崖を上っていた。

最終兵器としての側面を持つアシユマとアーチエル。

マリクの大地を抉った謎の光といい、殻爆弾といい、バヴェルと

いい、過去の遺物の力に改めて各国は驚かされるものがあつた。

バヴェルと、穀兵器はとりあえずは捨て置いても、謎の光は、看過出来ないものがあつた。

威力といい範囲といい自然への災害といい、各国はこの謎の光の正体に興味を持ち始めた。

どうやらこの光の正体は、アシユマ・アトーと言う青年と、鬼虎と言う一振りの謎の刀が引き起こしたものだと言う……らしい。

また、アーチエル・アップルトンなる少女は、バヴェルのコアユニットだと言う。

これも見逃せない事実であつた。

古文書によると、対の鬼がその秘密を現す日が近付いているらしい。

その日は地球を含めて金星、月、火星、木星、土星が、直列を起こす時と言う話だ。

厳密に言えば完全に直列と言うわけではなくある程度の誤差が有っても対の鬼は秘密を明かすらしい。

厄介なのが月で、直列するのが僅かな時間なので、その秘密を知るには極めて短い時間しか出来ないという。

この情報は、はじめアヘイビアで発見された古文書を解読して分かった情報だという。

しかし『対の鬼の秘密』の情報は漏れ、主要各国に知れ渡す事となつた。

そして対の鬼の情報を得るために、各国が暗躍・暗闘を繰り返した。

これは、惑星直列のその日にもたらされる情報如何によっては、『鬼』の量産が可能になるということにも繋がる、由々しき事態であつた。

## 第一節 アルステイーンとオルバニアン

今、黒龍号のクルーはレキシタニアにいた。  
勿論慰安の為である。

先のアルヌーでの戦いがクルーに思った以上に負担をかけていた。

その豪の者は、レキシタニア到着初日、着くなり、ベッドの上で靴も脱がずに眠ってしまった。

夕食時にも起きて来ずそのまま寝ていた。

アーチエルが起こしに行ったが、全然起きようとせず、眠ったままだった。

アーチエルがその事を父王エドス・アップルトンに報告した所、

「よい、よい。婿殿はそれだけの働きをしておるのじゃ。ゆっくり寝かせてやるが良い」

エドス王はそう言った。

「ところでヨデイ殿、アルヌー国はどうでしたかな？」

「正に神話の世界に行くが如きの国でした。どこか儼かな雰囲気を漂わせていました」

「そうであろう、そうであろう。ディーヌ・アデュニ王子は、ご壮健だったかな？」

「騒動に巻き込まれ大変なご様子でした」

「そうであるか。災難だったのう」

「王様！」

そう言ったのはオルバニアンである。

「なんであるかな？ オルバニアン殿」

「これ、オルバニアン！ いきなり『王様』とはなんと不躰な！  
ヨデイが割って入った。

「じゃあ、こう言う時なんて王様に聞けばいいんだよ！？」

「これ！ …… そういう時は『お畏れながら国王陛下』とか言うも

のだ」

「あら、またオルバニアンに色々教え込んでるの？」

エファールがヨデイをからかった。

「エファールさん、からかわないで下さい」

ヨデイが言った。

「よいよい。で、何の用かな？　オルバニアン殿」

「はい。砂漠か砂漠でないかは別にして、国の造りが、レキシタニアとアールヌー国、似た感じがありますかなにかあるんですか？」

「これはなかなか鋭い。アールヌーと我が国は縁続きなのじゃ」

「嘘！」

「わっはっはっ。嘘など吐くものか。まあ、厳密に言えば違つものじやがな。向こうはティン教の土壌といえるアールヌー教の国。こちららはティンの末裔の国じゃ」

「嘘！！」

「わっはっはっ。嘘など申さぬ」

「俺、こんな辺りで、ちっこくて、貧しい国が、なんでむちゃくちゃ権威があるのか、今分かった気がする」

「大きなお世話じゃ！」

キユポアが言った。

その一言で場は、わっ、と沸いた。

「王様、それにしてもティンを祀っているようには見えないんだけど」

オルバニアンがまた訊いた。

「そうじゃ。五百年ほど前かのう。その時の王様がティン教からデューン教に宗旨替えしたからの」

王は答えた。

「この世の全ては無常なり……ってやつか」

「永遠に変わらないものは一つもない……と言つ奴ですね。アシユマ君がいたら盛り上がりそうだ」

ヨデイが呟いた。

「そりゃそーだ」

アルミナが言ってる場が又沸いた。

そして、アルミナの一言から最後まで場は和やかな雰囲気のまま食事を終えた。

(そういえば怪獣はとうとう顔を見せなんだのう。大丈夫じゃるか?)

キュポアは思った。

キュポアはそつとアシユマの部屋に行った。

電気をつけようかと思ったが、やめた。

「怪獣、入るぞ?」

アシユマは寝息を立てて眠っていた。

「怪獣。大丈夫か?」

「う~~~~ん」

アシユマが反応した。

「怪獣?」

「……………眠い」

「お腹は?」

「……………へった」

「じゃあ何か暖めて持って来ようか?」

「……………頼む」

「じゃあ、まっしておね!!」

と、言うや否やキュポアは台所へ駆け込んだ。

弱っているアシユマに優しいように流動食を選んだ。

コンソメのスープ、シチュー、牛乳、パンは柔らかいモノを選んだ。

それらを手押し車に乗せて、アシユマの部屋へ。

「怪獣。持ってきたぞ。入るぞ」

コトリ。

何かの物音がした。

「だ、誰じゃ!?!」

キュポアは電灯のスイッチを入れた。

「キュ、キュポア！ ……わ、わたくしよ……」

そこにいたのは、

「姉様……」

の、アーチエルだったが、どこかうつろたえている様にも見える。

「姉様、何をしておったのじゃ？」

「な、何もしておりません」

「姉様、どうせ、えっちい事をしていたのじゃろ？」

「してません！ アシユマさまが寝てるのに」

「しておったじゃろ！」

「頬にキスしかしてませ……あ……」

「う~~~~ん……」

アシユマが眼覚めたようだ。

「うるさいぞ。お前ら。寝てられん……」

「御免なさい」

「御免なさい……」

「だが、怪獣！ ご飯を持ってきてやったぞ」

キュポアが言う

「ごはん？ それは助かる」

「えへん」

キュポアは得意顔だった。

アーチエルはといえは、少し寂しそうな、羨ましそうな、そんな表情をしていた。

しかし、アーチエルは、アシユマの横に座り愛しそうにアシユマを見つめた。

キュポアもアシユマの隣に座りじつとみつめた。

アシユマは食事を終えた。

「ふうーう。食べた食べた」

アシユマは言った。

「この片付けはどうしたらいい？」

「明日アンが片付けてくれますよ」

アーチエルは言った。

「さて、どうするか……」

アーチエルは、

「あの……」

言いかけて止めた。

何かを言いたそうにもじもじし、アシュマとキュポアに視線を行ったり来たりさせていた。

アシュマはなるほどと思った。

アーチエルはアシュマと二人きりの時間が欲しいのだろう。

だが妹の手前、それがいえないのだ。

「アーチエルがそれで良いなら、良いよ」

アシュマが言った。

途端にアーチエルの顔に喜色走る。

キュポアは何のことか分からず、

「何のことじゃ？ わらわにも分かるように話せ」

そう言った。

「キュポア、さっきの料理はお前が作ったのか？」

アシュマが言う。

「いつ、いや……その……」

「美味かったぞ。有難う」

そう言っつてキュポアの頭を撫でてやった。

「また、食べさせてくれ」

「ま、任せるのじゃ！！ そ、それではな！ 姉様も」

キュポアはアシュマの部屋から出た。

「……いかん。わらわが作った事になっておるぞ。どうすれば良いのじゃ？」

キュポアは頭を抱え、ふと気が付くとリィナの部屋までやって来ていた。

キュポアは思わずリィナ部屋のドアをノックしていた。

「はぁい、はい、はい、はい」

ドアが開きリイナが顔を覗かせる。

「あら、キュポアちゃん、どうしたのこんな遅くに？」

リイナは言った。

「済まんのお。寝ている所を」

キュポアが答えた。

「大丈夫よ」

「なんかへるへるではないか」

「大丈夫……」

一旦そこでリイナはがくつとなつてバランスを崩しかけたが、次の瞬間しゃきつとし、キュポアの方を振り向き、

「それで相談とはなんだ？」

そう訊いた。

リイナの人格が一変した。

『蜘蛛』の（本人はその呼び方に抵抗があるようだ）リイナだ。  
「おお〜〜頼りがいのあるリイナではないか。可愛いリイナはどこへ行った？」

キュポアは訊いた。

「ほう？ 今の私が可愛くないとでも？」

リイナが逆に訊いた

「いやいやいや、そんな事は誰も言っておらぬぞ？」

「まあよい。で？ 相談と言うのはなんだ？」

「その前に興味から聞くのだが、今のリイナも、可愛いリイナも、例えば今話している会話は、覚えておるのかの？」

「可愛いリイナと言う言い方が気になるが、記憶は共有してはおらん。安心しろ『今』話したり聞いたりしては『今』の私しか覚えておらん」

「片方のリイナにだけ相談したい事がある場合、それは駄目なのかなのう？」

「なんだ、そういう相談なのか？」

「いやいやいや、そんな事はなくて、例えじゃ、例え」  
「で、相談事は何だ？」  
「実はな……」

「大体分かった」  
「リイナが言った」

「分かってくれたか。矢張り料理を覚えねばならんかのう」  
「一つ訊く。お前はアシユマの事が好きなのか？」  
「なっ！ なっ！ なっ！ そんな訳あるか！」

これでリイナは思考モードに入った。

（これは完璧に好きになってるな。しかも本人が気付いていないパターンだ。普通なら料理の一つでも覚えて喜ばせ……と言う所だが、アシユマにはアーチエルがあるし、姉妹で男の取り合いになるのも酷な話だ。ここは一つスパッと諦めさせるか……）

「のう、キュポア」

「な、なんじゃ？」

「お主、軽くあしらわれたぞ」

「な、な、な、なんじゃと!？」

「つまりは、その場で邪魔な存在だったから体良く追い出されたのだらう」

「お、追い出された……」

「大方その後二人で乳繰り合っていたのだらう」

「乳繰り合って……」

「そつだ」

「う、うえええ……」

「これでもまだ、アシユマの事が好きか？」

「好きじゃない!! 好きなわけあるもんか!! うええええ……  
えぐっ……ひつく」

「じゃあ、復讐に行こう!!」

「復讐？ …… ひつく」

リイナとキュポアはアシユマの部屋の前までやって来てしまった。

「まさか又あれをやるのか？」

キュポアはリイナに訊いた

「当然だ！ 復讐だからな」

「あたが 恰もアシユマとアーチエルは、お休みのキスをし床につこうかと言っ時だった。

「アーチエルちよつと待つててくれ」

アシユマが言った。

「？」

丁度ドアの外では

「すう〜〜」

リイナは息を大きく吸い込むと、ドアを思い切り蹴り込もうとしていた。

寸前でアシユマがドアを開け、リイナがたたらを踏んだ。

「リイナ、こんな時間に何をしようとした。殺気のようなもので発して」

「さすがは閃光のアシユマだな」

「その挑むような眼は止めなさい。お前の負けなんだから」

「ち！」

「キュポアもいるのか」

アシユマの左手が伸びてキュポアに迫った。

キュポアは、

（ぶ打たれる！）

と、思い身体を強張らせた。

しかしアシユマの大きい手は、キュポアの頭を撫で、そしてアシユマは、

「料理美味かった。また、作ってくれ」

そう言った。

「か、怪獣……」

キュポアは思い直し正直に告げることにした。

「怪獣、あれは、わらわが作った物じゃないのじゃ。だから……」

「じゃあ、作れる様になつたら食わしてくれ」

「怪獣……」

「二人とも入っていくか？ 冷えるぞ」

「アーチエルがいるのだろう？」

リイナが言った。

「いるよ」

アシユマが答える。

「いこう？ キュポア」

と、リイナ。

「うん」

キュポアが返事をする。

「しかし、キュポアの話と少し違ったな」

「そうじゃの」

「どうしたのださつきから言葉少なげに……」

リイナがキュポアの方を振り返って見た。

すると、そこには顔を上気させ瞳を潤ませながら歩いて来る少女の姿があった。

（いかん！ これは恋する乙女の顔ではないか！ 一体、何人目の犠牲者だ！？ アシユマ・アトーよ！？）

「アシユマさま。二人はどうなさったので？」

アーチエルは布団の中でアシユマに聞いた。

「『丁重』にお帰りいただいたよ」

全てはアシユマの計算だった。

今日は皆昼食を済ませ、思い思いの午後を愉しんでいた。アシユマは一人で稽古を……特に体術の稽古をしていた。アシユマは何故、体術の稽古をしているかと言うと、この間の体術の対戦内容にいささか不満を持ったからだった。

イメージと対戦内容のギャップを感じたのである。必ずしも素手で来る相手に素手で相手をしなければならないと言うことはないが、やっておいて損はないと思っただのである。

いつの間にか、アーチエル、キュポア、リイナの三人が立て膝突いてアシユマの稽古を見ていた。

そしてアーチエルなどは、アシユマを見て時折、はあ、と溜息をついた。

それわかる。だが、キュポアまでもが、アシユマを見て時折、はあ、と溜息をついた。

これはどうなのだろう？  
そのの所を、今度アーチエルに相談しなければならんと思うリイナだった。

稽古をしていて、エースティーがやってきて、  
「師匠、そろそろ稽古をつけていただくお時間です」  
そう言われた。

「もうそんな時間か？」

アシユマが言った

「はい」

「では、行かねばなるまいの……」

爺むさく言った。

なぜか、これがアーチエルとキュポアには大うけで、暫くは口真似された。

この時もそうで口真似しながらアシユマの後をついてきた

「……ガキ」

リイナは二人を酷評した。

したが、一番後からついて行った。

「師匠、うるさいようでしたら、追いかけてみますが」

「エースティー殿、大丈夫です。うるさいようなら自分で追いかけてみます」

アルミナとオルバニアンは魔導機兵『ラヴァー』の運用について話し合っていた。

『ラヴァー』は一人の操縦者で飛行できる初めての機体だった。いわばプロトタイプとしてロールアウトした特殊な機体でもある。量産品と違い、その機体にしか使われていない、特殊な部品もある。

その点をどうクリアするかが緊急の課題だった。

「だからその点アタシ達じゃ対処できないと思うのよ。だから、トーガイアから整備兵と部品を回してもらうのはどうかしら？」

「だけど整備だけは自分で出来るようにしたい方が言いと思うぜ？」

「それはそうだけど……『ラヴァー』のイロハを最初から覚えるのはきついと思うの」

「最初からじゃないじゃん。最初の時一週間かけて皆で整備したじゃない」

「だから、その皆を一人でやるのが、大変だって言ってるのよ」

「あ、成る程。じゃあ、コクレト軍曹を……」

「あの人、美人でちょっと困るな……」

「なんだよさつきから文句ばかり言って。それなら何なら良いわけ

「？」

「ちよいと良い男で、気が優しく力持ち。メカに滅法強くて、何でもやってくれる人」

「いねえって。そんな奴あ。それとも俺へのあてつけか？」

「いや、そんな訳じゃないのよ？ オルバニアン。怒らないでね」

「ま、それならそれで良いんだけどよ。……ヨディに相談してみようぜ」

「そうね」

そのヨディは色々な資料を並べ、ルーンの黙示録と睨めっこしていた。

そしてその傍らには矢張り読書をするエファールの姿があった。

「あなた。随分とせわしない読書ね」

「ええ、少しでも未来を知って、その危機に対応したいんですよ」

「でも、そうしたら、その瞬間から予言は予言で無くなってしまっただけではダメか？」

「……………」

「あなた？」

「それは確かにそうかもしれない」

「でしょう？」

「…………でもそうせずにはおれない僕がここにいる」

「あ、そ」

「エファールさん退屈してるんですか？」

「少しね。読書をしている私は絵になるけれど、それだけでは退屈だわ」

「本の選定を間違えたのでは？ 何を読んでもるんですか？」

「ロマンス小説」

「良いじゃないですか。何で飽きるんですか？」

「だって皆似たような物じゃない。ロマンス小説って」

「それでもないと思うんですけどねえ」

「ねえ、たまには昼間から『しない』？ そっちの方が退屈のぎになるわ」

「……そうですね」

二人は唇を近づけた。

「えっちい最中にすまねえ」

オルバニアンとアルミナが来た。

「ほんとよ。あと少しだったのに。何か用？」

「いやそれが……」

オルバニアンと、アルミナの二人はこれまでの経緯をざっと話した。

「……成る程ねえ。それだったら、クララテリア大佐に訊いて見ましょう」

「あなた！ まだあの小娘と繋がってるの!？」

「工作上的事ですよ。今はそれ以上でもそれ以下でも有りませんよ」「ホントにそうかしら？」

ヨディは携帯端末に電話番号を入力した。

数回のコールの後、携帯端末は繋がった。

『はい、クララテリアです。誰だか知りませんが用なら後にしてください』

「じゃあ、また後でかけるよ。クララテリア……」

『あっ！ だ〜りん！ だ〜りんならいつでもOKですう』

「今何してたの？」

『トーガイアのオーバーホールです』

「そんな大切な仕事なら、そっちに気をまわしたほうが良いんじゃないの？」

『あ、大丈夫です。そんな大変な仕事じゃないですからあ』

「そうかい？ じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかなあ？」

『どうぞ？』

「実は……」

ヨディは事のあらましを言った。

『……………そう言う事でしたらコクレト軍曹を出向させますが、』

「有難う。そうして下さい。では、また」

『はい！』

通話は切れた。

エファールがご機嫌斜めの様子だ。

頬をひくつかせている。

「随分と親しそうだったじゃないの？ 本当はまだ繋がっているんじゃないの？」

「や、嫌ですよ。そんな事あるわけ無いじゃないですか。どうやって繋がれって言うんです？」

「ふくん、どうだか」

「で、話の内容は？」

オルバニアンが訊いた。

「コクレト軍曹と言う方が合流してくれるそうです  
ヨディが言った。

「ほらな？」

オルバニアンが、アルミナの方を向いて話した。

「ちえ」

「おや？ アルミナさんは乗り気じゃないみたいですね  
ヨディが言った。

エファールはピンと来た。

「ねえ？ アルミナ。そのコクレト軍曹って女の人でしょう？」

「え？ なんてわかるの？」

「しかも美人でしょう？」

「なんで？」

「オルバニアン！」

エファールはオルバニアンを呼んだ。

「なんだ？ エファール…………？」

オルバニアンは返事した。

「浮気しちゃ、駄目よ?」

「はあ? ヨディじゃあるまいし、するかツツーの! てか、誰と?」

「まあ、いいわ。これで良いでしょ? アルミナ?」

「まあ、そんなときゃ、あたしのロンリーストライフが唸るから覚悟しなさいよ?」

アルミナがオルバニアンを脅しつけた。

「だから、何で? 誰と?」

「そうだこの事をオロにも伝えておこつ」

ヨディは思いついた。

「伝えとかなきゃ駄目なもんなの?」

アルミナが訊く。

「いえいえ。伝えておいた方が話しがスムーズに働くという事です  
よ」

「そう言うモノなんだ。ふーん」

ヨディは、早速オロのオフィスに電話を入れた。

『オロだ』

「ヨディだ」

『なんだ?』

「なんでもない」

ガチャン!

「あ」

「馬鹿か? アイツは」

オロはそう呟いた。

「何言ってるのよ、もう! 切れちゃったじゃない! もう!」

アルミナは怒った。

「もういい、貸して!」

「あ」

アルミナはヨディの端末を奪い取った。

そしてアルミナは、オロのオフィスにリ・ダイアルした。

ちよつとたつて、オロがでて、

『馬鹿は治つたか？』

訊いてきた。

「馬鹿じゃなくて、アルミナよ」

『なんだ、じゃじゃ馬か』

「じゃじゃ馬じゃない！……つて、それはどうでも良いわ。コクレト軍曹と言う方がこっちに出向になると思うわ。了解だけしておいて」

『何かと思えばそんな小物の事か。そんな小物の事は知らん』

「なっ！」

『怒るな。大抵の事はそうだ。まあいい。最優先事項にしておいてやる』

「助かるわ」

『あと、馬鹿に代わってくれ』

「はい、ヨディ」

そう言つてアルミナはヨディに端末を返した。

「ありがと。はい、ヨディです」

『オロだ』

「ヨディだ」

『ふざけるのは無しだ。ちよつと厄介な事が起こつた』

「えゝ、厄介な事？ やだなあ」

『良いから、黙つて訊け。今から二十三時間ほど前の事だ。クーロンのアタマフ山脈で山を二つ三つ崩して巨大な岩塊が現れた』

「岩塊？」

『そうだ。それは今の所、山中にあり、ゆっくりとウイライ方面へ向かっている』

クーロン人民共和国は首都をバランドバに定めていた。

それが、首都爆撃と言う事態になり現在の仮の首都はウイライと言う事になっている。

その首都爆撃直後は大変な自体になった。

経済活動の停滞、他国への波及、株価暴落、政治活動の麻痺、内外への影響、治安の悪化、反政府組織の躍進、テロ活動の横行。

E t c、E t c……。

それを立て直す事が出来たのも、ルー・ウィロンと言う人物あってこそ、と言われている。

それは置いて、問題なのはその岩塊がゆつくりとはあるがウィライへ向かっている事だった。

それについてはクーロン当局でも感知しており今後の動向を見極めようとしている所である。

さらに言うならば、オロ個人が懸念しているのは、その岩塊が海を渡りアヘイビア、ひいてはオロの敷地内に入ってきて何かしらの攻撃をしないかどうかと言うことである。

それに対してヨディは……

「オロ、それは考えすぎっしょ」

一蹴してしまった。

『……………』

「オロ？」

『もういい。お前には分からんだ。一国一城の主の気持ちなど。

あ、そういえば君も一国一城の主だったねえ。忘れてしまったのかな？ この苦勞？』

「オロ、大事なのはそこに住む人々であって、そこにたっている城ではないよ」

『そんな事は分かってるよアルステイン！！』

（わっ、オロ声大きいですよ皆に聞こえてしまいます）

「何？ 皆に聞こえると、まずいんですって？ また浮気の話？」

エファール不意にヨディの端末をひよいと取り、強引に会話に入ってしまった。

「あら、オロさん、お久しぶり。で、何？ うちの亭主？ 浮気でもした？」

『浮気？ わあっはっはっはっ！！ 『英雄色を好む』だなあと、

伝えてくれ。また、今夜の夕食の話題、にアルステイン談義にでも花を咲かせてくれ。それではな……おっとエファール早く君の借金の方を……」

ぷちツ。

「ふう〜う。あつぶなかつたわあ〜」

「あ、エファールさん、何してんですか！ 全くもつ」

ヨデイが困った顔をしていた。

「あら、いけなかつたかしら？」

「大事な話してたんですから」

「ふ〜〜ん、で英雄色を好むってどういことかしら？」

「それは諺ことわざじゃないですか」

「あ、そう」

「あれ？ エファールさんにしては、あつさりしてますねえ」

「オロに夕食の時アルステイン談義を試してみろって言われてもねえ……」

「……」

ヨデイは、いや、アルステインは心臓に氷の刃が突きつけられるほど驚いた。

今ここでこれを聞かれてはまずい者……アルミナは大丈夫、エファールも大丈夫、……オルバニアン……オルバニアンは！？

ヨデイは後を振り向いた。

オルバニアンと目が合った

オルバニアンはばつが悪そうに視線をずらし、踵を返しそこから退出しまった。

「どうしたのかしら？ オルバニアン？」

と、エファール。

その態度を見て、アルステインは、明らかにオルバニアンは『ヨデイ＝アルステイン』であることに気が付いている、と、悟った。

「あたし……。ちょっと様子見てくる」

アルミナも何かを感じたのだろう。

心配になりオルバニアンの後を小走りで追いかけていった。

アルミナは追いかけてオルバニアンの部屋の前まで来た。

ドアをノックする。

返事が無い。

しかし人の気配はする。

「入るよオルバニアン」

アルミナがオルバニアンの部屋へ入って行くと、オルバニアンはベッドの上で頭を抱えていた。

「何してるのよ心配しちゃったじゃない」

アルミナは言った。

「死んだと思ってた兄貴が生きていた」

オルバニアンが、ぼそぼそ呟いていた。

「え？」

アルミナは聞き返していた。

「昔々、出来のよい兄と出来の悪い弟がいました。弟は自分に義理の兄がいるなんて知らされていませんでした。とある出来事があった。兄は隠れてしまい、皆が皆その兄が死んでしまったと思ひ込み、悲しみました。ところが、兄は生きていました」

オルバニアンはなにやらぶつぶつ言っている。

「何のお話？」

アルミナが訊いた。

「俺に取っっちゃまだ秘密で居て欲しかったのさ。一人前になるまで」

「秘密？ 何の？ 一人前？」

「また、今晚話すよ」

その日の夕食……そう、昨日の夕食から晩餐会などではなく、普通の夕食に代わっていた。

マナーは依然あるものの、そうそう厳しい物ではなくなっていた。

「婿殿、体の方はもう大丈夫ですか？」

エドス王が声をかけた

「義親おやじ父殿、心配かけて申し訳ない」

アシュマが言った。

「アシュマさま？ ブーストが身体に悪影響を与えていると言う事は無いのですか？」

アーチエルがアシュマのことを気遣う。

「いや？ ブーストは最近毎日かけている」と、アシュマ。

「な、なんですって！？ ブーストはあれほど禁止したのに、まだ隠れてコソコソとブーストを掛けて！！」

アーチエルが怒りを爆発させた！

「誰がコソコソなどと……俺は堂々とやっている！ コソコソなどしていない！！ 先の言葉の訂正を求めろ！！」

アシュマと、アーチエルは隣同士の席で喧嘩を始めた。

「じゃあ、正々堂々とブーストを毎日かけていたわけね！？ いつの間にか、わたくしの知らない時に！！ わたくしの知らない所で

！！ わたくしの心配をよそに！！」

「うっ……だが安全だ。ブーストは。もう身体に慣れ始めている。

それにつれてからだの基礎運動能力も上がっている。全てが全て悪いと言うわけではない……」

「禁呪なのよ？ 解明されて無い部分だって、多々あります！ だから心配してるのに……」

アーチエルは涙を流し始めた。

男は女の涙に弱い。

特にアシュマはアーチエルの涙にすこぶる弱かった。

「すまなかつた。アーチエルの気持ちの考えず……」  
そう言った。

「いえ、私の方こそ、まるでアシュマさまが卑怯者みたいに扱って……うっ……」

「いいんだ、もう良いんだよ」

そう言ってアシュマはアーチエルの肩を抱いてやった。

「おほん！ アーチエルはしたくないですよ」

エースティーが咳払いをした。

二人は慌てて離れた。

「よいよい。二人は夫婦も同じの間柄じゃ。で、やや子はいつ出来る？」

アーチエルは仕組みは知らなかったが、どうやらそれが、よく分からない『あの事』を指しているのだと言う事は察していた。

「おとうさま！」

「父上！」

エースティーも父王を窘めていた。

そこへタイミング良く、

「じゃあ、ちよつと皆さん聞いてください。連絡事項です」

ヨデイが言った。

「クーロン人民共和国に巨大な岩塊が出現してクーロンではちよつとしたパニックになっています。この岩塊の正体も含め、今後の出方次第では、その岩塊まで『出向』と言う事になるかもしれません。皆さん心してください。僕からは以上です」

「どのくらいの大きさなんだ？ 『出向』と言う言葉が出る以上、それなりの規模があるとふんだが？」

アシュマは指摘した。

「さすがアシュマ君。眼の付け所が違う。直径五キロの厚さ一キロの岩塊です」

「そんな大きなものが、よくもまあ今まで発見されなかったモノだ」「いえ、山脈の地下に埋まっていたそうです。現地では地震による災害も出たそうです。震度七クラスの地域もあるとか。直径五キロの厚さ一キロのピザパイが起こした災害は決して小さくありません」

ヨデイは言った。

場は暫し沈黙した。

「じゃあ、暗くなった所でなんだけど、アルステイン談義でもしましようか」

エフアールがぶち上げた。

「何!？」

アシユマは激しく動揺しヨデイの方を見た。

ヨデイはアシユマを見て肩をすぼめて見せた。

「エフアール! 何故、今、アルステイン談義なんだ!？」

アシユマは凄いい剣幕で言った。

これにはエフアールも驚き、

「アルステイン談義が何故そんなにいけないの? したらいけない訳でもあるわけ?」

アシユマに訊いた。

「何にもありませんよ、ねえ? アシユマ君」

そうヨデイが言う。

「……………まあ、『お前』がそういうのなら」

「じゃあ、続けて良いわよね?」

エフアールはそう言った。

「じゃあ、アタシからね。聞いた話によると、とても見目麗しい王子様だったらしいわね。ああ、お会いしたかったわ。でも、惜しかったわ。ガルマインが……………」

続けてエフアールが言う。

「あーっ! それ全部アタシの受け売りじゃんかよ。それ言われたらアタシ言う事無くなっちゃうじゃないの!」

アルミナが言った。

「けちくさい事言う子ねえ。じゃあ続き良いわよ。はい」

「悪いわねえ。……………そう、悪い事にガルマインがクーデターを起こした時に、負傷して、何故かそのまま行方不明になっちゃったのよ」  
「惜しい事したわねえ。絶世の美形だったんだってさ。どっかのアホ面亭主と違って」

エフアールが言った

「ア、アホ面亭主って僕の事かな？」

ヨディは言った。

「全くアホにつける薬は……」

ガタン！！

いきなり席を立ててオルバニアンはエフアールを指差しながら、

「おい、ヨディ！ こんなアホ女にアホ、アホ、言われて悔しくないのかよ？ 言うべき所は、ちゃんと言ったほうが、良いんじゃないのか！？」

「アホ女ですてえ？ ちょっと、ヨディ言ってやってよ」

「別にアホって言われても、僕アちつとも悔しくありませんけどねえ」

「何だよ？ 何でいつもアンタは人に花持たせんだよ！」

「落ち着きなさい、オルバニアン。皆が困惑してます」

ヨディがそう言った。

「ちえっ！」

「そういえば、アーチエル姫とアシユマは会った事あるんでしょう？」

エフアールが訊く。

「そうですねえ……」

アーチエルが切り出した。

「好人物でした。好きです。ああいう人は。包容力があるというか

……今のヨディさんに似てるというか」

ぎくっ！

と、したのはヨディで、

「あははは……いや、良いですなあ。アーチエル様に好かれるなんて。たはは。羨ましい限りだ」

誤魔化していた。

「あ、でも恋愛感情とかではなくて、人間的に良い人と言うか……それよりも、アシユマさまです。一目惚れだったんでしょうねえ、あれは。オペラグラスで見たアシユマさまのあの眼。暗い中にも寂

しげに見えたあの瞳。そして凜々しいお顔。引き締まったお体。全てがわたくしのハートをガツチリ掴んで離さなくしたのです」

アーチエルは一人自分の世界へ入って行った。

「なんかこれアルステーション談義と言うよりもアシユマ談義になっていない？」

とはエフアール。

「アーチエル、次々。アシユマのこと話すと長いから」

アルミナが次を要求した。

「……え？ これからだっただのに」

アーチエルが沈み込む。

「次リイナ。いってみて」

アルミナが言う。

「わ、私か？ 私はよく知らん人物や、任務に関連する以外の人物には興味がない。例えばアシユマだが、私がまだ組織にいた当時のアシユマの要注目度ランキングは、トリプルAだったな」

リイナが物憂げに言った。

「そんな事言つて、レンヌ王子とはまだやり取りしてるくせにアルミナがからかう。」

「な、なっ、何でそんな事を、こっ、こっで言つんだよ！！」

「好きなくせに。くすっ」

「……………」

「どうしたんだ？ おーい。リイナ……………まさか」

「うつく。ひつく。えぐつ。えぐつ。うええええ」

「また泣いちゃったよ。レンヌ王子関連は直ぐ泣くなこいつは」

「また泣いちゃったよじゃないぞアルミナ殿！ リイナに謝るのじや！」

キュポアがリイナを擁護した。

「へいへい」

「返事は『はい』で一回じゃ」

「はい！！ もう……………リイナさん虐めてどうも済みませんでした」

「リイナこれでいいか？」  
キュポアが訊く。

うん、とリイナが頷く。

「そちはその位の方が可愛いぞ？」

キュポアが言った。

リイナは一回頷いただけで後は黙ったままだった。

「じゃあ、アシュマ〜」

アルミナが言った。

「俺がアルステイーンに持った印象は……意外と凶太い、かな？」

……それだけだ」

「そ・それだけですか！？ 頭の切れる奴だとか、優しい人柄だったとか、美形だったとか……なんかこう……心に訴えかける物とかなかったんですか？」

ヨデイが訊いた。

「それだけだ。なんでそんなに『アルステイーン』の肩を持つ？  
何か問題でも？」

「い、いえ。ありません。はい」

「オルバニアンは？ まだよね？」

アルミナが訊いた。

「昔々、出来のよい兄と出来の悪い弟がいました……」

オルバニアンが話し始めた。

「またその話しい？」

アルミナが言った。

「まて。黙って訊け」

アシュマはそう言った。

「弟は自分に義理の兄がいるなんて知らされていませんでした。弟は例え義理といえどもその人が兄であると知って、心密かに誇りました。その人の事が本当に好きだったからです。しかしとある出来事があつて兄は隠れてしまい、皆が皆その兄が死んでしまったと思ひ込み、悲しみました……」

オルバニアンはそう言っていた。

「オルバニアン、一体何の話をしているの？」  
アルミナは言った。

「ところが兄は生きていました。ある時から弟は兄に褒めてもらおうと、自分には不向きな事でも頑張つてやりました。そして一人前になりたくて……でもそれは民の為で……でも本当は兄の為で、兄がちゃんと身分を明かせられる様になるまでに、一人前になりたくて……」

オルバニアンは言葉に詰まってしまった。

「どうしたのよ？ オルバニアン？」

アルミナは怪訝そうに訊いた。

オルバニアンは言葉に詰まったままだった。

何をどう話して良いのか皆目見当がつかなかった。

頭の中が真っ白になってきた。

涙が滲んで来た。

「王様！ 済みません！ 少し失礼します！」

オルバニアンは顔を伏せたまま立ち上がり、そして庭が見えるテラスの方へと走って行った。

「オルバニアン！」

立ち上がりかけるアルミナを、

「待てアルミナ！」

制したのはアシュマの一言だった。

「何故……」

アルミナが言いかけるのを、やはりアシュマは手で制した。

そして変わりに行こうとしていたのがヨディだった。

「陛下、暫しの間、失礼致します」

ヨディはそう言った。

「うむ。よくよく慰めてくるように」

エドス王は言い、顔をヨディに向け、手で伏せて、

（くれぐれも弟君を大切に。アルステイーン殿）

余人には聞こえないよう声を潜めて話した。

ヨデイは、

はっ！

と、思わず頭をエドス王に下げていた。

そして立ち上がり、礼をするとオルバニアンの元に向かった。

オルバニアンはテラスのベンチに一人座り、

「はあ、俺は一体何をしているんだろう……」

そう言つて深い溜息をついた。

「多分、アルステイーンは、あの話で分かつたろうし、そうになると黒龍号にも居辛くなるな。どうしようかなあ。オロに言つて配置換えしてもらおうかなあ」

オルバニアンは一人ごちた。

「本当にオロにも困つたもんだ」

そう言う声がして、オルバニアンは驚き、振り向いた。

「ヨデイ……アルステイーン」

「いいぞ。好きなほうで呼んで貰つても」

「俺……、その、上手く立ち回れなくてさ……ははは……はあ」

「よもや、さつきみたいに私の船から降りようなどとは言つまいな？」

「そ、それは……」

「私はお前に過大な期待をかけ過ぎたのかも知れぬ。こんな言葉では許しの言葉にもなるかどうか分らんが、許してはもらえないだろうか？」

「アルステイーン……義兄さん」

オルバニアンは涙が滲んで来た。

「私はノリトリアに来た時からお前の兄のつもりでいた。王位継承問題でお前が行方不明になった時どんなに嘆き悲しんだ事か。そんな日々が何年もした時、お前は、私の目の前に現れた。勿論お前を

ルーランとして認識していたわけではない。だが、お前にあのルーランの面影を見出し、弟のように思ってきたことに間違いは無い」

アルステイーンはそう言い切った。

「兄さん！ アルステイーン義兄さん！」

オルバニアンは今にもアルステイーンに飛びつこうとしている。

「こんな私でも義兄と呼んでくれるか」

アルステイーンは腕を大きく開いてオルバニアンを迎え入れようとした。

オルバニアンはアルステイーンの胸の中へ飛び込んだ。

「義兄さん……義兄さん、義兄さん！」

「オルバニアン」

「義兄さん、僕もだ。昔から馴染みのアルステイーン様が、兄さんだったらどんなにか良いだろう。どんなにか幸せだろうって……でも義兄さんは行方不明になって……」

「つらい思いをさせたね、オルバニアン」

「義兄さん……」

二人は明るい顔をしてテーブルへ戻ってきた。

「失礼致しました。陛下」

『ヨディ』が言う。

「どーも王様すみません」

オルバニアンが言う。

「おい、それはちょっと碎けすぎだろうオルバニアン」と、ヨディ。

「だって『さつきは』イイって。『過度の期待だった。すまない』って言ったじゃんかよ。だから俺は素に戻ってだなあ」

「だからってそれは碎けすぎだ」

「まあ、よいよい。良いではないか二人とも」

エドス王は言った。



「アシユマさま。アーチエルはまだ呑み足りませぬう。うふふ」  
アーチエルは抵抗を見せた。

「アーチエルと一緒に寝たいんだ」

アーチエルはどきりとさせられるその一言に『酔った』

「まあ、アシユマさまだったら、えっち。抱いていつてくださる？  
うふふ」

「良いとも」

アシユマはアーチエルを軽々と抱き上げた。

そして皆に眼で挨拶をした。

特にエドス王とエーステイー王子は申し訳なさそうにしていた。

アシユマは大丈夫だと眼で挨拶してその場を去った。

その場を去るときにアンを眼で呼んだ。

アーチエルはよっぽど呑んだのだろう。

今にも眠りそうである。

アンは、はたはたとアシユマ達を追いかけた。

何故かは知らぬがキュポアも付いて来た。

「アン、アーチエルの着替えを、手伝ってやってくれないか？」

アシユマはアンにそう『命じ』た。

「はい、畏まりました」

「後でまた来る」

「『寝』に来るわけですか？」

「駄目か？」

「いいえ？ ご随意に。ただし『間違い』だけは起こさぬよう」

「殊更それを強調するな」

「何が間違いなのですか？ うふふ」

アーチエルは相当酔っているようだ。

言葉の断片しか取ってない。

「何も間違っちゃいないよ。安心してお休み」

「……『ぎゅ』して」

「分かった」

アシユマはその場で立ち止まり、アーチエルを強めに抱きしめた。  
「あつ……」

アーチエルは思わず声を漏らし、少し苦しそうな表情をしたが、次の瞬間には幸せそうな表情をしていた

「アーチエル、大丈夫だから、少しお休み」

「はい……すうー」

アーチエルはとうとう眠りに入った。

「相変わらず、えっちなう」

「なんだキュポア。いたのか」

「居てはいけないのか？」

「いや」

アシユマはアーチエルを部屋まで抱えて連れて行って取り合えずベッドに寝せた。

アシユマがアンと一緒にアーチエルの入浴を手伝う。

主にアーチエルに移動の時にだが。

入浴の途中でアーチエルは目が覚める。

「あ、アン……。わたし……」

「良いのですよ。後で」

「そう……」

アンが眼でアシユマは取り合えず良いと言った。

そこからはアンの仕事だ。

アーチエルはアンの『いいなり』で入浴を済まし、身体を拭き、髪をかわかした。

そして、アンは、アーチエルを寝巻きに着替えさせた。

その間にアシユマは自室でシャワーを使ったため部屋を出たするとキュポアがアーチエルの部屋の入り口で待っていた。

「どうしたキュポア？」

アシユマが尋ねる。

「姉様にえっちな事しないように見張ってた」

「そうか。でもいいだろ？ えっちな事したって？」

そう言いながらアシユマは歩き始めた。

「駄目に決まっておろうが！ 姉様はまだ嫁入り前の身体じゃぞ？」

「意味知ってて言うてるか？」

「し、知っておるワイ！ お、男と女が……その……」

「アーチエルよりかは知っていそうだな」

「ば・馬鹿にするなあ！」

「ははは、すまん。じゃあ、好き合っている男と女がえっちい事してはいかんのか？」

「そ、それは駄目に決まっておろう！」

「なぜだ？ お前のでて親も認めているぞ？ 『媚殿』ってな」

「そ、それは『ケビン』じゃ！」

「それを言うなら『詭弁』だろ」

「う、うるさいな！ これだから怪獣は意地悪で嫌いじゃ。この点ヨデイ様などは……」

その時アシユマがぼんとキュポアの頭の上に掌を乗せ、

「俺は結構キュポアのことには気に入ってるけどな」

そう言った。

キュポアは顔を真っ赤にし、

「そ、そ、そ、そんな三文芝居に引っ掛るほどわらわは……」

「ははは。そうだな。引っ掛らんか」

「あ、当たり前じゃ」

「そうか」

「なあ、怪獣」

「ん？」

「わらわにも『バヴェル』を動かす力はあるのじゃろうか？」

俄かに深刻そうな顔をした。

アシユマは優しく、

「鬼虎の柄を握ってごらん？ そつとだ」

そう言った。

「柄か？ 分かった」

そしてキュポアは恐る恐る柄を握ろうとした。

突然

バチッ！

音がしてキュポアは慌てて手を引っ込めた。

「怪獣、今のは……？」

「大丈夫。キュポアには『バヴェル』を動かす力は無いよ」

「そうか……」

安堵とも残念とも取れる深い溜息をキュポアは吐いた

「で、どこまでついてくる気だ？ もう、俺の部屋の前だが？ —

緒にシャワーでも浴びるか？」

「だ、だれが！！ おぬし一人で浴びるがよい」

キュポアはアシュマの元より走り去った。

そして最後にこちらを向き

「い〜〜〜〜だ！！」

悪態をついた。

アシュマはシャワーを浴び終わると、またアーチエルの部屋へと向かっていった。

アーチエルの部屋の前まで来ると、アンが待っていた。

「アーチエルは？」

そう訊くと

「今は起きてらっしゃるかと思います」

そう答えた。

「そうか」

とだけアシュマは応えて、アーチエルの部屋のドアをノックした。

コン、コン。

返事はない。

アシュマはアンを見た。

今度はアンがノックしてみる。

コン、コン。

返事はない。

「おかしいですねえ？ ……アーチエル様、アンです。中に入りませう」

カチャリ、と、ドアノブを回してアンとアシユマはアーチエルの部屋に入った。

アーチエルは鏡台の前で、うつら、うつら、としている。手にブラシを持っている。

どうやら髪の毛を梳かしていた様だ。

「アーチエル、アーチエル」

声をかけてやると、

「あっ、アシユマさま……」

そう言っつて、アシユマにもたれ掛つてきた。

そして、

「すー……」

そうして寝てしまう。

「アン、もういい。後は俺が面倒を見る」

アシユマはアーチエルを抱き上げた。

「そうですか？ では……」

アンは部屋を退出して行った。

ベッドを剥いでおいて、アーチエルをゆっくりと抱き上げそして優しく寝かせた。

「うん」

アーチエルは声を出した。

「どうやら半分は覚醒しているようだ」

「どうしたんだい？ アーチエル」

「早く隣に来て」

「分かったよ、少し待ってておくれ」

アシユマは寝る用意を整えてアーチエルのベッドにもぐりこんだ。すると、アーチエルが側に来た。

アシユマがアーチエルを抱いてやる。  
すると、

「もっと『ぎゅ』して」

アーチエルがねだる。

「もっと『ぎゅ』だね？」

アシユマが訊くと

「はい」

そう言って返してきた。

アシユマは少しきつめにアーチエル抱いてやった。

アーチエルが密着してくる。

こちらがどうにかなりそうだ。

やばい。

「キス」

そこでキスをねだるかと思った。

もうどうにでもなれと、ディープキスをする。

するとアーチエルはすっ、と離れ、

「もっと優しいのにして？」

アーチエルは言った。

「はいはい」

アシユマが応えて言うと、アーチエルが

「すー……」

安らかな寝息を立てて眠っていた。

（俺はピエロだな）

内心苦笑していたが、アシユマはそんな悪い気にはなっていなかった。

## 第二節 クーロンのトゥ・ライ

それは、まだ日の出には遠く、朝焼けが見え始めた頃、突然、轟音と共にやって来た。

巨大な鉄の塊。

針山のように刺さっている砲身。

そびえ立つ艦橋。

配下の艦船を従えてやって来たのは、旗艦クラスの大戦艦だった。

小型艦は収穫前の麦畑に何艘も降り立ち、蹂躪しゅうりゃくした。

「旗艦クラスの大戦艦は、王宮の前にある広くて大きな麦畑に着陸した。」

この光景は前に、一度見た。

レキシタニアの人々ならば、前に、一度見た。

そう、それはアーチェルが、かどわかされたあの日。

国中が蹂躪された日。

正にその日の再来だった。

「そう、あるうことが、起こってはいけない事が、また起こってしまっただのである。」

降り立つ兵士。

なぎ倒される、刈り取り前の、麦の穂。

そして焼かれる村々。

「！！！」

アシュマはいち早くこの異変に気付き眼を覚ました。

「起きろアーチェル！！」

アシュマはアーチェルの身体を揺り動かした。

「あっ、つう……そんなに揺さぶられては頭に響きますう」

「二日酔いだ。只の。そんな事より外の様子を見てみる！」

「外お？」

アーチエルは、痛む頭に手をやりながら、窓の外を見た。

「あれは！？ ……いや…いやあ、いやああああっ！！！」

アーチエルは着替えもせず、闇雲に外へ出ようとし、アシユマに止められた。

「いやあよ！ ガルマインよ！ お願ひ、怖いのに！ 見逃して！！！」

「安心しろアーチエル！！ 俺がいる！！！」

「アシユマさまが……」

「そうだ。俺がいるじゃないか」

コンコン！

ドアをノックする音がする

「誰だ！」

「アンです」

「証拠は？」

「アルヌーでの夜明け前、アシユマさまは私の事を……」

「わ、分かった！ アンだ」

「私は今の続きが聞きたう御座います」

アーチエルが言った。

「また今度な」

そう言いながらアシユマはドアを開いた。

アンはアシユマを押しつける様にして、アーチエルの元へより、

「今度もお連れ下さいね？」

アーチエルに抱きついた。

「そんなこと言ってる暇があったら、アーチエルを動ける格好にする！！」

アシユマが叱った。

「済みません。つい」

アンが謝まる。

「ほかにアーチエル以外で狙われそうな者はいるか？」

「以前父上が言っております。男子の血筋は『力』がでない。

今私以外で女系の家族といえば……」

アーチエルが言葉を濁す。

「キュポアか！」

アシユマが言い放つ。

「はい」

「まだ動けぬか？」

「もう少し」

アンが詰めているらしい。

「よしっ……っ」と

アンが終わらせたらしい。

……と、見てみれば、それはアーチエルのボディーマー。

そう、あの凜として可憐な感じを醸し出す例のアレである。

アーチエルが大事に持っていたため傷みは殆どない。

凜として可憐なアーチエルは健在で、何度もその姿を見ているのにもかかわらず、アシユマは一瞬眼を奪われ、思考と行動が止まった。

「アシユマ……さま？」

アーチエルがアシユマの顔を覗きこむ。

「っつと！……見惚れている場合じゃないな。キュポアのところへ

行く！アーチエル、今回、どういっ敵かまだ見極めがつかん。最

初から鬼虎の峰は返さんぞ。いいな!？」

「そんな……」

「無駄な血を見たくない、というお前の気持ちは、分からんでもない。だが相手もわからぬ敵では、こちらが遅れを取る可能性が高い。そうなるここは斬って先の先を取るしかない」

「分かりました。ご存分に。アシユマさま」

「相済まん」

「キュポアの部屋は？」

「そこを右手にです」

廊下を曲がりきった所で、アシユマは、

「きゃあつ！！ 何をするのじゃ無礼者！！ ヨデイ様、怪獣  
！ もがっ」

連れ去られようとするキュポアの声を聞いた。

「アーチエル!?」

「行って下さい、アシユマさま！ こちらは大丈夫ゆえ」

「相分かった！」

言うや否やアシユマは走り出し、キュポアを捕える悪漢二人をす  
ぐさま切り伏せ、猿轡を解いてやった。

「大丈夫か？ キュポア」

「怪獣！ よう来てくれたあ」

「さ、アーチエルと合流し……」

「きゃああつ。アシユマさまあ！」

「今度は向うか。何が『大丈夫ゆえ』だ」

アシユマはキュポアを小脇に抱え走り出した。

「おおっ！ 早いっ！ ながくん！」

「喋るな。舌を噛むぞ？」

(先に言え、馬鹿者。噛んでしまったではないか)

アシユマは電光石火の速さで走り抜け、廊下を左側に曲がると、  
廊下の向うに逃げる悪漢たちを見つけた。

「キュポア、頭を下げてろ」

アシユマが言った。

「ふっ！！」

と、言う気合と共に、鬼虎が抜かれ、キュポアの頭上を通り、何  
かが飛んで言った。

気弾のようであった。

アシユマが『蛭』と呼んでいるものだった。

それは、吸い込まれる様にして命中した。

アシユマは、アーチエルと、アンの猿轡を外してやり、そこで改  
めて三人の戒めを解いた。

「王と王子が気がかりだ。行って見よう」

アシユマが言った。

「父上でしたら二階へ上がって、南の一番奥の部屋に御座います」  
「相分かった。行って見よう」

その時アシユマの携帯端末に連絡が入る。

「アシユマだ」

『ヨデイです。朝っぱらから、何の騒ぎですか？ これは』  
ヨデイが訊いてきた。

「どこかの国がアーチエルをさらいに来たんだよ」

『矢張りそうでしたか。そうではないかと……』

「そういうそっちはどうなんだ？」

『今、黒龍号に立てこもり中です。皆さんそちらにいない方以外、  
大概集合しています。でも敵方の人は見向きもしませんねえ』

「そんな呑気な事を言っている場合か！ 少しでも王子を保護する  
とか、王を保護するとか……」

『しましたよ』

「え？」

『だから、王も王子も保護しましたってば』

「分かった。今からそちらに向かう」

『分かりました。お気をつけて』

「分かった」

ぴ！

と、言ってアシユマは端末を切った。

「か、怪獣、ち、父上と兄様は大丈夫なのか？」

「大丈夫。無事だ。ヨデイ達が黒龍号に保護している。これから黒  
龍号で暫しの間、脱出だ」

「それでは国民を危険な目に合わせることに……」

アーチエルが危惧した。

「……には、ならないのさ。目標の人間が逃げてしまえば呼べど叫  
べど来やしない。居ない所で村人を殺してもそれは、ただの虐殺で  
しかない。それをやれば国際問題になってえらいことになる。それ

には先ず俺達が逃げなきゃ意味がない」

「アシユマさま！ お待ち下さい！ そう言う事でしたら私は逃げません。民を残して去る事など出来ません。きっと父上も同じだと思います」

その時アシユマの携帯端末に連絡が入る。

「あ」

アシユマが頓狂な声を出す間にアーチエルがさかさず端末を取る。  
ピ！

「はい、アーチエルです」

『え？ あれ？ アシユマ君の携帯だと思ったんだけどなあ？』

「はい、アシユマさまの携帯を一時的に借りて……きゃっ、いやっ、だめえっ……！」

アーチエルはアシユマに、携帯を取り上げられるのを、嫌がった。

「アーチエル、返しなさい、はやく、ほら、」

アシユマが携帯を取り返そうとしていた。

「アシユマさまっ……！ 泣きますよ……？」

「うっ……」

そう言われては手を出せないアシユマだった。

「ヨデイ様？ お父様はいかがしておいでですか？」

『いや、その事で連絡したんですよ。いや国王陛下は脱出すると聞いたら、俄かにご乱心遊ばされて、今ちよっと手が付けられない状態だね、早くアシユマ君に来てもらって、何とかしてもらおうと思っただけですけどね、そちらも取り込み中？』

「いえ、左程では……ヨデイ様、お父様と代わって頂けます？」

『こくお……国王陛下、ア、アーチエル王女からです。』

『はあ、はあ。なんとアーチエルからとな……エドスである』

「はあ、良かった。お父様ご無事で。アーチエルは、今は、この国を離れません。それが民のためになると思っただけからです。お父上は？」

『アーチエル、よう言った！ それでこそアップルトンの血を引く

物！ 決して退くでないぞ！」

「はい、父上！ 私もそれが言いとう御座いました。では」

『うむ。お前も堅固に』

「はい！ 父上も！ では、失礼します！」

「何か力が入っているなアーチエル」

アシュマが言う。

「当たり前です。これから戦に出るのですから」

「戦を人一倍嫌うお前がどうやって戦う？」

「言葉で！！」

「怪獣よ、だめじゃ。姉様はこうと決めたら梃子でも動かんぞ」

キュポアはそう言った。

「何を言うのです。それはアシュマさまのことです。一旦こうと言  
い出したら、なかなか意見を变えませぬ」

アーチエルは一人興奮しながら言った。

（やっぱり今のアーチエルは、キュポアが言ったとおりだよ）

アシュマは思った。

『アシュマ・アトー、アーチエル・アップルトン、キュポア・アッ  
ブルトン三名に次ぐ！！ 直ぐに、正門前の麦畑に來い！ こちら  
には人質がいる！ 下手な考えは起こすな！ 十分待つ』

スピーカー越しの声が聞こえてきた。

「クソ！ 先手を越されたか！ これでは逃げられん。なんと手際  
の良い奴だ。手強い」

「行きます！」

そう言ってどんどん行ってしまおうのが、今日のアーチエルだった。

「待て！ 先走るな、アーチエル！！」

アーチエルはアシュマに肩をつかまれた。

「何をなさるのですか！！」

「だから、先走るなど言っている！」

「こんなことで時間を潰している場合ではありません！」

「焦るなど言っている。勝機も見出せなくなるぞ！」

「人質がいるのですよ？ 勝機云々より人質の命を優先しないと…

…！」

「当たり前だ！！」

アーチエルは、

びくっ！

となり身をすくませた。

「……仕方ない、俺が盾となる。俺の前には絶対出る。ないいな！？」

アシユマは言った

「はい、分かりました……」

アーチエルは渋々承知したような感じで、返事をした。

「そうしょげるなアーチエル。他の皆も良いな」

「はい」

キュポアが言った。

「はい」

アンも返事をした。

……！？

アン！？

「アン、お前黒龍号へ……」

「行く暇など無かったでは御座いませんか。それに私がいないとア

ーチエル様やキュポア様の身の回りのお世話が出来ませぬ」

「まあ、よかる。アンを戻している暇が無い」

「はい」

(嬉しいがるか？ ここで？ 普通)

アシユマは呆れた。

『どうした？ 時間が無いぞあと、一分だ』

またスピーカー越しの声が聞こえてきた。

「急ぎませんと！ 人質が……」

アーチエルが慌てた。

「あせるなと言っておるうに」

アシユマは言い、

「みな耳を塞げ」

言った後、

「暫し待たれよ！！ 今行く！！ 人質を殺した場合お前らの命は無いと思え！！」

極大の大音声たいおんじょうで相手側に伝えた。

『分かった！後三分待とう』

「アーチエル三分あればいけるか？」

「ええ、この小さな館ですもの」

王宮の門……と言っても本当に門で跳ね橋も無ければ何も無い、只の門であったが…… その門から出て来たのは、アシユマ、アーチエル、キュポア、アンの四人だった。

その前には大艦隊がひしめいており、地上に降りている艦艇などはごく一部分だった。

そして麦畑には無作為に集められた、人質二十人ほどが、王宮に向かつて座らされていた。

そして他には、兵隊、兵隊、兵隊……。

アーチエルにとってはデジャヴュに近いモノがあったのだろう。

さっきまで怒りによって忘れ去られていた物、即ち思い出したくなかったモノが再び頭をもたげアーチエルは激しく震え始めた。

それは恐怖と呼ばれているものだった。

「アーチエルどうした？」

アシユマが、アーチエルの様子が異常なのを感じ取り、問いかけた。

「アーチエル？ どうした？ アーチエル？」

「な……何でも……御座いません……」

しかしアーチエルは崩れ落ちながら涙を零していた。

アシユマが崩れ落ちる直前でアシユマはアーチエルを抱きとめた。

(これは一気に精神的負荷が掛かったな)

アシュマの指摘どおり、アーチエルには恐怖により、精神的負荷がかかり、立つ事も歩く事も出来なくなっていた。

(俺が抱えあげるか)

アシュマが抱えようとした時。

「わたくしがお支えします」

アンの声が聞こえてきた。

「すまない、アン」

「アン、わらわも支えるぞえ」

キュポアもアーチエルを支えた。

実はキュポアとアーチエルとは十センチ程しか身長差が無い。担ごうと思えば担げるのである。

「どうした？ トラブルか？」

隊長格の男が言った。

「いや、なんでもない」

アシュマは言った。

(あの男が隊長格か？ スピーカー越しの声だ。なら試してみる価値はあるな……)

「アーチエル、アン、キュポア、ここにいろ。動くなよ？」

アシュマは何の前触れもなく、その隊長格の男に向かって走った。その場にいる全員の不意を突き、アシュマの脚の速力と相まって一瞬の内に隊長格の男の背後を取っていた。

最初にした事はホルスターごと拳銃を真つ二つにした。

そして納刀した。

「お前がこの隊長だな？ 下手な事はことはするなよ？ 俺の鬼虎がお前を狙っているからな」

「流石だなアシュマ・アトー。だが、あれではどうだ？」

「！」

アシュマが見たものは、アーチエル達を人質に取る特殊部隊アサシンの者だった。

「あいつ等は私が死ねば自動的にアーチエル達を殺すよう命令を受けている」

「嘘だ。アーチエルを失えば永久にバヴェルの秘密は失われるぞ！」  
「嘘なものか！ 今回のターゲットは君だ！ アシユマ・アトー君いや？ 鬼虎と言ったほうが正解かな？ アーチエルやらなんやら他の者は君を縛る鎖だ。アーチエルなどは寧ろ死んでくれた方が良いい。ノリトレアのバヴェルが使えなくなるからな。いや寧ろ全員死んでくれた方が、後腐れなくていいか？ はあっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

（嘘か真か試してみるか？ だめだリスクが大きすぎる。アーチエルの命を天秤になど掛けられん）

アシユマは心の中で齒軋りしながら、

「おい、貴様たちクーロンの者だな？ 貴様の名前を教えてくださいな  
いか？」

アシユマが訊いた。

「ん？ 私か？ 確かにお察しの通りクーロンのトウ・ライ大佐だ」  
「覚えておこう。いずれお前の命は俺が貰い受けよう」

「ん？ ははは。好きにしたまえ」

アシユマは、この男の事を、豪胆なやつと思った。

そして頭も悪くないと。

「卑怯な手を使って済まなかった。君は私に貸しがあると思うようになるだろう。だが君は二度とこの私の姿を見ることも叶わなくなるだろう」

「何故だ？」

「きみは人体実験に掛けられて一生実験室より外へは出られなくなるだろう」

「そう上手く行くかな？」

「何？」

トウ・ライは聞き返した。

トウ・ライはこの一言に不気味な物を感じたからだ。

「鬼虎は俺と共に在り、鬼虎もまた俺と共に在る。そのことを忘れるな」

アシユマは言い放った。

この言葉はさっきの言葉同様……いや、それ以上に不気味なものを感じた。

トウ・ライは多少苛立ち、

「能書きは良いから鬼虎をよこしたまえ」

そう言った。

「柄は握らん方が良いぞ？」

「何故かね？」

「常人が持つては痛みが走る」

「……………ご忠告痛み入る」

「ここで、俺の忠告に耳を貸した奴を始めて見たよ」

アシユマは鬼虎を渡した。

アーチエルはアシユマが鬼虎を渡し、後ろ手に手錠を掛けられるのを見た。

「いやあああつ！！ 私なんかのために、アシユマさまが、アシユマさまが！！ あの誇り高いアシユマさまが！！ 私があそこで黒龍号に乗るのを拒んだから……………」

「お前も人の事を言えんぞ？」

アサシンは言った。

「何よ！ アシユマさまを返して！ わたくしのアシユマさまを！」

「おいなんでこんな小娘一人に手を出しちゃいけないんだ？」

「知るかッ！！ これっぽっちも、傷を付けるなと言うのが、トウ・ライ大佐のお達しだからな」

「で、待遇はVIP並みって言うんだ。トウ・ライ大佐の命より、優先されるってんだから、訳が分からん」

結局アーチエル等も取り押さえられ連行されて行った。

そしてアーチエルらは多少抵抗はしてみたものの、結局、旗艦『パイロン』に連行された。

その時『パイロン』に忍び込む小さな影が一つあった。

引き上げる艦隊をモニター越しに見ながら、ヨディは、

「ありゃあクーロンの艦艇だなあ」

ぼやいていた。

「で、こちらがアーチエル・アップルトン王女ですか」

トウ・ライ大佐は言った。

アーチエル達を一室に閉じ込めておいてトウ・ライはそう言いかけた。

アーチエルは視線を外し沈黙を守った。

その姿はまるで『昔』の人形に戻った様でもあった。

美しくとも儂げに佇む人形。

それがトウ・ライの第一印象だった。

アンは目を伏せ眼がちにし、キュポアはふんぞり返って怒りを顕にし、腕を組んで頬を膨らまし、あさつての方向を向いていた。

「おやおや、これはまた嫌われたものだ」

「アシユマ殿だが……」

アーチエルが反応する。

そして、

「卑怯者。クーロンの方々がこんな卑怯な手を使ってくるとは思いませんでした。今すぐアシユマさまを返しなさい。さもなければ、今ここで舌を噛み切ります」

アーチエルはそう言った。

「そんな事をすれば残されたアシユマ殿は悲しむでしょうに……」  
トウ・ライ大佐は言った。

「聞こえなかったのですか？ アシユマさまを返しなさい。それ以外の交渉ごと、話し合いなど、アシユマさまが返されるまで、一切テーブルに付くつもりはありません」

「それでは困るんです。科学者どもが早くサンプルを出せってうるさくてね」

「早くアシユマさまを返しなさい」

「ふむ。アシユマ殿のことしか頭に無いという事か。じゃあ、せめてそのアシユマ殿と、少しでも接見させてあげよう」

トウ・ライ大佐はリモコンのような物のボタンを、ぴっ、と押すと壁の面が迫り上がり全面ガラス張りの壁が現れた。

すると、壁の向うにはアシユマが椅子に拘束されていた。

首、胸、腹、腰、上腕、肘、手首、腿、膝、足首……見るからに窮屈そうである。

アーチエルはそれを見て、

「なんてひどい事を……」

呟いた。

「トウ・ライ大佐！」

「はっ！ ……あ……」

トウ・ライは思わず、

カツン！

と、敬礼をしまっていた。

それだけの威厳が今のアーチエルにはあった。

「アシユマさまへの、あの拘束は行きすぎです！ 今すぐあのような拘束を止めなさい。これが聞き入れられなければ、国元連に人権査察団の査察要求をし、この事を世界の人々の前にさらけ出します。さあ、如何に！」

「しかしアシユマ殿には普通の拘束具が利かんです。手錠などはすぐさま引きちぎりますし、拘束服にしたって、やはり引きちぎりました。拘束に関して言えば、もうお手上げなのです」

そう言っている間に椅子型の拘束具は壊されてしまった。

「あつ、ちゃー……。これでもう彼を縛るモノがなくなってしまうぞ……。そうだ！」

アシユマの部屋でアシユマは手首をさすっていた。流石に今以上の拘束具を持ってこられたら、今日はもう無理だろう。

体力が続かない。

彼はそう思っていた。

そしてこのガラス張りの部屋、四六時中、四方八方から監視されていると見たほうがいい。

案の定トウ・ライが入ってきた。

しかし、なんと、アーチエルも一緒だった。

「トウ・ライ！ 何のつもりだ？」

アシユマは訊いた。

「君に忠告をしようと思っただけね」

トウ・ライは応えた。

「忠告？」

「だめよ！ アシユマさま聞いては駄目！」

アーチエルは叫んだ。

「今度から、君が拘束具を、壊したり外したり、はたまた脱走を試みた場合、彼女の頬を一発張る。分かったかね？」

「おのれ、トウ・ライ……。卑怯な」

「アシユマさま、わたくしに構わずお逃げ下さい。わたくしが愚かでした。あの時一緒に黒龍号に乗っていたければ、アシユマさまはこのような目に遭う事も無かったですように。御免なさい。ごめんなさい。ごめん……なさい」

アーチエルは口を押さえ泣き始めてしまった。

「分かった。そちらの要求を呑もう」

アシユマは言った。

「アシユマさま！」

「そうか。そう言ってくれればと助か……」

「勘違いするなよ？ トウ・ライ。これは俺からの警告だ。もしア  
ーチエルに指一本でも触れてみる？ 直ちに貴様等を皆殺しにする  
ぞ」

「はは、どうやって？ 君は丸腰だ」

「試してみるか？」

「なに？」

するとアシユマはなにやらぶつぶつと言いながら、手で印を組ん  
で念じている。

それに不気味さを感じたトウ・ライ大佐は、

「何をしている！？」

そう言つて、拳銃でアシユマの額を狙った。

ピ。ピ。ピ。！

と、携帯端末のコール音がした。

「私だ！ 何事か！？ 今、忙しい！」

トウ・ライ大佐は叫んだ！

『緊急事態です！ 大佐あ！ 鬼虎が……鬼虎が暴走を始めてます

！ 今、鬼虎を中心に数千度の熱が放出されています！ このまま

では床が融け落ちてエンジン部分に直撃します！！』

鋼鉄製の分厚い天板が、オレンジ色の飴の様になって、ぐんにや

りとひん曲がつて、今にも床に届きそうになっていた。

その鋼鉄製の机がある部屋は、熱気がこもり既に数百度に達し、

誰もここに近付くことすら出来ないでいた。

「なんだと！ ……そうか、お前か！ アシユマ・アトー！！ 止

めろ！ この事態を今すぐ止める！！」

アシユマはまだぶつぶつと何かを言っている。

鬼虎よ、我が前にその力を示せ、と。

「やめろお！！」

激昂したトウ・ライは拳銃を突きつけ撃った。

アーチエルは、自分の身を呈してアシユマをかばったが、一瞬遅  
く、弾はアシユマを貫通……している筈だった。

アーチエルは絶望感に駆られ、思わず後を振り向いた。

その弾はアシュマの額より五センチメートルほど手前で浮いていた。

そして、アシュマが印をとくとコトリと床の上に弾が落ちた。

「念導……境界面……嘘だ！ こいつは何も持っていないはずだ！ 念導境界面を形成できるものを！」

「大佐ア！ 鬼虎からの熱の放射が止まりました！ ですが、この研究施設はもう駄目です」

「研究施設がもう駄目だと？ フザケルな！ もう少しで始まるというのに！ 別の部屋を探せ！ 大至急だ！！」

『はっ！！』

「責様、何をした？」

トウ・ライ大佐は言った。

「俺と鬼虎は常に共にある。そう言った筈だ。手錠でも何でもつけるがいい。最早意味を成さぬ」

アシュマはそう言った。

（この男、何があるか分からん。魔導石があるが無かるうが、鬼虎があるが無かるうが、もう関係あるまい。仕方あるまいな。好きにさせるか。それしかあるまい。この男の暴走止めるには。しかしケジメはケジメだ）

トウ・ライはそう思いアシュマに声を掛けた。

「で、だねアシュマ殿、取り合えず手錠だけでもつけてくれたまえ」

「最早意味を成さぬと言ったが？」

「こう言うのは形。形式こそが大切なのだよ」

「クローン人らしいものの考え方だな。あと、ノリトレア人もそうだな」

「まあ、そういう事にして置いてくれ」

「軽い奴。変節漢だな」

だが臨機応変に対応できる不思議な奴。

堅い所は奴の義理人情がそうさせる部分かもしれない。

アシユマはこのトウ・ライと言う人物をそう評価した。

「まあ、そういうな。これも仕事の内でな。先ず、君達には血液検査をしてみらおう」

ここはレキシタニア。未だに黒龍号は人質奪還の為に動いてはいなかった。

「先ずもってアーチエル王女、キュポア王女、アシユマ殿、アン女史の救出を第一義とするが……………」

オロは先ず切り出した。

「『するが』、『するが』？ 『するが』！？ 『するが』！？！？ ……ふざけるでない！！ 『します』で止めんか！ 『します』で。人の命が懸かっておるのだぞ！！ 何故それに搾らない？ 『第一義』を？ それより他にまだ何かあるのかこの守銭奴！！」

「誰だこのジジイは」

全てを知ってる黒龍号のスタッフは、おろおろ、あたふた、していた

「ジジイ？ よーし、知らんと見えるな。わしはなあ！ レキシタニア王国の王！ エドス・アップルトンじゃ」

「ああ、しなびた国のしなびたジジイか。俺には興味ない！！」

「なあにい？ なんじゃとうー！！ お主には、歴史の重みと言うものまるで分かっておらん。そもそも我が王家は…………」

「そんなものを訊いた所で、一文の得にもならん！ 話を続けるぞ」

「『得』じゃと！ そんなものと『人の命の重さ』を天秤にかけようというのか！ おぬしは！！」

「そんなものはこちらから願い下げ。何せ圧倒的に金の価値のほうが高いからなあ。そうさ、金だ！ この世の中、全て金だ！ 金が何よりも優先されるのだ！」

「オロ、道具フェチはいいからさあ、話し、続けてよ。こっちはアシユマ君たちを助けなきゃならないんだしさ！」

ヨデイが珍しくイライラしながら言った。

「ど、道具フェチだと？ 何だその道具と言っるのは？ 私は、道具フェチなんかじゃないぞ？」

「道具つてのは金のことだよ。オロ。早く話の続きを話してくれ」  
ヨデイが大分切れ掛かっている。

エファールも、こんなに苛ついているヨデイを見るのは初めてで、怖くてどうして良いか分からず、おろおろしていた。

「よかる。話そう」

オロが言い出した。

「クローンでは例の首都爆撃から今日まで政情が不安定なようだ。ある情報筋からの話によると、民主独立三権分立をスローガンに、各地でゲリラ活動をやっているらしい。そして、そのゲリラ活動で、クローンの一党独裁政権を揺さぶり、真の民主主義国家を築こうとしているのだと言っ。で、ヨデイ、君たちは、現地スタッフと協力して、状況に対処して欲しい。それがアシユマ殿をすくう手立てにも繋がる」

「あの？」

アルミナが話の途中で手を上げた。

「ん？ 小娘か。話の途中だが？ ……まあいい何だ？」

オロが物憂げに言った。

「状況に対処するってどういう……それにアシユマが助かるってどういう……？」

「慌てるな小娘。状況に対処するというのは、ゲリラと一緒に頑張って反抗戦を行い現政権に揺さぶりを掛けることだ。中にはアシユマ殿を収容している施設も攻撃する事もあるっ。そこを攻撃すればアシユマ殿も脱出しやすくなると言っものだ。要は各地でゲリラ活動をあおり現政権に揺さぶりを掛ける。こっ言っことだ」

この発言に憤慨したのか、ヨデイは、

「オロ！ そんな片手落ちの作戦、認めるわけにはいかんぞ！ 収容施設を攻撃すればアシユマ君が脱出しやすくなる？ そんな理屈

は子供だましもいいところだ！ 向うの現地スタッフには接触しよう。ただしアシュマ君の救出をメインとした作戦で、こちらの方針に従って貰う！ その様に伝えておけオロ！！」

ヨデイは憤りながら、そう言った

「お前、誰に向かってそんな事を……」

オロがうるたえる。

「たまには言わせて貰う！ 大体お前は、一体今まで誰のお陰で勝つてこられたと思っているんだ！？」

「うっ……」

珍しいヨデイの剣幕に気圧されたのかオロは暫く何も言えなかった。

「他に何かあるか！？」

「……」

「無いなら切るぞ！」

「まつ、まで……」

オロが引き止めた。

「まだ何かあるのか！」

「以前話した岩塊の事は覚えているな？」

「ああ」

「その調査をして欲しい。どうも気になる」

「何をどう調査しろと？」

「当面は動向を探って欲しい」

「分かった。出来る範囲でしよう」

「頼んだぞ。もしあれが兵器……兵器の遺物だった場合、我々には攻撃手段が無い」

「嫌な事言っね。オロも。気になっちゃうじゃないのそんな言いかたされると」

「では頼んだぞ」

「分かった。『アシュマ・アトー救出作戦』に全力を挙げる！」

クーロンでは、先の首都爆撃で、首都バランドバは完全にその機能を麻痺させた。

これの煽りを受けて、各地で、テロ、ゲリラが横行した。皆、現政権に不満を持つものばかりである。

このため急遽、首都機能をウイライと言う都市に移した。

しかしウイライに首都機能を移したからと言って、直ぐに首都機能が回復するわけでもなく、首都爆撃の折に失われた人的資源、資料、情報、それらを繋ぐネットワーク、これらが失われたのは非常に痛かった。

仮の首都をおいても以前のような首都機能を回復するのは無理なのではないかと言われたほどだった。

この中で、軍部のクーデターが囁かれたが、軍と太いパイプを持ち、党ナンバー2の実力者、ルー・ウイロンが党主席の座に就く事でクーデターは回避されたという。

先ず彼は軍事上のネットワークの再構築から始めた。

今まで横行していた元首都バランドバ及び仮首都ウイライにおけるテロ、ゲリラ行為、金品・物資強奪、強姦、暴行、殺人など、無政府状態になった首都を、治安面から回復しようとしたのである。そして、現在交戦中と言う情勢に至る。

首都機能が麻痺しているお陰で黒龍号はクーロン国内に難なく侵入する事が出来た。

尤も、国龍号のステルス機能も手伝ったのだらう。

国内のリーダー施設網にも引つ掛ることなくとある町の郊外にやって来た。

アベ二爺はもしもの時のために（またもや！）黒龍号に置き去りとなった。

割と閑散とした街で人の行き来がまばらな街だった。

ヨディたちが歩いていくと向かいからショートヘアの割とこざっぱりした美人が歩いてきた。

ヨディとオルバニアンが鼻の下を伸ばしていると、エファールとアルミナにしばかれた。

そのクーロン美人はくすくす笑いながらやって来た。

「あ、どーもー」

エファールがコブラツイストのまま、ばつが悪いのか、頓狂な返事をしていた。

すると、そのクーロン美人はくすくす笑って、

「あなタ、エファールさんネ？」

そう言ってきた。

皆が驚いていると、

「貴方がヨディさん、貴方はオルバニアンさん、貴女はアルミナさんネ」

「おまえ、何者だ!？」

ヨディはコブラツイストを掛けられたまま凄んだ。

「くすくす」

また、クーロン美人は笑った。

嫌味は無い。

「アンタ、実際、誰？」

エファールが訪ねる

「ワタシ、リン・シャオリン。オロ・エバス、クーロン支店の総責任者ネ。でもそれは表向きの顔……っここでは言えないネ。ついてくるよろシ」

一行はリンの後をついて行き、閑静な住宅街の冴えない一軒家に着いた。

周りの家は割と綺麗で、庭にサイコ・フライヤーをおいてある家がほとんどだ。

「ここネ」

リンはくるりと半回転してこちらを見た。

「ここですかあ〜ここはどう見ても半分崩れかけた、ボロヤなんすケド〜」

オルバニアンが言った。

「ボロヤ、余計ネ！ さ、行くネ」

地下へ下る階段を一行は下った。

下る事四階分。

段々、ジー、カタカタと機械音が聞こえてきた。

ドアを開けるとそこは半ば機械化されたオフィス。

機器などを見ると、剥き出しではあるけれども、本社の物と変わりはなかった。

リンの話によると、ここから各支店に司令が行って、さらにゲリラ部隊に伝達。

かくしてゲリラ部隊が活動をする。

ゲリラ部隊は、今日の成果や敵の戦力、敵の拠点はどこでどの程度の規模かなどを、このクーロン支店のこのフロアにフィードバックされ、更に次の作戦の立案の資料などにするそうだ。

「結構大きいでシヨ？」

リンが言う。

「ええ、これだけ電算化とネットワーク化がなされているとは、夢にも思いませんでしたよ。それに規模も大きい」

「私達の自慢ネ」

「では、早速ご協力頂きたいのですが、アーチエル・アップルトン、レキシタニア第一王女、キュポア・アップルトン、レキシタニア第二王女、アシュマ・アトー、アン・デボン、以上四名の居場所を突き止めてもらうのが一つ。もう一つはクーロン上空に現れた……」

「岩のピザネ」

「そちらでは、そう呼称しているのか……その岩のピザの動向を教えてください頂きたい」

「先ず尋ね人ね？ これはこれからやるね……チン！」

チンと呼ばれた男がリンのそばにやって来た。

リンはチンに素早くてきぱきと何事かを指示した。  
そしてリンはこちらに向いた

「尋ね人の方は直ぐに分かるネ。少し待つネ。あと、岩のピザネ。それは逐一データを本社の方に送る事を決めたネ。オロ会長も了承したネ。これで貴方たち尋ね人に専念できるネ」

ヨデイ達は喜色を示した。

「そおかあ！ 待つてるよ！ 俺のアーチエルちゃん！」

そうオルバニアンは言ってみた。

「分かつてるわよね？ 冗談でも言つて良い事と悪い事があるって知ってるわよね？」

アルミナが大きな釘をオルバニアンに刺した。

「うひ……。」

オルバニアンは背筋にひんやりとしたものを感じていた。

クーロンのウィライの最寄りの軍港にアシユマ達は着いていた。

そしてリムジンに四人は乗り仮首都ウィライを目指した。

「これ、トウ・ライとやら」

キュポアがトウ・ライに問うていた。

「何で御座いますよう王女？」

「先程のわらわの身体測定の結果な？ …… あれは教えてくれるんだろうな？ …… それより、そもそも一体何の検査だったのじゃ？」

「王女、申し訳御座いませんが、お答えできません」

「なぜじゃ？ わらわの事ぞ？」

「軍の機密事項に御座いますれば……平に」

「ならぬ。答えよ！」

「平に……平にご容赦を」

「ならぬ」

「これ、キュポア、検査結果などどうでも良いではありませんか？」  
アーチエルがキュポアを窘めた。

「姉様、どうしても良くありませんぞ！ あれだけ身体を弄繰り回されたのじゃ。少しは結果くらい教えてくれても良さそうなものではないか！」

キュポアが主張した。

「なに？ 弄繰り回された？ 我が義妹をその様に辱めたとあつては捨て置けん！」

アシユマは凄味をきかせた。

アシユマは拘束されているにもかかわらず、殺気を放出しトウ・ライに無意識に命の危機を感じさせた。

これならば喋るだろうとの、アシユマの計算があつたればこそであつた。

そして、トウ・ライは答えた。

「まで。身体検査なのだ。本当に。」

「それだけか？ そうでなければ『よぶ』ぞ」

「よぶ？ 誰を」

「『鬼虎』を」

「！！！」

トウ・ライにとってはアシユマが殺気を放つて、恫喝するよりもこちらの方が何倍も何十倍も恐怖を覚えた。

あり得ると思つたからである。

トウ・ライは喋り始めた。

「ただ違う所があるとすれば、簡易的な『鬼虎適正検査』だな」

「分かるのかそんなこと。いつそんな事をした？」

「血液検査のときにだ」

「そうか、これで良いかキュポア……ん？」

（怪獣が義妹と呼んでくれた。怪獣が義妹と呼んでくれた。怪獣が義妹と呼んでくれた。怪獣が義妹と……）

いま、キュポアは自分の世界に酔っていた。

（これは、今度から怪獣の事を義兄様おにいさまお呼びせねば）

「……キュポア？」

(はっ！ 義兄様がこちらを見ていらっしやる。早くお応えせねば)  
「はい、お義兄様」

(まあ、キュポアったら。お義兄様と呼ぶようになって。これで少しは……)

アーチエルが思いかけたところへ、

「なんだ？ キュポア？ 何か悪い物でも食ったか？」

アシユマは愚かにもそう言ってしまった。

「……怪獣の……」

「ん？」

「……怪獣の……馬あ鹿あつ！！！！」

アシユマはキュポアの怒りを買ってしまった。

アシユマ達は高速を降り、一路、仮首都ウイライに向かった。

ウイライの街は空港、商船用の港（サイコ・フライヤー用）、そして海運用の港と流通が盛んだった。

商人と言う者は商魂たくましく、首都ブランドバであれだけのテロがあり、このウイライでもその可能性が無いとは言えないというのに、あれより更に取引を拡大させているのである。

ウイライは元来は商人の街であった。

そこに官僚たちが入ってきて合流した。

反発するかと思えたが既得権益と言うもので手を組んだらしい。

今では同じ穴の貉むじむじである。

益々ウイライでのテロの可能性が高まった。

一行はそんな街ウイライに入った。

物々しい警備の中、一行はウイライの街を進む。

意外と綺麗な街だった。

商人と金の街と聞いていたからもつと汚わいにまみれているかと思った。

金の街であるから綺麗なのかもしれない。

表面上は。

尤も見えない部分ではこの限りではないかもしれない。

車は道路を曲がり、ある施設に入って行った。

見た目は医療施設のようにも見えた。

車は施設のロータリーに入りアシユマとアーチエルが降ろされた。

トウ・ライも一緒に降りた。

「姉さまあ、怪獣……」

キュポアは涙目だ。

「待つてる必ず助けに行く」

アシユマがキュポアを勇気付ける。

「必ずじゃぞう」

車がキュポアたちを乗せて走って行った。

アシユマとアーチエルは、真つ白な建物の中を歩いていた。

アシユマと、アーチエルの前には廊下が長く伸びていた。

暫く進んでいくと、突き当たりになり左右に道が分かれていた。

ここで二人は別々になるらしい。

「アーチエル。俺が行くまで、大人しくしてるんだぞ？ 必ず助けに行く」

「はい、アシユマさま。お待ち申し上げております。きっと……必ず助けに来てくださいますね」

「アーチエル……」

「アシユマさま……」

二人は、暫く見詰め合う。

「お前ら早くしろ」

兵士に二人は引き離された。

「別れの時ぐらいゆっくりさせろ」

アシユマが怒りを増大させていく。

「なんだと？ それが囚人の言う台詞か」

「俺は囚人なのか……」

アシユマの怒りは爆発寸前だった。

流石にトウ・ライはマズイと思っただらしく、

「お前、今の発言を訂正しろ。そしてアシユマ氏に暫し別れの時間を与えてやるんだ」

「し、しかし大佐！」

「良いから早くするんだ」

「はっ！ アシユマ・アトー様！ 前言を撤回いたします！ 真にもって、申し訳ありませんでした！」

「……まあ、よかる。殺すのだけは見逃しといてやる」

アシユマが言った。

「アシユマさま……少し言いすぎです……」

アーチエルがどぎまぎしながら言った。

「そうか、済まん、アーチエル……」

「アシユマさま……」

二人は軽くキスをし、唇を解き、暫く見つめ合った。

「必ず迎えに行く」

「はい。アシユマさま……」

「さて、もういいぞ。ほんの少しだけ付き合っただけな」

アシユマは言った。

そして二人はそれぞれ右と左に別れ、それぞれの道を進むしかなかった。

アーチエルが寂しげにアシユマの方を何度も振り返った。

キュポアとアンはちよつと小綺麗なマンションのような建物につれてこられた。

勿論キュポアは、あの王宮以外の暮らしを知らない。

このような綺麗な建物が存在する事さえ知らない。

キュポアは不謹慎だが、外の世界へ誘ってくれた今回の旅を、少し嬉しく思っていた。

キュポアたちはそんな『マンション』と呼ばれる建物の中へ入らされた。

中は意外に広く、靴を脱いであがった。

床は『フローリング』と呼ばれるもので板敷きの床になっていた。家具などの丁度類も、皆、温かみのある色合いで統一されて、安心できる空間になっていた。

ベッドなどは、王宮の物とは比べられないくらいの柔らかさで、とても気持ちが良いものだった。

そのベッドは、キュポアを直ぐ眠りに着かせる事など造作も無い事だった。

「キュポア様、お茶でもお淹れしましょうか？」

アンが声を掛ける。

「……………」

「キュポア様？」

「すー………」

「まあ、キュポア様ツたら。では、わたくし一人で……………」

その頃黒龍号では……………。

「あれ？ そういえばリイナは？」

オルバニアンが言った。

「そういえばあの子、影薄いからねえ。今頃はレキシタリアでのんびりしているんじゃない？」

アルミナは断定した。

その頃外では白く小さい影がそのマンションに近付いていた。

『その者』はマンションの入り口にいる、一人目の兵士を素早く

始末すると、物陰へとその兵士を引き摺って行った。

後は非常階段を素早く駆け上って行った。

階と階の間には必ず一人兵士がいたが、それも声を出させる間も与えず、無言の内に葬っていた。

目指す部屋を見つけた。

兵士が二人立っている。

まずあそこに間違いは無いだろう。

非常階段から一気に走り間を詰める。

相手は一瞬、子供と認識して攻撃するのをためらう。

そこが狙い目で、その一瞬の隙を突いて、相手を葬る。

今も、相手がためらっている。

『その者』は大きく跳躍し手に持った大振りのカクリ……と言っよりは鉦に近いが、それらを以って相手の首を斬り刎ねた。

相手を沈黙させてカギを奪う。

どうやら今のところ敵に気付かれた気配は無いようだ。

カギを使って、ドアの内側へ滑り込む

そして土足のまま上がりこむ。

「まあ、あなた……」

「やあ、アン」

『その者』は大人びた口調を示すと

「キュポアは？」

『その者』が訊く。

「それなら寝室に……」

アンが答える。

『その者』が寝室に行くときュポアは寝息を立てて寝ていた。

「起きろキュポア。起きろ」

『その者』がキュポアを起こす。

「なんじゃ？ もう夕食時か？」

寝ぼけた事を言う。

そして目を擦り、『その者』の方を見る。

キュポアの顔に喜色が走る。

「リイナ！！」

キュポアはリイナに抱きついた。

リイナも

「キュポア！！」

抱き返した。

暫く抱き合った後、リイナが

「時間が無い。脱出するぞ」

リイナが言った。

キュポアとアンは急いで靴を履き、リイナの後に従った。

「よし、大丈夫のようだ」

リイナ達は一気に出て行った。

マンシヨンより少しはなれた所に車が一台停めてあった。

その車の中に中年の男性が転がっていた。

「あの、この方は？」

アンが訊く。

「ああ、この男はこの車の運転手だ。隊列の内の一つの車でな、軍

港からここまで来るのに一苦労したぞ」

リイナが言った。

「一苦労って、あなた、どこからついてきたの？」

「決まっていよう、レキシタリアからだ」

「とにかくこの人は解放しましょう？」

「駄目だ。車の運転に必要だ」

「車の運転なら私がしますから」

「出来るのか？」

「多少、腕に覚えがあります」

「……よし、任せた」

三人は車から運転手を引っ張り出し、後頭部を殴って気絶させ、

そしてアンが車を発車させた。

アンが、

「腕に覚えがある」

そう言ったのも頷けて、車に乗った途端目つきが変わり、アクセルターンで方向を転換させ車を発進させた。

そして猛スピードで走り去った。

そして高速に入ると又もやドリフト宜しく猛スピードで走り抜けた。

「よしこのまま、姉様と怪獣を助けに行くのじゃー!!」

「始まった!」

科学者の一人が呟いた。

鬼虎がその秘密をさらけ出し始めたのである。

刀身表面上に古代文字を浮かび上げらせスクロールし始めたのである。

科学者たちは、それを高速度カメラに収め、光磁気ディスクにそれを記録していた。

それは、まさに、月と金星と火星、木星、土星が一直線に並んだ時であった。

リイナたち三人は、次にアシユマ達を助けるべく、『病院』のよ  
うな施設に着いた。

車を道路の路肩に止め、道路を渡り病院のような施設へと侵入（  
？）して行った。

侵入と言っても、正面玄関から堂々と入って行ったただだったが、  
その行動は当然、監視カメラなりなんなりで監視されているはず  
だった。

「が、それに伴い警備員などが現れるという事はなかった。  
何故か？」

それ所ではなかったからである。

アシユマが警備の一瞬の隙を突いて、暴れだしていたからである。それは、アシユマが独房から研究施設へ向かう途中に起こった。あのアシユマが手錠一つで移送されていたのである。危険極まりない行為といえよう。

そしてそれは起きた。

アシユマが後の警備員に、後回し蹴りを食らわせた。

そして次には前の警備員の後頭部に上段回し蹴りを食らわせた。た。

アシユマの身体は柔らかい。

次から次へとやって来る警備員の攻撃を難なくかわすと、多彩な足技で攻撃を繰り返していた。

上、中、下段の回し蹴り。

フエイントも織り交ぜそれらのミックス。

踵落とし、正面蹴り。

そして途中から自ら手錠を引きちぎり、相手の剣を二振り奪い取り二刀流になった。

こうなったら、アシユマは無敵だ。

向かい来る敵、向かい来る敵、斬るわ、斬るわの大立ち回り。腕を斬る、首を斬る、胴を薙ぐ、袈裟に斬る、脚を切る……。

確実に相手の戦闘力を奪って行った。

奪ったのは何も戦闘力だけではない。

それは……

その時トウ・ライが到着した。

到着したトウ・ライが目にしたものは、大量の戦闘不能者とそれと同じくらいの人数の死者であった。

「噂には聞いていたが、これほどまでの戦闘力とは……」

トウ・ライは戦慄していた。

アシユマは向うの渡り廊下で戦っていた。

「止める!!! 部屋にもどれ!!!」

トウ・ライは大声を張り上げた。

そして拳銃を構えた。

「止める。俺に銃弾は効かない」

アシユマが言った。

「果たしてそうかな？」

「なに？」

「一級念者の念封弾だ。幾らお前が生身で念導境界面を張れるほどの強念者でも、この弾には敵うまい！」

「なら、試してみるか？」

「なんだと？」

「俺はこれでも忙しい。貴様に付き合っている暇は無い」

アシユマは物憂げに言った。

そして向うへ振り返り渡り廊下を渡って行った。

「貴様！ ……とまれ！ 止まらんと撃つぞ！！」

アシユマはそれでも止まらなかった。

「貴様ア！！」

パン！

パン！

パン！

と、乾いた音がした。

トウ・ライはこのアシユマ・アトーと言う不世出の剣士の最期を

残念がった。

これほどの武芸者はもう二度と出ないのではないか？

そんな想いさえ沸き起こった。

ところが、アシユマは倒れない。

どこかを負傷したわけでもない。

「くっ！！」

我が目を疑ったトウ・ライは、

パン！

パン！

パン！

と、再び三発撃った。

しかし何が起ころるわけでもなかった。

アシユマは無事だった。

よく見ると弾が空中で浮いていた。

「まさか…そんな馬鹿な」

トウ・ライは驚愕していた。

何故!?

「貴様は今、『何故』と語っているだろうか？ 答えはこれだ」

アシユマはポケットに手をつ込み大量の魔導石を手にしていた。

そう、先程奪った物は命だけではないと言ったのはこれだったの

である。

兵士を倒しては魔導石を奪い、兵士を倒しては魔導石を奪いを繰り返してきたのである。

中には不良品もあったろう、だが中には良質の魔導石もあっただろう。

それがアシユマの命を救ったといえよう。

「もう、追ってくるな。無駄な殺生はしたくない」

トウ・ライはその場につくりと膝を着いた。

リイナたちはアーチエルを捕えている部屋までやって来た。

意外な事に見張りはいない。

よほど油断でもしているのだろうか？

ドアの窓から中を覗くと、アーチエルは覚醒していて、頭に電極のような物を沢山取り付けられ、何かを調べられていた。

姿はボディーマーのままである。

アーチエルが、脱ぐのを頑なに拒んだのである。

「お主ら戦闘は…あまり期待できんな…アーチエルを救出する方に回ってくれ」

リイナは言った。

「分かったぞ、リイナ」

キュポアが言った。

そして頷く三人。

徐におそドアを開け三人は一斉に部屋の中に入り、リイナは研究員の背中に取り付きククリの刃を研究員に突きつけ、

「動くな！」

と、叫び、他のキュポアとアンはアーチエルに取り付いた。

「早く脱出の準備を！」

リイナが言った。

アンとキュポアでアーチエルの拘束を解いた。

拘束を解き終わり、アーチエルが自分の魔導石を手にすると、

「姉様こちらじゃ。リイナもう良いぞ！」

キュポアが言った。

「待つてください。アシユマさまが動くなと……」

「今は動いて良いんだ！ 臨機応変と言う奴だ。よし！ ……お前から動くなよ……動くなよ？」

リイナが言い放つ。

四人は、それっ、とばかりに部屋を出た。

アシユマは鬼虎が検査されている部屋に向かっていた。

ある場所は鬼虎が導いてくれると確信していた。

それにアシユマは、ここに来るまでに良質の魔導石を六個だけ残して、後は捨てた。

何気に来た部屋は、正に鬼虎の検査室。

アシユマは発気の術を使いドアをぶち破った。

ガシャン！！ と大きな音がしドアが前方に飛んでいく様は、研究員を驚かせ、凍りつかせた。

部屋の内部は更に部屋が二つあって、二つの部屋は真正面のドアで隔てられている。

そして鬼虎はドアの向うの部屋にあった。

アシユマはまた発気の術を使いドアをぶち破った。

更に固まる研究員たち。

アシユマは、鬼虎を見て、

「なるほどこう言うことか」

そう呟いた。

古代の文字が浮き上がって上にスクロールしているのである。

アシユマは歩み寄って鬼虎を手にした。

鬼虎はすんなりアシユマの手に戻った。

「な、何をするんだ！！ 馬鹿者！！」

研究員は何をするかと言わんばかりに抗議した。

「馬鹿者だと？ これは俺の物だ！ 俺のモノを使い、何を不埒な

事を言っているか！ よし。鬼虎のデータでも消去してやるか！」

「な？ なに？ 止めるそれは貴重な財産だぞ！」

アシユマは巨大なハードディスクドラムの前に行く。

そこでアシユマは剣を振るうすると三日月型の光が幾つも発生し

ハードディスクドラムを細かく切り刻んだ。

そしてアシユマはふと考える。

自分で機械に弱いことを知っているので科学者の顔色を伺ってみ

る。

「さて、これまでだな」

と、言うつと科学者たちは、ホッと安堵の表情を浮かべる。

そして、

「まだ何かあるな？」

そう言うつと青ざめる。

まだ何かあるのだ。

アシユマは少し部屋の中を歩いて回る。

気配で科学者達が一番慌てふためいた所に立ち止まる。

「これが」

アシユマは鬼虎を振り上げる。

「やめる！ 自分が何をしようとしているのか分かっているのか？  
最先端科学の粋を無に帰そうとしているんだぞ！」  
科学者が声を張り上げた。

「たかがそんな事で、鬼虎を増やされてはかなわんからな」  
アシユマは斬り捨てた。

そしてアシユマはバックアップディスクを破壊した。

「ああー！ー！！」

他にバックアップが無い事を確認すると、

「少しはポーカーフェイスも学べ学者先生」

そう言っアシユマはそこを後にした。

(アシユマさま。アシユマさまをお救いせねば……)

アーチエルは焦っていた。

自分がお救いせねばと気が急いでいた。

いつもは、自分が助けられているのである。

しかし今は自分の体は自由。

今回はご恩返しをしないと。

でもどうやって？

そこに、リイナが叫んできた

「中央警備室がある。監視モニターもあるはずだ。そこでアシユマ  
を捜そう！」

「はい！」

アーチエルは答えていた。

アシユマはアーチエルを捜していた。

闇雲に捜していたのではなく、アーチエルの気の気配を探した。

アーチエルのあの美しい黄金色の気を。

「この階にはいない」

アシユマはそう呟き、階段を伝って下の階へ降りて行った。

「いたぞ、怪獣じゃ！」

キュポアはそういった。

「どこだ？」

リイナが尋ねる。

「四階と三階の間の中央階段じゃ」

「よし、ここは二階だから一階半上れば逢えるぞ」

「本当ですか？ ああ、アシユマさま」

アーチエルは夢心地になった。

「姉様！ まだ怪獣に逢った訳ではないのだから油断は禁物じゃぞ！」

キュポアがアーチエルに言った。

「わ、分かっております！」

「この階にもいない」

アシユマは下の階へ降りることにした。

すると、下の階から強くアーチエルの気が迫ってくるのが分かった。

アシユマは階段を駆け下りた。

階段の折り返しのところでアーチエルと出会った。

「アーチエル！」

「アシユマさま！」

二人は抱き合った。

残りの三人の女性陣は少し面白くなかった。

いや、キュポアは大いに面白くなかった。

「怪獣！！ わらわ達が頑張ったからこそ姉様を助け出す事が出来たのだぞ！？ 少しはこちらに感謝しても良いのではないか！？」

「そうだったな。忝い」かたじけな

「えへへ〜」

何とはなしにキユポアは嬉しそうだった。

「リイナ、わざわざ助けに来てくれたのか？ 有難う」

リイナには特別に礼を言った。

「アシユマ、お礼も良いが少しは女心と言うものを勉強した方が良  
いぞ？」

リイナが言う。

「女心？」

「か……怪獣の……馬あ鹿ああつ！！」

キユポアはアシユマの向こう脛を思いつきり蹴った。

「痛い！」

「そんなことしている場合か？ いくぞ」

リイナが場を仕切った。

外に停めてある車はまだ健在だった。

「あの車か？」

アシユマが問う。

「そうだ」

リイナが答える。

「誰が運転をするんだ？」

「それはわたくしが」

アンが答えた。

「では行こう」

アシユマが号令し皆が車に乗った。

アシユマは車の助手席に着いた。

本当にアンが車の運転席に着いた。

「いつ車の運転なんか習った」

「去年三月ほど暇を頂いた時に」

「そういえばそんなことも言ってたわね。アン」  
アーチエルが言った。

「で、大分なれているようだが、どのくらい乗っているんだ？」

「教習所以来、乗っていませんが？」

「なにっ!？」

アシュマは不安になって、

「魔導石を持っていないものはいるか？」

アシュマは尋ねた。

キユポアとアンが手を上げた。

「取り合えずこれをポケットにでも入れておくと良い。お守り代わりだ。これで事故つてもシヨックは大分軽減されるはずだ！」

「失礼なあ。そんな事故なんて起こしませんたら」

アンが言い、

「何で皆さん顔が青ざめていらっしやるの？」

アーチエルは不思議顔だった。

「と、取り合えず出してくれ。スロースタートで」

アシュマが言い、

「スロースタートですね？」

アンが答えた。

アシュマがホツとしていると、エンジンが掛かるなり、後輪が悲鳴を上げてやや尻を振りながら、高速で発進して行った。

アシュマは後にこう語る。

これまでの人生の内であれほど恐怖に駆られたことは無い……と。

### 第三節 逃避行

ヨデイ達は各地のネットワークからアシユマのいる所を見つけた。仮首都ウイライの軍研究施設だという。

ヨデイ達はとる物も取り合えず、いつもの手持ちの武器だけで乗り込もうとするが……

「無茶ネ！ たったそれだけの装備じゃ、返り討ちにあうネ！」  
リンに一喝された。

「じゃあ、どうしろってんだよ！？ このままじゃ見殺しにしちまうぞー！？」

オルバニアンが叫んだ。

「このままの装備だからいけないネ。ちゃんとした装備なら何とかなるネ！」

「ちゃんとした装備？ ここで装備していくのか？ 非効率的だろ？」

「ここで装備して行くのは確かに非効率的ネ。だから近い所に行くネ」

「近い所？」

訊けば、その場所、ウイライの廃港にあると言う。

ウイライとは目と鼻の先だし、廃港と言う良い隠れ蓑があるしで、そこに行つてから考えようという。

それまでの移動は車だ。

その基地は、聞けば半分地下壕のような造りをしているのと、上に多階層の港の跡があるので防御力は高いという。

……そしてその基地についた。

「うわゝ小汚えとこだなあ。おい」

オルバニアンが思わず漏らす。

職員の間がじろりとこちらを見る。

「ここではそんなこと言わない方がいいネ。ここでは場所柄、標準語使える人おおいネ」

「それを早く言えつての！」

そして、アシユマを助け出す具体的協議（作戦）が行われて直ぐ

……

職員の間が会議室に飛び込むや否や、

【リン！ 敵だ。どうやら此処が嗅ぎ付けられたらしい！ 敵の大部隊がこちらに向かって来てるぞ！】

【なんですつて！？ それは間違いないの？ 規模は？】

【敵魔導機兵約千五百機だ！】

【そんなに？ 大部隊ね】

リンは少しの間考えた後、

【迎撃用意！ 全職員に通達！ 第一級戦闘配備発令！ 魔導機兵を出して！】

伝えた。

「御免なさいネ。聞いての通り緊急事態ネ。わたし指揮しなければならぬネ」

「良いですよ。どうぞ気兼ねなく」

ヨデイが言った。

「ありがとうサン」

「俺ら、何か手伝おうか？ 魔導機兵の操縦ぐらいだったらできるぜ？ なあ？」

オルバニアンが言った。

「そうね。それくらいだったら出来るわね」

アルミナも言った。

「ありがとうサン。ほんと、ありがとうサン。でも本社の人を危ない目に合わす訳には行かないネ。気持ちだけ貰っておくネ」

リンは言った。

「水臭いこと言うない！ 仲間だろ？」

「ほんとにありがとサン。じゃあ、お言葉に甘えるネ！ 今担当の者よこすから、詳しい事はその者に聞いてネ。じゃ、私行かなければならないから、また、後でネ！」

「おう！」

オルバニアンが言った。

「結構いっぱしの事をいうようになりましたね。オルバニアン」

ヨデイが言った。

「たはは。いやあ、まだまだ」

「でも、幾ら手伝うとはいっても戦闘は戦闘。危険になったら直ぐに逃げてください。いいですね。アルミナ嬢も」

二人は黙って頷いた

待つこと十数分。

パタパタと廊下を走ってくる音がして、ガチャリとドアが開いた。  
「オルバニアン・マグマイヤーさんと、アルミナ・ラ・シアさんは、こちらにおいでですか？」

「俺らだけど？」

「ではこちらに来てください！」

「君は？」

オルバニアンは歩きながら話した。

「メイ・リンリン。メカニック担当です。どうぞ宜しく」

「リンより流暢だぜえ〜とリンリンちゃん？ ややこしいな」

「オルバニアン！ 口説いている暇があったら機体の仕様なり何なりを訊く！」

アルミナに叱られる。

「へえへ。でその仕様なんだけどどないな事になってるの？」

「機体はラヴァー。本社と同じ物です。ただ試験的にカスタマイズした機体しか残っていません……」

「どんなん？」

「本社から送られてきた資料を基に組んだんですけど、かなりピーキーな機体になっています。こちらで独自のアレンジもくわえまして」

「で、どんなん？」

「一機は中長距離支援型。三十ミリバルカン砲と電磁レールガン、近距離戦闘用に魔導石製の剣が付属されてます。装甲材はミスリル。もう一機は突撃戦闘用で装甲がミスリル、通常の機体の二倍の装甲を持っています。装備が魔導石製の大剣です」

オルバニアンはにんまり笑って、

「その本社の資料って俺らの機体の事だな。どうやらそう言った。」

「！　そうなんですか？　なら良かった。基本的に、本社からの資料を基に組んであるので、使用感の違和感はそれほど無いと思います」

「そうか。アルミナ、こんな感じだけかどうか？」

「うん、乗ってみなきゃ分からないけど、多分大丈夫だと思う」

「じゃあ、取り合えずそれで乗ってみるわ」

二人は魔導機兵『ラヴァー』に乗って、飛び立った。

そして急上昇。

加わる加速感。

「うひょー！　コイツはなかなかご機嫌の仕上がり具合だぜー！」

そして二人は戦場へ。

「いっちょ試してみるか」

早速試し撃ちとばかりに、オルバニアンが遠距離射撃を行った。

見事命中。エンジンを打ち抜いたらしく敵機兵は大破。そして残骸を海上に落として行く。

「くうーっ！！　ご機嫌だぜー！」

「なら、アタシも！！」

アルミナは敵に突っ込んで行った。

その質量にスピードが加わって、その物理エネルギーを全て剣に込めて、相手にたたきつける。

当然敵は大破。

爆発。

この一戦闘で周囲にいる魔導機兵がすつと道を開ける。

「それじゃ困るんだよ敵だけ残ってくれ」

オルバニアンがぼやいた。

その時通信が入る

【全軍に通達するこの基地は守りが堅いといっても過信するな！

敵は確実に倒せ！ 以上だ！】

「ヨデイ……今のはなんだ？！ クーロン語のようだが？ 何のことかサツパリ……ヨデイ？ ……そうか、アイツがマイク持つてるわけ無いな」

諦めかけた時、通信が入った。

「オルバニアン、アルミナ、聞こえるか？」

「ヨデイ助かったぜ。今のはなんだ？」

「……………」

「おい、ヨデイ！？」

「シャオリンの言ったとおりだ。以上だ！！」

「だーーーーーっ！ それだと、わかんねえっーーーーの！！」

「わかるように説明して頂戴」

オルバニアンとアルミナが絶叫した。

「敵は見つけ次第たけ！ 基地の防御力を過信するな！ 後、自

分の命を常に大切にしろ！ だ！！」

「分かった！」

「分かったわ」

二人は戦闘に戻って行った。

「貴方、クーロン語分かるの？」

リン・シャオリンが言う。

「いや？ 全然」

ヨデイが受ける。

「じゃあ、さっきのは？」

「適当」

「呆れたネ」

オルバニアンとアルミナの戦闘は順調に推移していた。

オルバニアンの電磁レールガンは、確実に相手を捕えて外さなかつたし、アルミナはその突進力で相手を粉砕して行った。

お互いがお互いをフォローしながら戦っていた。

「そこっ！」

オルバニアンが叫んで、また一機、電磁レールガンの餌食にしていた。

「うおおおりゃあああっ！！！」

ガッン！ と手ごたえがあり、アルミナは、また一機粉砕していく

敵の数が多数を占めていたが、アルミナとオルバニアンの奮戦が勝負を互角のものとしていた。

ある時、敵が潮を引いたように退却していく。

「どう思うネ？ ヨデイさん」

リンがヨデイに意見を求めた。

「鮮やかな引き際ですな。これを率いているのは中々の名将かもしれません」

「名将……」

「もしかしたら第二波、第三波と波状攻撃を掛けてくるかもしれませんが」

「波状攻撃ネ……それ一番厄介ネ。その手の攻撃に弱いネ、籠城戦

は。それにしても、この規模の戦い、歴史的規模の戦いかもネ」

「党本部に戻されて何かとビクビク構えてみれば、こう言うことでしたか」

ゲリラ拠点基地攻略戦を行って帰ってきた、トウ・ライは言った。「君、これでホツとしてはいないかね？」

党幹部が言った。

「は？」

「アシユマ・アトーに殺された同胞達の命の代価、先ず君はこれを支払わなければならない。これが一点目。そして行方を眩ましたアシユマ・アトーの行き先を突き止めねばならぬ事。これが二点目。どうかね？ これですしは自分の立場が分かってきたかね？」

「はあ……」

「君はどうやら、今ひとつ緊張感に欠けるね。ビクビク構えているというのも、俄にわかには信じられん」

「いや、ばれてしまいましたか。はあつ、はつ、はつ、はつ」

「矢張り今ひとつ緊張感に欠けるね。君は。今は同胞の命の代価を支払わせようと、わざわざ我々が君のためにチャンスを与えてやったというのに。多数の犠牲者を出したばかりでなく、おめおめと逃げて帰ってくるとは何事かね？ 何を考えておるのかね、君は？」

「だからこそ、逃げ帰ってまいりました」

「なに？」

「あの、ゲリラの基地は思った以上に堅牢です。おまけに魔導機兵のパイロットたちはよく訓練されている。中には化け物のような機体も混じっている。それらを相手に良くもった方です。ウチの部隊は」

「そうかね。で、どうする積もりかね？」

「物量作戦と波状攻撃を掛けます」

「波状攻撃？」

「幾ら強くとも所詮戦力は限られていますし、パイロットも限られています。休む暇を与えなければ良いのです。三々四波辺りで敵は沈黙するでしょう」

「それで倒せるのかね？」

「確かに倒せますが、その身を半分に切り裂かれるように痛い損失を覚悟しなければなりませんぞ？ いや、損失的に言えばもう半身は削られてしましようなあ。向こうとこちらで」

そして、トウ・ライの言葉どおりに第二波・第三波と波状攻撃が続き当地は激戦となった。

「この基地からの撤退を進言しましょう」

ヨディは言っていた。

「何故です？」

リンは訊いた。

「先程のような物量で、何度も何度も波状攻撃を食らったら、先ず間違いなくこの基地は全滅するでしょう。私だったらそうします。

そうなる前に、体力がなくなる前に逃げる事をお勧めします」

「~~~~」。捨てられませんこの基地は。首都の喉元に切っ先を構えられる様な基地など滅多にないネ」

「諦めなさい。敵にばれた時点でこの基地の意味は失われた。それに大事なのは場所ではありません。『人』なのです。今ならまだ間に合う。お逃げなさい」

「……分かったネ。そうするネ。そうと決まれば、早い方がいいネ。それにしても大損害ネ！ 全く」

「それは向うも同じ事でしょう。籠城する敵を倒すにはそれ相応の戦力がある。向うも大損害でしょう」

「そうネ」

そうと決まったときのリンの行動は素早かった。

資料は持てる分だけで、後は全て焼く。ハードディスクはバックアップをとった後全て物理的に壊す。

魔導機兵の余ったパーツも全て破壊し、情報と言つ情報は全て敵側には渡さずに徹底的に破壊した。

全ての部下にそうさせた。

そして一斉に全速力で逃げ出した。

「なに考えてるんだ？ ヨデイの奴。まだ戦えるつてのによ」「オルバニアンはばやいた。

だがすでに双方共に相半身を削られるほどの痛みを蒙っていた。

「基地から一斉に逃げ出している？」

トウ・ライはオペレータに訊き返していた。

「敵の方から逃げ出してくれるとは、助かったんじゃないかね？」

同志トウ・ライ？」

党幹部が話しかけてきた。

「はっ……あはははははっ！」

「どっ、どうしたのかね？ 同志トウ・ライ？」

「助かったは助かったんですがね。してやられましたよ。『見事に逃げられ』ました」

「何を言っているのかね？ 同志トウ・ライ。だからさっきからそうだとおっしゃっているのではないかね」

（何を言っているんだこのオッサンは。見事に逃げられたというのは、戦力を温存したままどこかへ消えるという事なんだぞ？ その戦力が、どこに割り振られるかも分からずにだ。この決断をした奴は余程の切れ者だな）

トウ・ライは思った。

アシユマ達はクーロンのハルルカ山脈の山間の道を車で走ってい

た。

取り合えずクーロン人民共和国を脱出して、そこからヨディに連絡を入れようと思ったからである。

中々風光明媚な山々で、青々と茂った山の緑が、目にとても心地良かった。

木々には花が咲き馥郁ふくいくと良い香りが漂っていた。

「良い景色だ」

「アシユマさま。検問です」

アンが言った。

「検問？」

アシユマが前を見た。

「無粋な」

「そんなことを言われましても……」

アンが困る。

「済まん。アンに言ったわけではない。迂回できるかい？」

「此処まで来ては少し無理かと……」

「そうか。分かった。少し蹴散らしてくる。車を停めてくれ」

「蹴散らしてくるって、アシユマさま！」

アーチエルが叫ぶ。

「大丈夫だ。無駄な殺生はせん」

「はい。分かりました。お気をつけて」

「言ってくる」

アシユマは言って、車のドアを開けた。

アシユマは歩いて検問に近付いて行った。

ざっと見回した限りでは二機の魔導機兵、都市制圧用、旧式、ぱつと見はタカアシグモに似ている。

そして歩兵が五、六人。

もつと大規模な検問があっても良さそうなものを。

これが、首都バランドバ爆撃の影響かどうかはアシユマの知る所ではなかった。

「何だ貴様？ 止まれ！ 止まらんと撃つぞ」

アシュマは世界中を旅してきたから大抵の言語は分かる。

アシュマは応えずに前へ進んでいくと発砲された。

更に進んでいって兵士たちをぶん殴り始めた。

魔導機兵の砲口がこちらを狙っている。

だがアシュマは慌てた風も無く、魔導機兵の足元に近付くと徐に居合い宜しく魔導機兵の脚を斬り飛ばしてしまった。

そしてもう一脚斬り飛ばすと、魔導機兵はバランスを崩して、道路の向こう側へ倒れてしまった。

すぐさま二、三人の兵士が出てきて、逃げ出してしまった。

馴染みの、

「ばっ！ 化け物だアツ」

の台詞を残して。

残りの一機も似たようなものだった。

ただ、違ったのは砲弾を二発撃っただけ。

それも鬼虎に吸収されてしまい、後は敢え無くノックダウン。

アシュマは歩いて車の所に戻ってきた。

「おかえりなさいまし」

アーチエルとアンがはもった。

「怪獣、手柄であるぞ。褒美を取らず。何か良い？」

キュポアが言った。

「レキシタニアに帰って、飯食って寝たい」

これには車内が一斉に沸いた

その時上から飛来音がして、巨大な鉤爪が窓ガラスを割って、車ごと持ち上げられた。

「しまった。アーチエルにシールドを掛けておいて貰うべきだった。確かにコレではどうしようもないな」

アシュマが言った。

リイナが前の座席に強引にやってきて、アシュマの太腿の上に乗って、カーラジオのような物を弄っていた。

「リイナ何をやっているんだ？」  
アシュマが言った。

「コレは軍用無線機。今我々を捕えた奴が何か会話するかも知れな  
……きたっ！」

『こちら特殊部隊、A-360。オブジェクトAとO、そしてA2  
を捕えた！ こちら……』

「なんだ？ この言葉は？ クーロン語か？」

「ノーツ語だよ」

「分かるのか？ 怪獣」

「少しな。オブジェクトAとO、そしてA2を捕えたんだと」

「何の暗号だ？」

リイナが訊いた。

「暗号までは、知らん」

「もしかして……」

アンが呟いた。

「『A』はアシュマさまの事、『O』は鬼虎の事、『A2』はア  
ーチエル様のことでは……？」

「妙に説得力があるな。根拠は無いけれども」

「取り合えず連れて行ってもらいましょう？ ノーツ連邦へ」

アーチエルが腹をすえて言った。

「次に行く所は、我々の拠点の中でも、最も大きいものの内の一つ  
ネ。そこで少し休みましょう？」

リンがそう言う。

ヨディ達は今、先の基地から撤退中である。

ヨディ達はサイコフライヤーに乗っていた。

ヨディたちのグループ全員はその言葉をブリッジで聞いたことにな  
る。

「何で、そんなわざわざ遠い基地に行かなきゃならないんだ？」

オルバニアンがリンに訊いた。

「支店本部には、そんなに魔導機兵、置いておくスペースないネ。たはは……」

「そうなんだ。だから、そんな行軍をしているんだ」

「そういうことネ」

一行は今クーロンのハルルカ山脈に入っていた。

暫く行くと隊列のトラックは何かを待って、止まっていた。

「何しているんだ？ とつとと行こうぜ」

オルバニアンがしびれを切らした。

「まあ、ここで慌てても仕様が無いですよ何か起こるんでしよう暫く待ちましょう」

そして、待つこと十数分、やつとその謎が解けた。

山腹の岩壁が開いて、ぽっかりと空洞が開いた。車はどんどんその穴へ入り込んで行った。

機兵は山を一つ越え、車が入ったところと丁度裏側の穴から、基地内部へと入って行った。

リンは立场上、最後まで隊が無事に基地に避難し終える所を見届けなければならなかった。

隊の最後の車が入り終わった。

リンのサイコ・フライヤーも空中へ飛び立ち、山の反対側へと下りて行き、ぽっかりと口を開けた穴の中へ入って行った

岩をくり貫いて作られた、滑走路の中を進んでいく。

抜けた先には街があった。

洞窟内にしては確かに規模は大きい。

リンのサイコ・フライヤーは、飛行場の片隅にひっそりと置かれた。

オルバニアンは街を見て感心していた。何せ、修理施設もあれば、工場もある。大規模なスーパーマーケットもあれば、映画館さえある。驚いたのは託児所まであったことだ。

「この街は、私達が政権を取った時に作る、街のモデルネ」  
リンがそう言った。

「へえ」

こうして見て見ると、公共施設や福祉施設が多いことに気付かされる。

「いろんな事考えて街とか作っているんだな」

「参考になりますね。オルバニアン」

ヨデイが言った。

「本部より綺麗だな」

オルバニアンが言った。

「大きなお世話ネ！」

リンが憤った。

オルバニアンらは、支店ビルの中に入った。

所内にてリンが所員に何かを指示してる。

指示し終ってリンはこちらを向いた。

「いま、情報集めてるネ。ちよつと待っててネ」

リンは言った。

「つて、いつでもなあ……」

オルバニアンは困ってしまった。

「下に、食堂あるネ。そこで時間つぶしててネ」

申し訳なさそうにリンが言った。

仕方なく、オルバニアンたちが下の階の食堂に行くと、そこはちよつとしたレストラン風のちよつと粋な造りになっていた。

「まあ、ちよつとお洒落なところじゃない？」

エフアールが喜んだ。

「じゃあ、ここで食べていきますか……って、券売機？ しかもクーロン語で書いてあるから分からない！？ しかも僕等の持っているお金じゃ券買えないし！」

ヨデイは言った。

「まって、ヨデイ、お金はクレジットカードで何とかならない？」  
アルミナが言った。

「こんな食券機じゃクレジットカード使えませんって」

「ああ、そうか」

「しょうがないわね。上に行ってリンに両替してもらいましょう？」  
再び上の階に行ってリンに話しかけようとした。

が、先にリンに声を掛けられてしまった。

「アシユマさんたちの居所、分かったネ！」

「本当ですかそれは？」

ヨデイが訊いていた。

「もう、この国にはいないネ」

リンは答えていた。

「居ない！？」

「ノーツ連邦に行ったネ」

ヨデイは少しの間だけ考え、

「……黒龍号を呼ぶか？」

そう言った。

「その方がいいネ。私はノーツ連邦の現地スタッフに連絡を入れておくネ！」

アシユマはノーツ連邦に着いた。

しかも首都メシエクにである。

空港のようである。

アシユマ達は車から飛び降りた。

言っても三十センチぐらいの高さだが。

だが、その高さでも、車は言う事をきかない。走れない。

アシユマ達は、この氷の上に、脚をつけなければならなかった。ノーツ連邦の首都メシエクは殆ど極地方にある。

幾ら真冬では無いにしろ、秋の装いである。寒くないわけが無かった。

ところが……

「なんじゃ、寒くないのう！」

キュポアが言った。

「あら本当」

アンも言った。

「俺のお陰だ」

アシユマが言った。

どうやら、鬼虎で皆を暖めているらしい。

そこに待つこと五分ほど。

リムジンがやって来た。

ここはリムジンに乗るしかない

雪が降る鈍色の空の下、リムジンはアシユマ達を乗せ、重々しく走り始めた。

「どこへ行くのかしら……」

アーチエルは不安げに呟いた。

リムジンは暫く走り続け三十分も経った頃宮殿造りの建物が見えてきた。

車が止まった。

どうやらここで下ろされるらしい。

宮殿の門の前で止まった車は、アシユマ達を降ろし、アシユマ達は暫くそこで待たされた。

階段に道案内と思しき人物が降りてきた。

この男、線は細いが中々の美男子であった。

アシユマは、その人物に訪ねてみた

「ここはどこだ？」  
と。

返ってきた答えは、

「ここは、書記長官邸です」  
と、言うものだった。

「書記長？」

「この国の最高指導者、イワン・アガツコフ書記長のことです」  
アーチエルが小声で囁いてくれた。

先へ先へと進んでいくと大きな扉の部屋の前に着いた。

『イワン様。ホルヒチヨフに御座います。お客様をお連れしました』  
『ホルヒチヨフか。客人をお通ししなさい』

『はい』

ノーツ語だ。

アシユマはそう聞き取った。

アシユマは旅する事が多かった為か、各国の言語に堪能だ。

しかしそれも今にして思えば、イレギュラーナンバーだったが故  
の能力かもしれないかった。

そして扉は開かれた。

そのホルヒチヨフが下がるうとする所を、アシユマは腕を取り、  
関節を固め、そして、

「リイナこの男の懐を探れ」  
そう言った。

リイナはホルヒチヨフの懐を探りコンバットナイフを見つけ出し  
た。

アシユマは周りを見据え、

「ドアの後に居るもの、お前らは下がれ！」  
そう言い放った。

慌ててアガツコフの方へと下がって行った。

「もっと平和的な挨拶は出来んのかね？」

アガツコフは言った。

イワン・アガツコフ

党書記長にして、ノーツ連邦の最高指導者。

ガツチリした身体にいかつい顔、めがねを掛けて髪の毛は総白髪。豪胆な性格だが欲深い一面も見せる男だった。

「こつも色々あると疑り深くなっていかん」

アシユマは言った。

「アシユマ、コイツ女だ」

リイナが言った。

「君がアシユマ・アトー君かね。話しは聞いているぞ。色々とな」

「アーチエルには指一本触れるなよ？ 触れたりしてみる。貴様のそつ首刎ねに行くからな」

「なら、その女を放せ。交換条件だ」

「交換条件？ まあ、よかる」

「アガツコフ様！」

「おお、ヒルダ！」

「成る程、そういうことか」

アシユマは言った。

どうやらヒルダと呼ばれた女とアガツコフとは愛人関係にあるらしい。

「これでやっと対等な位置で話し合いが出来るな。こちらに来たまえ……おつと鬼虎があつたか。それをこちらによこしたまえ」

アガツコフが言った。

「渡すと思うのか？」

「その鬼虎には随分と辛酸を舐めさせられたものだよ。大人しく渡したまえ」

「渡さなければならん理由はどこにも無い。またその義理も無い」

「アシユマ君。残念だよ」

アガツコフは言つて指を鳴らした。

「残念なのはこつちだよ」

兵士共がばらばらと室内に入ってきた。

そして剣を構えアシユマ達の周りを取り囲んだ。

「リイナ、殺すなよ？」

アシユマが言った。

「貴様ではない。殺さんよ」

リイナが答えた。

アシユマは鬼虎を抜き峰に返した。

兵士が声を上げて上段から切りかかってきた。

アシユマは存分に引きつけておいて、敵兵の胴を存分に薙いだ。

次の兵は剣を突いてきた。

アシユマはそれを余裕でかわし、手首をへし折った。

そして、アシユマは敵兵を蹴散らし始めた。

リイナも奮闘。

相手の手首を斬ったり、腿を斬ったり、確実に相手の戦闘力を削り取って行った。

気が付けば敵兵は全て戦闘不能になっていた。

そしてアシユマはアガツコフに近付いて行きアガツコフの頬を張った。

「二度と俺達に構うな！！」

「おのれ鬼虎を持っていくからと言って！ 貴様なぞ、鬼虎を持っていなければただの人間の癖をして！！」

「そつちこそ、肩書きを取ればただの人間だ！ いい気になるな！！」

この言葉は相当アガツコフの自尊心を傷つけたようで、大いに屈辱感を味わったようである。

そして、

「行くぞ！」

言ってアガツコフの官邸から出て行った。

「アシユマさま？ これからどうなさるので？ はあ、はあ」

アーチェルは訊いた。

「取り合えず空港を目指そうかと思っている」

「空港で御座いますか？ はあ、はあ」

「どうした？ アーチエル。大丈夫か？」

「はあ……。はい！ 大丈夫で御座います」

「そうか」

そう言っただけアシュマはアーチエルの頭を撫でた。

「いいなあ、姉様……」

アシュマはキュポアのところへやってきて、キュポアの頭をゴシゴシと撫でた。

「うわっ。か、怪獣、髪の毛が……頭がいた……きゃっ」

キュポアは悲鳴を上げそうになったが、

「キュポアも頑張った」

アシュマはそう言った。

途端にキュポアはご機嫌になり先頭を歩き出した。

すると、後からノーツ連邦の兵士が、前からはサイコフライヤー

と、どこの国の所属か分からない空挺部隊が降りてきた。

「あなた方は、アシュマ・アトーさんとお仲間ですか？」

「そうだが？ アンタは？」

「自分はレボトミノ連邦共和国所属の第十二空挺部隊のラスコール・シヨウハウゼン大佐であります。貴方方を助けに来ました」

「本当だろうか？」

「嘘は申しません」

「わかった。信用しよう。その代わりに……」

「そこら辺のところは了解しているつもりです」

「わかった。行こう、みんな」

が、アーチエル達は、中々乗り込んでこようとしない。

「皆は信用して無いらしい」

「これは困りましたね」

「……ここで、こうしていても埒が無い。皆、行くぞ！」

キュポアが下知を下すように言った。

「おい、ラスコール大佐とやら」  
「は？ 何でありましょう？」  
「もう、実験室行きは御免だぞ」  
アシュマが言った。

黒龍号はノーツ連邦に侵入し現地協力者とのランデブーポイントにやって来た。

そこは一面の雪原で、車が一台止まっていた。

黒龍号は雪原に接地しヨデイが雪原に降り立った。

対して車のほうからは、女性が降りてきた。

「オロ・エバス財団の関係者の方か？」

ヨデイが訊く。

「ええ。そうです」

その女性は答える。

「早速で済まないが、アシュマ・アトーの所在を知りたい」

「アシュマさんはもういません」

「へ？」

「アシュマさんならレボトミノ連邦共和国に行かれました」

「ええ！？」

ヨデイはお礼と別れの言葉もそこそこに、黒龍号に戻ってきた。

「ヨデイ、アシュマの居所はわかったのか？」

オルバニアンが訊く。

「レボトミノ連邦共和国だそうですね。さあ、行きますよ。オルバニアン半球板に手を置いてください」

「これ、楽なように見えて、結構疲れるわ。こんなのアーチエルのお姫さんはやってたんだな。俺尊敬するわ。いや、マジで」

アシュマ達を乗せたサイコ・フライヤーは都市の中心部へ入りそ

のままある場所へ飛んで行った。

その場所とはこの国の大統領官邸であった。

真つ直ぐに大統領官邸に飛び、その庭に下りようとしていた。

サイコ・フライヤーが降り立ち、タラップが降りてドアが開いた。

一番最初に出てきたのはキュポアであった。

「おおおお、こっちの方がノーツ連邦よりも、ささささ、寒いではないか!？」

「少し待て。皆が出てきたら暖めてやる」

アシュマが言った。

「ほんと。少し寒いですね」

アーチェルが言った。

「アーチェル、キュポア、こっちおいで」

アシュマが言った。

二人ともアシュマの側に寄った。アーチェルなどは抱きついて来た。

「こらこら、アーチェル。そこまで引つ付かなくても大丈夫だよ」

「最近のアシュマさまちょっとつれないです。前はキスとかしてくれたのに」

(これは矢張り、男の味を知ったら、相当ねだつてくるぞ)

アシュマは思った。

「ね、姉様。何てことを口走っているのじゃ!？ 子供があるのじやぞ!？」

キュポアが顔を真つ赤にしながら怒った。

「あら、いけなかったかしら?」

アーチェルが言う。

そしてアンとリイナが側にきた。

「大佐殿。で、俺達はどうすれば良い?」

「自分が案内します。こちらへどうぞ」

シヨウハウゼン大佐は言った。

大統領官邸の裏口からアシュマ達は官邸内に入って行った。

少し通路が続き通路の突き当たりにぶつかった。

そこには扉があった。

シヨウハウゼン大佐がノックする

「だれかね？」

ドアの向うから問いが発せられる。

「シヨウハウゼン大佐であります！ お客様をお連れ致しました」

「そうかね。入って頂きなさい。君はもう帰って宜しいよ」

「わかりました。どうぞ！」

ドアは開けられた。

アシユマが正面切って入って行った。

続いてアーチエル達が入って行った。

「流石に王者の風格を持つお人だ。アシユマ・アトーさん」

「あなたは？」

「申し送れました。私はこの国の大統領、テオドル・ブルツクドルフと申します。ようこそレボトミノ連邦共和国へ！」

「この国には実験室なんて物は、無いだろうな？」

「実験所は数あれど、アシユマ殿とアーチエル様を実験検査するよ  
うな施設は、ありません。まあお掛けになりますか？」

椅子を勧められた。

アシユマはこの人物に好感を持った。

威張るわけでもなく、卑屈になるわけでもなく物腰柔らかかな中に  
強さを見た。

テオドル・ブルツクドルフ、中々の人物と見た。

その様なテオドル・ブルツクドルフが言葉を発した。

「我々はあなた方のような『力』を憂えております。世界のどの国  
にもあつては成らぬ力だと考えています」

「俺もアーチエルも、好きで持った『力』ではない」

アシユマが言葉を返した。

「わかつておりますが、その力が元で、様々なトラブルが耐えない  
のも事実です」

「だから、好きで招いたトラブルではないと言っている」

「その『力』国元連に預けた方が良いのでは？」

「断わる。友好的な国ばかりとは思えんのでな」

「アシユマ殿。すこし庭に出ませんか」

「良かるう」

テオドールは席を立った。

アシユマもそれに続いて席を立った。

なんと、アーチエルもそれに倣って席を立ち、アシユマ達の後を追った。

キユポアが、その後を追おうとしたがアンに止められた。

三人は先程サイコ・フライヤーが降り立った庭に出た。

既にサイコ・フライヤーは居ない。

庭はよく手入れされていて、この時期のこの気温でも、緑を絶やさなない種類の植物を植えていた。

「さてアシユマ殿」

テオドール大統領は口火を切った。

「矢張り国元連に任せる気はありませんかな？」

「ない。さつきも言った通り友好的な国ばかりとは限らんからな」

「例えば？」

「アヘイビアなどがいい例だ。奴等は国益の為なら何でもやる。国元連に鬼虎を預けても体の良い理由をつけて取り上げるだろう。ならば手元に置いた方が何倍も安全だ」

「身近にいる人が犠牲になっても？」

「そんな事はさせません」

アーチエルが答えた。

「どうやって？」

「我が全生命をかけて護ります。それが敵わぬ時には我が命を捨てます」

「アーチエル。人には『殺すな』と、言うのに……」

アシユマが不平を言った。

「わたくしは『殺すな』とは言いますが、『戦うな』とは言っておりません。もちろん戦わずに済むのならそれに越した事はありませんが、不当で理不尽な暴力には立ち向かっていくべきだと考えております」

『ならばその身で証明して貰おう！ アーチエル・アップルトン！』  
「！！」

その時上空から二体の機動外骨格状の『モノ』が降り立った。

「アーヌ……？ じゃないな。何時ぞやの奴か？」

アシユマが言った。

「ウルクだ。アーヌだけでは飽きてきた頃だろう？」

ウルクが名乗りを上げた。

「じゃあ、アタシの相手は、お嬢ちゃんにしてもらおうかしら？」

「あなたは確か……？」

「カシアよ、アーチエルお嬢ちゃん」

カシアが名乗りを上げた。

「アーチエル！ 大統領を連れて逃げろ！」

「はい！」

「アシユマ・アトーよ。随分と余裕だな。我等に一度ばかり勝ったからと言って、図に乗るな」

ウルクが言った。

「お嬢ちゃん、アタシと戦ってくれたら大統領は見逃してあげる」

カシアが交換条件を出してきた。

「いいわ。わかりました。その条件呑みましょう」

「アーチエル！！」

「貴様の相手はこの俺だ」

ウルクがアシユマに切りかかってきた。

アシユマはアーチエルの事が気が気でならず、ウルクとの勝負に集中できなかった。

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド！！　バイ、ファイファイ！！」

アーチエルはシールドの呪文を唱えた。

大統領は逃げようか迷った。

が、ここで逃げて何の大統領か。

現に彼等二人は、戦っているではないか。

「大統領！　早くお逃げ下さい！　戦いに集中できませぬ！」

アーチエルが叱った。

カシアは手持ちの鞭を大きく振りかぶってアーチエルに向けて撓らせた。

電光を発している。

電磁鞭だ。

カシアの鞭はアーチエルのシールドに阻まれて地面に落ちた。

「そうだわ。この小娘、これがあるんだった」

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク！！」

ズガアアアアアン！！

と、言う轟音と共に稲妻がカシアの身に襲い掛かった。

「お……のれ……小娘」

しかしカシアは以前より堪えてはいないようだ。

「何故？　これが通じなければ……」

アーチエルは呟いていた。

「アーチエル！ 待っている！ 直ぐに行く！」

アシユマが叫んだ

「もう勝った気にいるのか？ 御目出度い奴め」

アシユマとの鏢迫り合いの中、ウルクがそう言った。

そういえば、このウルクとの鏢迫り合いでウルクの大剣は刃こぼれをしていない。

相当硬い素材でできているようだ。

鬼虎でも刃こぼれしていないようだ。

「相当いい剣の様じゃないか？ ウルクよ」

「気付いたか。この剣も、この身体も、最早、貴様の鬼虎は通じないと思え」

「通じないのか？」

「通じるものか。アシユマ、お前用に調整したこの身体だ。鬼虎などモノの数ではない」

「なら、試してみるか？」

「何い？」

(駄目だわ。サンダーストライクが通じない！)

アーチエルは心の中で叫んだ。

そして焦った。

持っている手駒は少ない。

その上シールドはあの電磁鞭で一枚一枚薄皮を剥ぐ如く剥がされて行く。

アーチエルは暫しの間迷った。

そして決めた。

少ない手駒の中で何を使うかを。

「うふふ。子猫ちゃあん。もう、その雷は通じなくてよ？」

「ならこれを受けて！ 私の全霊力をこの一撃にかけます！」

「何？」

「汝ら聖なる創造主に仕える者よ

汝ら敢えて苦難を求むる者よ

汝らの苦難は茨の道程

汝らの苦難は栄光への道筋

永久の闇に一条の光を放て

汝の敵を撃て

マジックアロー!!!」

アーチエルの全霊力が込められた一筋の光の矢がカシアに向けて放たれた。

カシアは完全に虚を衝かれた。

身体をかばう事も避ける事も出来ずに胸の真ん中を貫かれた。

アシユマのほうも決着が着きそうであった。

お互い、次の一太刀に賭ける様であった。

ウルクは半身引いた八双、アシユマは、秘剣・裏・閃光一刀・崩しの構えを取った。

ただアシユマは、半眼を閉じ、どこを見ているか分からない様な感じであった。

均衡を崩したのはウルクのほうであった。

ウルクはもてるその突進力でアシユマを押し潰そうとした。

ウルクはアシユマ目掛けて八双から剣を振り下ろした。

不思議な事が起こった。

まるでそうなるのが当たり前のように、アシユマは下からの一刀でウルクの両手首を切り飛ばし、一步前へ出てウルクの後ろにまわり込み、返す刀で鬼虎はウルクの背中を袈裟へと斬り抜けた。

アシユマはウルクに声をかけた。

「鬼虎などモノの数では無かったのではないか？」

ウルクはうづくまり、細かく身体を痙攣させていた。

流石にカシアもアーチエルに胸を貫かれて虫の息だ。

だが動いている。

大したものだ。

アシユマはアーチエルの方へ走りよった。

「アーチエル！ アーチエル！！ …… こんな所で禁呪なんて使いやがって！ 全く無茶をする娘だ……」

「……して、しまい……」

アーチエルが小声で何かを喋り始めた。

「なんだい？ アーチエル」

「……して、しまいました」

「喋らなくてもいいからゆっくり休め」

アシユマはそう返し、アーチエルを抱き上げた。アーチエルは泣いていた。

「どうしたんだ？ アーチエル」

「殺して……しまいました」

「あれは相手が悪い。普通の道德規範に当てはまらない。自分を責めるな。アーチエル」

「ただ相手を倒そうとただけなんです。殺そうなどとは少しも考えていません。本当です」

「分かっている。信じているよ。アーチエル」

そして、アシユマは軽くキスをしてやる。

「済みません。有難う御座います」

アーチエルはぼろぼろと涙を流し始めた。

「それに死んでいない」

「本当ですか？ 良かった」

それをキュポアが見ていて、

「な、何をするのじゃあ、子供の目の前で！！ 大体、いつもいつも姉様に、事ある毎に何をしているのじゃあ！！」

「駄目かい？ キュポア」

「駄目じゃ！！ 決まっておろうが！！」

「そうか。駄目か。駄目だそうだ、アーチエル」

「では、控えます」

アーチエルは言った。

「……大統領も、よくぞ御無事で」

アシユマは大統領に手を差し伸べた

「全くキミ達には驚かされる。いつもながら君達の敵方の陣営に回つてしまう事を後悔するよ」

「それは仕方がありますまい。色々と義理だのしがらみなので身動きが取れますまい」

「君にそう言ってもらえると助かる」

「!？」

「どうかしたかな？ アシユマ殿？」

「サイコ・フライヤーの音……？」

上を見ると、空挺部隊のサイコ・フライヤーが二十機ほど、アシユマ達の頭上に留まっていた。

そしてロープが垂らされ空挺部隊が降りてきた。

そこへようやく、ラスコール・シヨウハウゼン大佐の部隊がやって来た

「大統領！ 大丈夫ですか!？」

「私はいい！ アシユマ殿と、あの子らを」

「いや、大佐！ 俺はいい！ 大統領とアーチエル達を！」

アシユマは叫んだ。

「大統領こちらへ」

シヨウハウゼン大佐は、大統領を引つ張るようにして官邸の中へ連れて行くこうとしていた。

「大佐、どこの軍か分かるかね？ 後で正式に外交ルートを通して、抗議してやる！」

大統領は静かに怒りを燃やしながらそう言った。

「大統領、あれはアヘイビアの空挺部隊かと思われます」

「そうか。アヘイビアかね。後で絶対に抗議してやる！」

大統領は憤慨した。

アーチエル達が官邸内に入ろうとしたとき、ウルクとカシアは一旦、空挺部隊に囲まれたが、指揮官若しくは隊長らしき人物が「この方々は法皇庁の方から出向してきた方々だ。保護して差し上げろ」

そう言った。

これを聞き、皆はとても信じられないと言った風だった。

ただでさえこちらが、襲撃を受けて被害を蒙る側だということに、それを事もあるうか保護をするとは、どういうことかと腹を立てた。そして、アヘイビア側の兵士はウルクとカシアを後生大事に引き取っていく。

それに対してこちらには、

『我々は、アヘイビア軍である。中で人質をとって立て籠もっている者！ 武装を解除して大人しくできなさい！ 抵抗しなければ命の保障と人権を保障しよう』

そう言い出す始末。

実際アーチエルなどは違う意味で、また泣き出したくなった。

「アーチエル、騙されるな！ こいつ等の手に落ちたら何をされるか分かったもんじゃないぞ」

リイナが言った。

「分かっております」

アーチエルも返す。

「アヘイビアは自分より力のあるものを認めませんから。口ではなんだかんだ言って結局始末しようとするでしょう」

ブルックドルフ大統領が言った。

「よし」

言ってアシユマは出入り口の前に陣取った。

「アシユマさんそこに立たれては我々の仕事が出来ません」

小銃を持って、土囊の後ろに控えた、シヨウハウゼン大佐が言った。

「大佐にはそこで皆を護る最後の砦の役をして欲しい。迎え撃つの

は俺がする」

そうアシユマは言った。

地上に降り立ったアヘイビア軍はじりじりと包囲の輪を縮めていく。

アシユマは居合いの形で、腰を落とし、気を溜めた。

「突撃ッ！」

アヘイビア降下部隊の指揮官が指示を出した。

皆一斉に突撃を始める。

小銃を乱射してくる者。

剣を振り上げて来る者。

それらの者を見据えてアシユマは、溜めに溜めた気と共に鬼虎を引き抜いた。

すると鬼虎に纏わり付いていた光は無数の球となってアヘイビアの兵士へと飛んで行った。

そして、剣を折られたもの、胸を撃たれた者、腕を撃たれた者、脚を撃たれた者。

何かしらの被害を受けたもの、二十余名。

隊のおよそ三分の二が被害にあったことになる

威力を抑えて撃つたので死亡者は居ない筈である。

そしてアシユマはまた納刀した。

「た、退却!!！」

どうやら指揮官も馬鹿では無いらしい。

来た早々退却する破目になり体面は保てないが仕方の無いことだろう。

負傷した兵を收容してサイコ・フライヤーで飛び立とうとしていた。

アシユマはそれを眺めていた。

見逃すつもりでいたのだ。

アシユマは大統領官邸に再び足を入れた。

そして今に再び足を踏み入れた。

開口一番、アーチエルは、

「アシュマ……」

言いかけたのに対し、アシュマは、

「大統領、ご無事ですか？」

そう言った。

アーチエルは少しむくれた。

自分に一番最初に声を掛けてくれるものだと思ったからである。

「大統領、願いがあります。無線をお貸し願えないでしょうか？」

「何にお使いで？」

ブルツクドルフ大統領は訊いた。

「黒龍号に連絡を……」

皆は喜びの声と安堵の声を混じらせた。

#### 第四節 アーヌ……天龍鬼を巡って

「いやあ、心配しましたよ。アーチエル様！ 大丈夫ですか？ どこが悪戯とかされませんでしたか？」

ヨデイは皆と再会するなりアーチエルの手を取ってその様に言った。

「悪戯？ いいえ？」

アーチエルは何故ヨデイがそんな事を言うのかと思った。

ところで、キュポアは不思議だった。

以前のキュポアならそんなヨデイを見て、怒るなり悲しむなりしたであろうが、今は怒りもしないし、悲しみもない。

その代わりどうしても視線がアシユマを追ってしまう。

アシユマの一挙手一投足に眼が行く。

その行動に気持ちがかき乱される。

何故だろう……？

「ヨデイ様？ 今回の一番の被害者はアシユマさま。是非アシユマさまを労って下さい」

「アシユマくん、ゴクローサン」

「感情がこもってないぞ？ ヨデイ」

「まま、いいじゃないですか」

「よくない。本当にねぎらって欲しいくらいだ。今日この一日の慌しさは、一体なんだ？ 幾ら鬼虎が、ちよつと秘密を明かしたからと言って」

殆どアシユマは愚痴を言っていた。

「秘密？ 鬼虎？」

ヨデイはまだ飛び立っていない黒龍のブリッジに行き、備え付けの電算頭脳で、タイムの聖書を片手に検索を始めた。

『惑星直列』……二千八百件ほどヒットし、その中からめばしいサイトを見つけた。

「『月は惑星ではありませんが、珍しいことに、これらが一直線上に並ぶのは』……今日じゃないか！」

「どしたの？ 何か面白い事でも見つけたの？」

エファールが覗き込んだ。

「ルーンの黙示録ですよ。見てください」

美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の神。

それらが一つに重なる時、それは秘密が明かされる時。

対の鬼の秘密が語られる時。

しかしその秘密を語る時はあまりに短い。

その前後、龍は相反する痛みに身を囚われ、聖廟、鷲、鎌等は、祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろう。

この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混乱する。

あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である。

嗚呼、私はそれを見た。

「ああ、これね」

エファールは冷めた言い方をした。

ヨディはエファールに構わず、話を続けた。

「『美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の神。それらが一つに重なる時、それは秘密が明かされる時』これはですね今日、たった今です」

「えっ？」

全員に軽い衝撃が走る。

「今、調べました。以前レン又王子が言いましたよね。これらは惑星を表しているって。レン又王子は明言を避けたが、僕は惑星直列と踏んでいました。その証拠に……アシユマ君、鬼虎を引き抜いてください」

ヨデイが解説の後、そう言った。  
「ごうか？」

アシユマは鬼虎を引き抜いた。  
すると鬼虎は光を放ちながら、その刀身に文字を浮かび上がらせ、まるで巻物を巻くように、下から上へ移動させていた。

「『対の鬼の秘密が語られし時也』か」

アシユマが呟いた。

「対の鬼……アーヌの鬼……『天龍鬼』ですか!!」  
ヨデイが叫んだ。

「例え鬼虎の秘密を護ったとしても、天龍鬼の秘密を知られては意味が無い」

アシユマはそう言い切った。

「では？」

「アーヌを探し出して何とかするしかあるまい」

「やっぱり」

ヨデイが諦め顔で言った。

「ウルクとカシアが襲ってきた。撃退して、追い返したんだがその時に『法皇庁』関係とか何とか言っていたような気がする」

アシユマが記憶を手繰っていた。

「え？ マジで？ まさかそこに行くとか？ 何かアタシ罰<sup>ばつ</sup>が当たりそうでやだなあ」

アルミナが言った。

「罰などあたると本気で思っているのか？ 子供だな」

リイナがいつものお返しとばかりに、言った。

「わ、悪かったなあ！ 子供で！ お、お前だって子供じゃないかあ！」

「向きになる所が、益々子供。ぷ！」

「な……なにおう！」

「よしなさい！ 二人とも。アルミナもう少し大人になりなさいな。で？ 話を続けて頂戴な」

エファールは溜息をつきながら言った。

「俺はその『法皇庁』に行ってみようかと思う」

アシユマは決心した。

「あの……わたしは心理的抵抗が……」

アーチエルが引いた。

「私は行くぞ」

リイナが言い、

「あそこまで虚仮こぼされたんだ！ 仕返しをしてやる！ 私達に手を出した事を後悔させてやる！」

と、まで言い切った。

「アタシも行くわ。これで私達を着け狙うモノが、少しでも減るのなら」

エファールが言った。

「わたくしもああいうところは苦手ですのでちょっと……」

アンが言った。

「僕は行きたくないですね。正直言って。世界二十五億の信徒を、敵に回したくないですから。でも行かざるを得ないでしょうなあ。

予言に従うならば」

ヨデイは半分諦め顔だ。

「ヨデイ。何を中途半端なことを言ってるんだよ！ 男は行く時は行く！ 行かない時は行かない！ はっきりせんと！ ちなみに俺は行く！」

オルバニアンが言った。

「ワシは今回詳しい事を知らんでな。態度は保留にさせてもらおうかの」

アベニが言った。

「じ、爺！ いつの間に!？」

ヨデイが驚いた。

アシユマ以外の皆も驚いた。

アシユマは、

「最初からいたよな？ アベ二爺」  
そう言った。

「最初からいたで御座る」

「え、今回は時間が惜しいので、決を採ります。行くのに反対な人……アーチエル様とアルミナ嬢それにアンさんですね。では賛成の人……え、僕に、アシュマ君、オルバニアン、リイナ、エファールさんですね。態度保留はアベ二爺と。結果、五対三でレジルデにいく事になりました。おそらくレジルデを強襲する事になるでしょう。その所の覚悟だけはしてください」

「ヨデイ、その強襲の件なんだが、強襲するのは俺一人でいい」  
アシュマが言い出した。

「え？ それは無茶でしょうアシュマ君！」  
ヨデイが驚いた。

「では、黒龍号はどうする？ 砂糖に群がる蟻の如く敵が寄ってくるぞ？」

「う……」

「俺は、鬼子で、異端児だ。レジルデを襲うことに心理的抵抗は何も無い」

「そうですか？ 無理してませんか？」

「大丈夫だ。ヨデイ」

「では、それで行きましょう！」

「ヨデイ様！ それではあまりにアシュマさまに負担が掛かりすぎです。アシュマさまが可哀相……」

アーチエルが手で顔を押しさえた。

「アーチエル。仕方が無いんだ。全体を見回したとき、えらくいびつなモノがベストな時だつてある。今回がそのいい例だ。だからこれは仕様が無いんだよ。もしかしたら、残る皆の方が、つらい仕事になるかもしれない」

アシュマが言った。

皆もだまって、聞いていた。

「でも、それでは、アシユマさま一人に汚名が……本当に異端者にされてしまいます」

「俺一人の汚名で済めばそれでいい。それとも汚名にまみれた俺はいやかい？」

「そんな事あるわけ無いじゃないですか？ どんな事があるつとアシユマさまを想うこの気持ちは変わりません！」

アーチエルが上げたその顔は涙で濡れていた。

「え〜と、……ハンカチ……ハンカチ……」

「ハンカチぐらいは持ってます」

「そうか。少し眠るといい。ずっと強行軍だったからな。疲れたろう。短い時間だが少し休める」

「でも私が眠ってしまったら誰が半球板を……」

「俺がやる」

「それではアシユマさまの休む時間が……」

「気にせずゆっくりお休み」

アシユマはアーチエルにキスしようとした。

その時アシユマは誰かに裾を引っ張られた。

「？」

「怪獣、また姉様にえつちい事しようとしておるな？」

キュポアに止められた。

「いいだろ？ キスぐらい」

キュポアに反論した。

「だめじゃあ！ 当たり前前の事を聞くなあ！ 姉様は嫁入りまえの

大事な身体なんだぞ！ それを衆目のまえで、この恥知らず！」

キュポアは何故だが知らず、苛立っていた。

何故だか知らず悲しいような気持ちになっていた。

アシユマと、アーチエルの……いや、アシユマの事を考えるとキ

ュツ！ と、胸が苦しくなった。

その頻度が最近激しい。

それは恋だったのかも知れなかった。

ただし、本人が知らない、感情……初恋と言う物かもしれなかつたが。

「みんなとにかく寝るんだ」

アシュマが皆を寝かし付けに行く。

「十把一絡げにするなあ！」

キュポアがまた怒った。

アシュマは仕方ないと思い、

「じゃあ一緒に寝ようか。キュポア。良いよな？ アーチエル？」  
そう言った。

「別にかまいませんわ」

アーチエルは言ったあとで、

(あとでアーチエルのところに来てくださいますね)

アーチエルは念を押した。

「わらわだつて、わらわだつて、もう大人じゃあ。一人で寝れるわ！」

「わかつてる。俺と一緒にいるのか嫌かい？」

「嫌……じゃない」

「有難う」

キュポアにとって、意外なアシュマの一言が、優しくキュポアの胸に広がった。

アシュマがキュポアを寝かしつけた。

「なあ、怪獣。姉様との馴れ初めを聞かせてくれ」

キュポアはせがんだ。

「ああ、いいよ……。俺がアーチエルと出会ったのは、ノリトレアでの武道大会の後だった。アーチエルが確か、俺を部屋まで呼び寄せたんだ。丁度、アーチエルも囚われの身でなあ。その身でありながら、俺を保護したいと言ってきたんだ。何故かと聞くと護送中にアーチエルの身を奪いに来た奴がいたんだ。そいつに顔が似ていたかららしい」

「ナンバースとか言う奴等じゃろ」

「よく知ってるな」

「姉様から少し聞いた事がある」

「そうか」

「それからどうしたのじゃ？ 申し入れは？」

「断わった」

「なぜじゃあ!？」

「その時は確かこういったのさ。自分の手はべっとり血に塗れている。何時、誰に倒されてもおかしくない人間だ。だから護ってくれなくて良いってね」

「それでよく振られなかったなあ、お主」

「その時は振るも振られるも考えてなかったさ」

「で、その後、どうなるのじゃ？」

「ある経緯でアーチエルを助けたのさ。それから二人で旅をしエヴァイブ・エブルと言う人と死合いして、負けて……」

「ちよつと待て試合で負けて何故無事なのじゃ？」

「その人が途中で血を吐いて死んでしまった。死合い内容はこちらの惨敗。でも生き残った。不思議なものだ。後はノリトレアの王宮市に戻って、アーチエルを奪われて、また取り返して、脱出して。

……で、今に至る。かな？」

「……………」

「どうした？ キュポア？」

「姉様は羨ましいのう。お主の様な武士もののぶに好かれて」

「キュポアにも現れるさ。きっとその様な人が」

「本当か？」

「本当だ」

「怪獣。お願いがあるのじゃ」

「何だい？」

「『ぎゅ』して。姉様よりも長めに」

(何故、わらわはこんな事を言ったのじゃ?)

キュポアは自分で何でこんなことを言ったのか不思議でならなか

った。

それはアシュマに恋をしていたからであった。  
だから自然と出た言葉だった。

だが本人の意識の上には出てこないことだった

「いいよ」

そう言われた時キュポアは涙が出るほど嬉しかった  
そして抱きしめられた時、涙が本当に溢れ出た。

オルバニアン、アルミナと廊下ですれ違った。

「お疲れさんアシュマ、俺達は休むわ」

オルバニアンが言った。

「ああ、お疲れさん。ゆっくり休め」

アシュマが<sup>アキ</sup>労いの言葉を発した。

「アシュマ君随分時間が掛かりましたね」

ブリッジに入ってくるなりヨディにそういわれた。

「すまん、キュポアとアーチエルを寝かしつけていた」

アシュマは言った。

「いいわねえ。キュポア様は。アシュマのことだから、きつと優しく寝かしつけてくれたんでしょねえ。あと、アーチエルも。それに引き換えうちの人と来たら、優しいのやの字も知らないで。ぶつぶつ……」

エファールが愚痴を言い出した。

ヨディは急いでアシュマに

「アシュマ君、早く出立いたしましょう」

そう言った。

「では」

アシュマが半球板に手を付く。

エンジンに火が入る。

振動と共に低い唸り声を黒龍は発する。

ヨデイが操縦桿を引く。

黒龍号が静かに浮き上がった。

ヨデイが操縦桿を倒した。

黒龍号は天に昇りながら、前に進み始めた。

これから行くレジルデは、正式名称をレジルデ市国と言う。  
信者数二十億とも二十五億とも言われる、タイン教の総本山である。

所謂都市国家で、世界で最も小さい国の一つであるが、その権威たるや世界のどの国も及ばない、厳然としたモノがあった。

軍隊は持っていない。

形式的にレジルデ聖堂騎士団と言う騎士団を持つが儀礼用なので戦力といえる物ではなかったが。

そもそもにしてここに攻め込むなど、ある種自殺行為以外の何ものでもなかった。

それが例え、国であっても、団体であっても、個人であっても、そんな事は世界の主たる列強国が許さなかったし、この国の持つ権威と、二十五億の信者が許さなかった。

地理的には、パクスワイ共和国の中程にあり内包されている。

実質的にはこのパクスワイ共和国がレジルデ共和国を守る事になる。

パクスワイ共和国は所属としては、アヘイビア寄りの国であり、自由主義国家に属し、一党独裁体制のノーツ連邦や、クーロン人民共和国のような国とは、一線を画していた。

レジルデはパクスワイ共和国に護られ、二十五億の民に護られ、宗教と言う権威に護られた、いわば城塞都市なのである。

その様な所へアシユマ達は殴りこみに行こうというのである。

普通の神経では出来ない事である。

そしてこれからアシユマは、ある事を、ヨデイに話そうとしていた。

それは……。

「ヨデイ、向こうに着いたら、俺一人を残して一旦引いてくれ。レジルデには俺一人で行く」

「なんですって？ 馬鹿なことを言っっては、いけませんよ。百歩譲って貴方を下ろした所で我々が踏ん張る。そういう話だったじゃないですか！」

「そうよ、アシユマ。ヨデイの言う通りよ。貴方一人で突っ走らないで」

エファールがアシユマに注意した。

「皆の手前ああ言うしかなかったが……矢張り駄目だ。世界中に皆の面が割れてしまっっては、皆、異端者にされてしまう」

「でも、それは、アシユマも同じでしょう？」

エファールが言う。

「俺は構わん。だが皆は駄目だ。皆を異端者にするわけにはいかん。エファール、君の家は確か敬虔なタイニストだったはず。親父さんが嘆くぞ？」

「うっ……親は関係無いでしょ！？ 親は……」

「ヨデイ、君の家も確か……」

「御生憎様。僕の家は無宗教。こんな事からは全くの自由。ですから何の問題もなし」

「例えそうでも、普通の人間には心理的負荷が強いぞ？ 二十五億の民を敵に回す覚悟が出来ているのか？」

「う、それを言われると……」

「そういう人間にはきついぞ？ 心理的負荷と言っ奴は。下手をすれば、判断ミス。死に繋がる事さえありうる」

「……………」

「その点、俺はイレギュラーナンバーだ。その手のしがらみが一切

ない」

だからこの手の仕事は俺が適任だ……。

今にもその様に言いそうな、アシユマがそこにいた。

「わかりました。一旦着陸して皆を起こして……」

「駄目だ！ ……起こすな」

「自分の意見が数に押し切られるのが怖いですか？」

「ああ。怖いね。皆にはこのまま安らかに眠って欲しい。起こして、皆の気持ちを、かき乱したくない。頼む。ヨディ」

「……ああ……僕はいつとも損な役回りだ。起きて来た皆を説得しなければならぬ」

「済まない。ヨディ」

黒龍号のステルス性能が功を奏したのか、途中パクスワイのレーダーサイトにも引掛る事も無く、無事レジルデの近くまでやってくる事が出来た。

ここは、パクスワイのとある山中。

黒龍号はここに暫くその羽根を休める事になった。

アシユマは武装して……と言っても彼の場合は鬼虎一振りだけだけれども……ゴンドラに乗った。

「では、行ってくる」

アシユマが言った。

「気をつけて行ってきてくださいよ」

ヨディがそう応じた。

アシユマは顔に面を被った。

面と言っても頭をバンダナで縛り、サングラスを掛け、やはり頬にはバンダナを巻いて……という装いだっただが……。

一応、アシユマが元で、レキシタニアやオロ・エバス財団が国際問題に巻き込まれない

ようにとのアシユマの配慮だった。

「面を被るのなら皆で行っても良かったのでは？」

「皆で行けばそれこそ文字通り面が割れる確率が高くなる。矢張り此処は俺一人で行く」

「強情ですね。アシユマ君も」

「済まんな頭が固くて」

ゴンドラが動いた。

そしてアシユマは呪文を唱える

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイングー！！」

アシユマは、飛翔して行った。

レジルデの大聖堂が見えてきた。

かなり規模の大きい壮大なつくりだ。

豪華だ。

今日は何かの催し物らしい。

一般の信者が、かなり集まっている。

アシユマはレジルデの大聖堂前の広場へと降り立った。

周りがざわめく。

「なんだ？ 人間が空から降りてきたぞ？」

「天使か？」

「いや、違うぞ！ 俺は見た！ 悪魔の翼を持っていたぞ！」

「悪魔だ！」

「悪魔だ!!」

広場は騒然となり、一般の信者は、蜘蛛の子散らすように逃げていく。

アシユマはその真ん中を堂々と歩いていく。

眼の前に道が開けていくように。

そこへ聖堂騎士団と思われる騎士が二人アシユマの前に立ちふさがるようにしてこちらに来る。

「ちょっと、待ちなさい。我々と一緒に来てもらおう……」

そう言いかけたところへ、アシユマは抜く手も見せず鬼虎を抜刀し、素早く峰に返して、ばしり、ばしりと二人を打ち倒してしまつた。

倒されたうちの一人が呼子を吹いて、仲間を呼んだ。

忽ち集まる聖堂騎士団。

(数だけはそれなりにいるのだな)

アシユマは思った。

「幾ら面体を隠してもあの刀はまさしく鬼虎。おそらく賊はアシユマ・アトーでしょう」

そういつた男は傍にいる老人の腹心かと思われた。

「構いません。殺して鬼虎を奪いなさい」

そついい切つた老人は、現法皇イイヒラシバ十六世、その人であった。

「しかし場内が血で穢れてしまえますが？」

「構いません。後でなんとでもなります。それよりも鬼虎です。それが何よりも優先されます」

アシユマがいたら、

「余程法王らしくない言葉だな」

と、言ったかもしれない言葉だった。

アシユマは大方、入り口前の敵を片付けた。  
そして入り口の大扉に手をかけ、開こうとした。  
が、何かの気配を察知して扉を開けるのを止めた。  
その代わりアシユマは、鬼虎を右手にかざし、気合を発した  
すると大扉は吹き飛ばされ、内側に潜んでいた伏兵は扉の下敷き  
になった。

アシユマが大聖堂に入ると、ここでも信者が逃げ惑った。  
今は出入り口が、アシユマによって塞がれているので、皆聖堂の  
前に逃げるしかなかった。

そうこうしているうちにまた、前からも後からも聖堂騎士団が現  
れて、囲まれてしまった。

アシユマは右手に鬼虎を、左手にその鞘を持った。

鞘は何の金属かはわからないが、兎に角、謎の金属で出来ており、  
戦いに使用する折には重さが変わるといふ不思議な物だった。

「これから来る奴は、ただの怪我で済むと思うなよ」

言いながらアシユマは右前方に跳んだ。

そこが一番手薄だったからだ。

いきなりアシユマに跳び込まれた兵士達は驚いた。

衆に頼んで皆で、押し包んで殺してしまえばいいと、考えたから  
であった。

だがアシユマはそうなる前に輪に跳び込んだ。

敵の攻撃を鞘で受け止め、鬼虎で薙いで払い、袈裟に打ち、小手  
を打ち……。

敵の包囲の輪は総崩れになった。

アシユマが鬼神の如き働きを見せたからである。

アシユマは縦横無尽に動き回り、輪を左回りに食い尽くして行っ  
た。

アシユマは粗方聖堂騎士団を倒すと、聖堂の真ん中を進んだ。

信者は今度は両方の壁際を伝い一斉に後へと逃げた。

だが、まだ司祭が壇上にいた。

殊勝にもアシュマに神の愛を説こうとしていた。

アシュマは壇上に上り司祭の方へと歩いて行った。

「迷える子羊よそなたの悩みは何かな？ 我が前にて、懺悔するが良い。さすれば汝の魂は、神の名の元に救われよう」

「司祭殿、俺の悩みは、法皇イイヒラシバ十六世の居所がわからないことだ。どこに潜んでいるか教えてくれ」

そうアシュマは言った。

「なんと！ 法皇様を名指しで呼ぶなど畏れ多い。法皇様の居場所など知らぬ」

司祭は言った。

「そう言うと思った。ならばこう言うのはどうだ？ 今から俺はひとつ飛び歩いてきて外にいる幼子を一人連れてくる。そこで俺はアンタに問うわけだ。『イイヒラシバ十六世はどこだ？』と。答えればよし。答えぬ場合は幼子の命は失われる。俺はアンタが答えるまでこれを繰り返す。どうだ？」

「……この、悪魔め……ひとつ約束してくれ私の命はどうなってもいい。法皇様のお命だけは、どうか奪い去らないでくれ……」

「法皇がどういう人間かは知らぬが、基本的には約束しよう」

「すまない。法皇様はこの奥にある本殿の中央の……」

アシュマは祭壇の裏にある本殿への通路を歩いていた。

本殿にいるイイヒラシバ十六世にアーヌの居場所を訊く為だ。

もしかして此処にアーヌ本人がいるかも知れない。

アシュマは広めの通路を歩いて行った。

すると……やはりと言っているのか……聖堂騎士団が、前後を挟んだ。

「いらぬ邪魔立てをするな。痛い目を見るぞ？」

アシュマは鬼虎と鞘を抜いた。

そして鬼虎を峰に返した

アシユマは先ず、先へ走って行き、前からやって来る聖堂騎士団の騎士を、鬼虎で薙いだ。

次の者は、逆袈裟に打ち据え、更にその次の騎士には、又もや袈裟に打ち据え、鎖骨を砕いていた。

そして、反転し、後ろから来た騎士も、袈裟に打ち据え、逆袈裟に斬り上げていた。

アシユマに掛かれれば、みな据え物斬りの如く、ばたりばたりと打ち据えられていった。

そして終には、通路の敵は皆打ち倒されていた。

「確かにここでは、待ち伏せが丁度良かったんだがな。済まないな。相手が悪かったと思ってくれ」

そうアシユマは呟いた。

後はアシユマは法皇の間を目指した。

レジルデは建国以来、賊に大聖堂は元より、本殿にまで侵入されたことはなく、これは一つの歴史的な屈辱ごとであるといえただろう。

本殿に入り階段を上り最上階に出、中央の法皇の間まで行く。

そして、扉の前に立ち、中の気配をうかがう。

一気にドアを開け放つと、中には誰もいなかった。

「それはそうだろうな」

独りごちると、アシユマは、法皇が座っているであろう椅子まで、やって来た。

すると、気付かなかったが、カーテンに隠されてはいたが、法皇の椅子の後には部屋がありそうだった。

何故わかったかと言うと、薬品のような異臭がしたからであるが、それが無ければ分からないところであった。

奥へ入ってみると緑色した液体の入った、ガラス張りの棺桶かんおけのよ  
うなモノが四つ置いてあった。

（ウルクとカシアは治療を受けた……彼等は四天王……四人……四

つの棺桶……四つの治療装置！　そうかここが！　……ここが全ての元凶なのか！？）

アシユマは一呼吸置いて、

（いや、まて。結論を先走るな……。ここは拠点の一つかも知れない）

と、思い直した。

（どちらにしろ、アーヌもウルクもカシアもいなかった。ここは引き上げ時かも知れんな）

そう思つて法皇の間に戻してみると、そこには四天王の内の一カフルがいた。

「待ちかねていたぞイレギュラーナンバー」

アシユマは出て来るなりそう言われた。

「確か……カフルと言つたな？　四天王の」

「いかにも。覚えていて頂き、光栄の至り。やることは分かつているな？」

そうカフルは言い、身体を半身にし、剣を前に突き出した構えを取った。

「それがお前の望みなら。その前に聞かせる。アーヌはどこだ？」  
アシユマは訊いてみた。

「貴方の方からそれを言うのは、珍しいことはありませんか？」

「どうでもいい。アーヌはどこだ？」

「アーヌはですねえ、ここにはいません」

「そうか。邪魔したな」

「待ちなさい。私との勝負がまだです。確か貴方とは、まともに戦つた事ありませんね？」

「……もう能書きは良いか？」

そう言つて、アシユマは鬼虎の柄に手を置き、居合いの形を取つた。

アシユマが居合いの形を取つてからと言つもの、二人はぴくりともしなくなつた。

カフルは動けないでいた。

アシュマは、ただひっそりと佇んでいるようにしか見えないのに、隙が無かった。

突けばかわされる。

引けば、斬られる。

恐るべき精神の使用量をこの戦いでは強いられた。

(これ程までとは……この域、アヌ並みだな。ウルクとカシアが敵わん訳だ)

などと考えている時、不意にアシュマが飛ぶように間合いを詰めてきた。

「しまった！」

したが、もう遅かった。

カフルのちよつとした心の隙を突いて、アシュマは突進し刀を抜いてきた。

逃げるカフルよりも鬼虎は速く、アシュマはカフルの半身を晒した右半身、つまり胴の四分の一を斬り割っていた。

「うっ、ぐう……アヌの鎧と同じ硬度なのに……恐ろしい程の手並みだな」

「止めがいるか？」

「いや、良い。なぜなら……」

「何故なら？」

「貴様も甘いな。さらばだ！」

カフルがそういつた途端、部屋の至る所で大爆発が起こった。

「！！！」

アシュマは爆炎に包まれた。

爆炎は窓と言う窓を突き破り、硝子の破片を撒き散らし、床を抜き、天井を吹き飛ばし、四つの棺桶を跡形も無く消し去った。

この隙にカフルは逃げ出した。

アシュマも、大爆発に巻き込まれながらも無事で、今は本殿の上空にいた。

「あつ、あいつだ！ 悪魔だ！！ 俺は見たぞ！ 司祭様に詰め寄る所を！」

「！」  
と、してアシユマは下を見た。

すると皆、蜘蛛の子散らすように逃げていく。

「ここにおいても無意味だな。黒龍号に帰ろう」

アシユマはそう言い黒龍号へと帰還して行った。

アシユマは黒龍号に戻ってきた。

だが、ゴンドラが見当たらない。仕方ないので後部ハッチまで来てロック解除キーを入れる。

しかし中からロックされているらしく、中に入れなかった。

アシユマはインタフォンに向かって、

「おい、ヨディ入れてくれー」  
そう言った。

「……………」  
しかし返事は無かった。

「おい……………」

「おい！ いい加減にしろ！」

「一人で先走るアシユマさまなんか、知りません！！」

「うっ、アーチエル……………」

「何です？ わたくしではいけないのですか！？」

「いつ、いや？ 悪い事無いよ？ 入れておくれ。アーチエル……………」

「そんな猫なで声出しても駄目です！ 暫くそこで反省してください！」  
「い！」

「アーチエル聞いておくれ。あのまま行ったら、みんな異端者の烙印を……………」

「そんな事、覚悟のうえですっ！」

「でも異端者だよ？ 全世界で指名手配されるようなものだよ？  
実際指名手配犯にされるかもしれないんだよ？」

『だから覚悟の上といたしました！！ それをアシユマさまは裏切っ  
て……ぐすっ……えぐっ……酷すぎますっ！』

「裏切って……っ たって……」

『もう、アシユマさまのばかあ……えぐっ……うええええ……』

「あああ、ご、御免よ、アーチエル」

この後、アシユマはこのまま一時間ほど締め出しを食らい、アー  
チエルを説得していた。

黒龍号のクルーがブリッジに集結している。

これからの方針を話し合おうとしていた。

「レジルデの大聖堂本殿でもああたったんだ。もう世界中どこに『  
棺桶』があってもおかしくは無い」

アシユマがぶち上げた。

「それなんだけど、アシユマよう。その『棺桶』があるところに必  
ずアーヌがいるって事は無いんじゃないの？」

オルバニアンが反論した。

「いや、あり得るかも知れませんよ？」

ヨディはアシユマを擁護した。

「何でだよ？」

「アーヌたちは、七賢人の中でも戦闘部隊としては、別格の扱いの  
はず。まず、やられることを前提として、設計はされてないと思っ  
ます。それが、負傷の治癒目的だけで、あのような棺桶を四つも常  
備しているとは、考えにくい。これは矢張り、通常のメンテナンス  
の為の装置と考えたい」

「別格だからこそ治療の為の装置として金を掛けて作ったって事は  
考えられないか？」

「ま、そうともいえるんですけどね。メンテナンス装置としての線

は、外したくないですね。そして常にそのメンテナンス機器から離れて行動するには制限がある。そういう風に考えたいですね」

「で、どうするの？ アシユマ？」

アルミナが訊いた。

「レジルデの大聖堂の『棺桶』は破壊された。だが、あそこで負傷した、カフルを含めウルク、カシアは大聖堂の『棺桶』にはいなかった。他に『棺桶』があると見て間違いなからう。それを潰しに行く」

「どこへ？」

オルバニアンが言った。

「ヨデイ、ルーンの黙示録ではなんと言っているんだ？」

アシユマが話をヨデイに振った。

「へ？ え、え〜と……これによりますと『その前後、龍は相反する痛みを身に囚われ、聖廟、鷲、鎌等は、祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろっ』……え〜『鎌』と『聖廟』は済んだので次は『鷲』……アヘイビアですね……アヘイビアといえば……」

「イーチャイルド！」

「大統領府！」

アルミナとオルバニアンが同時に言った。

「アヘイビアといったら、大統領府だろっ？」

オルバニアンが言った。

「イーチャイルドは神人と繋がっているのよ？ そこに決まっているわ！」

アルミナも反論した

「アシユマ！ どっち!？」

アシユマは二人に同時に聞かれた……。

「どっちねえ」

アシユマは頭を捻った。

「ヨデイ様？ その鬼虎の秘密が語られるのは何時までなんですか？」

アーチエルが訊いた。

「あと、一日半ですね」

ヨデイが答えた。

「ならば二箇所、回れますね？」

「そ、そうですね」

そうして、結局『イーチャイルド家邸宅』 『大統領府』の順番で攻略する事が決まった。

「でも、他人様のお宅なのに襲撃して構わないのでしょうか？ それに大統領府も」

アーチエルが言った。

「それを決めさせたのは、貴女でしょうに」

エフアールが呆れた。

「今回も、俺が先行して行かしてもらおう」

アシユマが言った。

「駄目です。アシユマさまに先に行かれると、また私達は置いてけ堀にされてしまいかねません」

アーチエルが反対の意を表した。

「俺がいなくなればこの船の防御はザルだ。だから離れた所に黒龍を置いて……」

「皆で一緒にイーチャイルドのお宅に行く。これで問題ないですよ  
ね？ 皆さん」

「問題ないな」

「うん、問題ない」

「問題ないわね」

「……わかった。問題ない」

アシユマが渋々問題が無い事を認めた。

「大統領府もそうですね？」

アーチエルは、アシユマに言い寄った。

「わかった。アーチエル。勘弁してくれ」

アシユマは音を上げた。

「アヘイビアまではどのくらい掛かる？」

と、アシユマ。

「六〜七時間と言ったところでしょうか？」

ヨデイが答えた。

「それを使い切れば、残りは二十四時間前後と言ったところか」

「そうですね。休むのですか？」

「まだ大丈夫なんだがな。一応休んでおく」

「アシユマさま、お休みになるのですか？」

アーチエルが訊いた。

「ああ、休む」

「あの、ヨデイ様？ 少しエナジア宜し？」

「え？ ああ、良いですよ。すこしアシユマ君に、ガツンと言ってやってください」

「ガツンだなんて……ではちょっと失礼しますね」

そうしてアーチエルはエナジアのバーを手前に下げた。

「アシユマさまお待ちを……」

「なんだい？」

「いえ、そこまでご一緒に……」

「ふ・不潔じゃあ！ 怪獣！」

振り向くとキュポアが両の手に握りこぶしを作って立っていた。

「これ不潔とはなんです。キュポア」

アーチエルが叱った。

「仕事が無いと分かるや、好きな女子をたぶらかし自分の閨ねやに誘い込んで、えっちな事をする。これを不潔といわずして何と言っ!？」

「これ！ キュポア！ えっちなだなんて……」

アーチエルは顔を真っ赤にした。

アシユマはぴーんときた。

キュポアは嫉妬しているのだと。

そしてキュポアはこちら側に来たいのだと。  
即ち自分の側に来たいのだと。

しかし、その気持ちに気付かないからこう言う言い方で表現する  
しかないのだと。

アシュマはアーチエルに耳打ちをした。

アーチエルは最初困惑した風だったが

「いいわ。キュポア。こっちに来て。アシュマさまが、えっちい事  
しないように、見張って頂戴」

アーチエルは渋々そう言った。

「そうである。そうである。矢張りわらわが居らぬと、怪獣が何を  
しでかすか、わからんからのう」

キュポアは喜々として言った。

そして三人でアシュマのブースへ言った。

アシュマは少しの睡眠の後、眼を覚ましシャワーを浴びて、頭を  
覚醒させた。

その後にブリッジに上がった。

アーチエルも同様だった。

キュポアは一人アシュマのブース内で寝ていた。

アシュマはブリッジに上がるなり

「その後の展開は？」

ヨデイに訊いた。

「あと三十分程でイーチャイルド邸ですね。今、車の準備をしても  
らっています」

ヨデイは言った。

「アーチエル様もお出になるのですか!？」

アンが悲鳴を上げた。

「アン、そんな大声出さないで。危険な事は少ないわ」

「でもアーチエル様……」

「危なくなったら、アシユマさまが助けてくださいます。ね？ だんな様」

「おれもその点で言えば、アンに賛成なのだがなあ」

「まあ！ そこはどんと『俺に任せろ』とか行ってくださればよいのに」

三十分ほど飛んで、黒龍号は林の中に降りた。

そこには丁度良い按配で開けた所があったからだ。

車の通ったわだちもあつた。

一行はアルミナのクーペカブリオレとトラックの二台に分乗し真っ直ぐとイーチャイルド邸を目指した。

暫く行くとイーチャイルド邸が見えてきた。

いや、イーチャイルド家の敷地が見えてきた。

オ口邸と、同じ……いや、それ以上の広さかもしれなかった。

イーチャイルド邸の門まで来た。

門も長大だ。

幅だけで二十メートルを越えるのではないか？

アシユマが車を降りて門を開けに行く。

門に触れる前にピリツと感ずるモノがある。

アシユマは鬼虎の鯉口を切つて片方の門を押し開けた。

依然ピリツと来るモノを掌に感ずる。

矢張り高圧電流だ。

アシユマは構わず押し開ける。

鍵が壊れる。

門が、

ギギギ……。

と、言って、押し開かれていく。

門は開かれた。

アシュマは再び車に乗って、車は走り出す。

庭は庭園の様相を呈し非常に美しい。

森があり、林があり、様々な植生の木が生えている。

森はどこまでも続いている。

湖と言って良いほどの広大な池があり、端が見えない。

鴨などの水鳥が、生息している。

シーズンには鴨撃ち猟などが、出来るのではないか？

それほど広大な庭園なのだ。

庭園内に設けられた道に沿って、車を走らせていると、早速、迎撃部隊のお出ましに出くわした。

歩兵部隊二十人と行ったところか。

機動外骨格も何体か見られるようだ。

ミサイルランチャーで武装している。

「シールド！」

「シールド！」

アルミナとオルバニアンは、ほぼ同時にシールドを唱えた。

これは、長々とした呪文の詠唱が駄目な二人の為に、『シールド』と唱えただけで、言語魔方陣が組まれ、シールド五十枚掛けと同じ効力のある、ミスリル製のお札をアーチエル自ら苦心して作った物だった。

実は密かにアーチエルも自分用のお札を作り、

「シールド！」

そう唱えた所だった。

向こうがミサイルを発射した。

ミサイルは高速で飛来し一台目のクーペに命中した。

しかし、ミサイルは、鬼虎の念導境界面で防がれた。

「もう！ アシュマさま！ 折角、人が、シールドを掛けましたも

のを……」

そう言って、アーチエルはむくれた。

「悪戯に、魔力を浪費する事もあるまい」

アシユマは言った。

そして車を降り、

「先に行つててくれ。後で追いつく。敵の新兵器に気をつける」

そう言つて、歩いて一人後詰の敵のど真ん中へ。

「じゃあ、先に行きますよ？」

ヨデイが宣言した。

「行つてくれ」

アシユマはそう言った。

「さて……」

そう言つとアシユマはここで初めて鬼虎を抜いた。

ヨデイ達は道をひた走り……と言いたい所だが、直ぐに道に詰まつてしまった。

前方に敵兵約百人、機動外骨格もいる。

そして見慣れぬ砲弾とロケットランチャーを持つ歩兵がいた。

「何か、こっちの方にアシユマ君を持ってきたほうが良くなかったかい？」

と、自問自答しているヨデイがいた。

向うの兵士が撃つてきた。

小銃だ。

「？」

アーチエルは違和感を感じていた。

いつも受ける銃弾の感触と違うのだ。

「シールド！」

「シールド！」

向うのオルバニアンとアルミナはもうシールドを掛けなおしてい

る。

それだけシールドの消耗が激しいのだ。  
まだこちらが切り込む前だと言うのに。

「そうか！ 念封弾ね！ ……皆さん！！ 私がいつも言う事は無視してください！！ でないと全滅します！！」

アーチエルは、今、自分の主義主張を棄てた。

でないと、皆の全滅は眼に言えていたからだ。

「その言葉を待ってたぜ！ お姫さん！ 俺はあのロケットランチャーがクサイと思ってたんだ！」

そう言っただけでオルバニアンは七、六ミリ弾の六連装バルカン砲をドラムと共に持つてきて、乱射し始めた。

すると兵士がばたばたと倒れていく。

そして、例のロケットランチャーの兵士にバルカン砲の弾を食らわせた。

それと同時にロケットランチャーを持つ兵士もロケット弾をオルバニアンに向けて発射した。

（あのシールド量じゃ少ない！ 今から言っただけ……言っても間に合わない。私が行って……駄目！ 間に合わない）

アーチエルが行きかけた時、空から刀が降ってきて、地面に突き刺さった。

鬼虎だった。

鬼虎の念導境界面が新型砲弾からオルバニアンを救った。

砲弾が念導境界面に触れてバチバチと火花を上げる。

上空からアシユマが降りてきた。

地上に降りてアシユマは鬼虎を引き抜いた。

「ア、アシユマだ！ 血まみれの悪魔だ！」

「え、援軍を呼べ！ 中隊……いや、大隊単位で援軍をよこせと言え！」

「こ、攻撃だ！ 攻撃しろ！」

そうしてロケットランチャー隊がやってきて構えた。

そして、アシユマ目掛けて砲弾を発射した。その砲弾は途中で割れて細長い弾芯があらわになった。相当の運動エネルギーと貫通力を持つ砲弾のようだが……。それは鬼虎の念導境界面でエネルギーに変換され電光となって鬼虎の本身に吸収されて行った。

「念封された魔導石の砲弾か……」

アシユマは呟いた。

敵兵は未だ八十人程残っていた。

そしてアシユマが前進を始めると、蜘蛛の子散らすように撤退し  
て言った。

「今のがイーチャイルドの私兵か？」

誰にとも無くアシユマが訊いた。

「その様ですね。撤退して言ったのは懸命な判断でしょうね」

ヨデイが応えた。

皆はまた、車に乗り込んで、目の前にある丘を越えようとしてい  
た……が、なにやら丘の向こうが騒々しい。

道なりに進んでいくと丘の向こう側へ着いた。

すると、眼の前には大部隊が展開していた。

装甲兵員輸送車から兵達が降りてくる。

様々な新兵器が用意されてくる。

魔導機兵が地上に展開している。

魔導機兵にも様々な兵装が施されていた。

ロケットランチャー、電磁レールガン、プラズマキャノン、等々。

ヨデイ達は口をあぐりさせて、一瞬思考が停止した。

ぱっと見た目、魔導機兵は二百機。

兵士の数は千五百。

そのうち機動外骨格はおよそ三百。

「駄目だこりゃ。逃げましょう」

ヨデイが悲鳴を上げた。

「賢明な判断だな」

アシユマが言った。

「皮肉ですかそれは？」

「いや？ 素直な気持ちだが。お前たちはここから黒龍号へ戻れ」

「アー又はどうするんですか？」

アーチエルが訊いていた。

「俺ならここからひとつとびだ」

「わたくしもいきます」

「だめだ。アーチエルは、皆を護り黒龍号へと送ってくれ」

「ワタシが皆を護る……」

「そうだ。そして黒龍号に着いたら、一旦そこを離れる事。そして俺を追ってこないこと。いいね？」

「嫌です！ またアシユマさま一人に犠牲を強いて、アシユマさまばかりが損な役回りをさせられる……。そんなのもう見たくありません！！」

「議論している時間は無いんだ！！！」

アーチエルはアシユマの大声に吃驚びっくりとした。

アシユマがアーチエルにこのような激しい言い方をするのは初めてではなかるうか？

アーチエルは納得したのかしていないのか、曖昧に頷き皆と行く事にした。

「ヨデイ、アーチエルを頼む」

そう言い、アシユマはインカムをつけながら、次にアーチエルを見た。

アーチエルは涙目でアシユマを見返してくる。

「さっきは、すまなかった。必ず帰る」

そう言っアアシユマはアーチエルの髪を撫でてやった。

その手をアーチエルはそっと手に取り、頬擦りした

「早く帰ってきてくださいましね？ だんな様」

「わかった。早く帰ろう」

そう言っ二人がキスをしようとしたとき攻撃が始まった。

「無粋な。ヨデイ！ 行つてくれ！」

「わかりました。アシユマ君も無事で！！」

「アシユマさまぁー！！」

アーチエルが想い人の名を叫んだ。

こうしてクーペとトラックは来た道に戻って行った。

「さて……」

アシユマは一息入れた。

そして、

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング！！」

呪文を唱えて空に舞い上がった。

敵方的になる事で、囷となり、他の皆を逃がすつもりなのだ。

案の定攻撃はアシユマに集中した。

それもそのはずである。

ここを突破されてイーン・イーチャイルドに傷でも付いたなら…

…死亡するような事にでもなったら、ここにいる全員が責任を取らされるのだ。

だから、必死だった。

相手が、あのアシユマ・アトーと知っていても。

他の雑魚の事など、どうでも良かった。

アシユマアトーさえ止められれば。

さて、アシユマは皆が黒龍号に乗って、安全な所まで行く間、この者達の相手をせねばならなかった。

早速新兵器、魔導石の弾頭が、アシユマ目掛けて雨あられと飛んできた。

多分この弾頭は通常の弾頭より貫通力を増した弾頭なのだろう。魔導機兵の装甲の厚い部分に対して有効な武器だろう。

なお、魔導機兵の装甲の厚い部分としてはコクピット周り、エンジン部周辺などがある。

それらを貫くために開発されたのだろう。

その様な砲弾がアシユマ目掛けて飛んでくるのである。

ただ今の目論見は、おそらくアシユマの念導境界面の貫通。

だが、目論見は見事に外れ、アシユマの念導境界面で光となり、そして電光となり鬼虎に吸収されていく。

それが駄目ならと魔導機兵が徹甲弾を撃ってきた。

しかしこれも、鬼虎の餌になっただけだった。

アシユマは反撃を開始した。

まずは魔導機兵に対し空中で居合いの構えを取り、一気に鬼虎を引き抜いた。

無数の光の条が走り、魔導機兵を貫いた。

忽ち起こる大爆発。

多分、エンジンを貫いたのだろう。これで魔導機兵二十機は落とした。

バラけているので、その程度の数しか落せないが、敵方に見れば効果絶大だった。

「あ、悪魔だ……」

「噂に聞いてはいたがあれほどまでとは……」

「に、逃げようぜ。敵わねえって。なあ、逃げようぜ！」

敵側に与えた精神的ダメージは大きく、動揺を隠せないでいた。

アシユマは魔導機兵を再び狙いに定めた。

すると狙いを定めた先の魔導機兵が、潮を引くように分かれて逃

げていく。

ならば違う方向へと狙いを定めるとこれもまた逃げていく。

「ちっ！」

アシユマは舌打ちをした。

もうアシユマは狙いをつけるのを止めた。

敵がいるのを感じたら、その方向に刀を振る。

いつもやってきている事だった。

感じて振る！

光弾が放たれ、魔導機兵を貫き、爆発させる。

魔導機兵がどこへ逃げようとアシユマのこの攻撃からは逃げられなかった。

四〜五撃もすると魔導機兵は殆ど居なくなり、後は地上に残る歩兵のみとなった。

「歩兵如き相手にするまでも無いか」

アシユマはそう言って広大な庭園の上空を飛んでいた。

『アシユマ君、アシユマ君、聞こえますか？ どーぞー』

「ああ、聞こえるぞ。ヨデイ。そっちはどうだ？」

『もう少しで黒龍号にたどり着きます。そっちはどうですか？』

「こっちも大方片付いて……」

そう言ったところで、アシユマは沈黙した。

『アシユマ君どうしました!?!』

どうやら館に着いた事。

向うの館の上空で空母が多数の魔導機兵を展開させている事。

それが二隻いる事。

戦艦タイプが一隻いる事。

それらの事を伝えようか迷った。

要らぬ心配を掛けたくなかった。

「いや、なんでもない。多少、魔導機兵が残っているぐらいかな？」

『ホントですか？ アシユマさま？』

向こう側のインカムの使用者はいつの間にかアーチェルに変わっ

ていた。

「ア、アーチエル！」

『何をそんなに慌てているんですか？ まさかホントは窮地に立たされて……』

「ない。大丈夫だよ。アーチエル。」

『本当ですか？ アシユマさま』

「本当だよ。アーチエル。安心して欲しい」

『……わかりました。気をつけてくださいね？』

「ああ、わかった」

そう言つて、アシユマは通信を切った。

下には館があり、どうやらそこが目指す所であるらしい。

オロ邸よりも大きそうだ。

その向うには海がある

そして、戦艦のほうを見る。

艦首に何かリング状の物体がはまっている。

しかし、機械に疎いアシユマはそれを見ても、何の危険も感じなかった。

だが感じねばならなかったのだ、その危険を。

「いました。アシユマ・アトーです。本艦より距離、およそ四千」

「よし！ 対アシユマ・アトー用BB兵器、起動！」

戦艦のブリッジ内である。

艦長らしき人物が、艦内に号令を掛けた。

今、アシユマに危機が迫っていた。

「出力上昇中。臨界まであと五十パーセント」

「リング稼動。コイルに磁界発生を確認」

「出力上昇中。臨界まであと二十パーセント」

アシユマは、戦艦が、何かをしようと、しているのかと思っただが、いつも一撃で倒しているという、自負心から来る油断を自ら見逃し

ていた。

「出力上昇中。臨界に達します！」

「よし！ 照準あわせ！」

「照準、来ます！」

「よし、照射！」

「ん？ リングが光って、何……がッ！！」

アシユマの念導境界面が異常に発光した。

それと同時に、アシユマを強烈な頭痛が襲う。

「ぐっ！ が……かはっ！ ……な、んだ？ この……頭痛は……  
!？」

「対象物、念導境界面の共振発光でよくは見えませんが、効果はあるようです！」

「出力をケチるな！ めい一杯あげてやれ！」

「はっ」

(我等が開発した特殊な高周波を、お前の鬼虎がその念導境界面で同化するときに発生する特殊な電磁波が、アシユマ、お前の脳を破壊するのだ。お前の強力な念導境界面が、逆に仇となるのよ。アシユマ・アトー)

「かはっ！ ……あ、あの……光って……いる、リ……ングを……破壊……しないと……」

アシユマは、秘剣・裏・閃光一刀・崩しの構えを取った。

「ぐううっ！」

アシユマは、必死に痛みに耐えていた。

「もう、共振発光が収まってもいいはずなのですが……」  
「もう少し続ける！ データに誤差があるのかも知れん」  
「はっ！」

「うううっ！ ……があっ！！」  
アシユマはもがきながら鬼虎を水平に振りぬいた。  
そして光の弾を放つとそれは真っ直ぐに戦艦へと吸い込まれて行  
った。

光の弾は戦艦を貫き大爆発。  
そのまま館の一部分へ落下して、炎上した。

「ふう、頭痛がやんだ」  
後に残るは、空母二隻。

そして魔導機兵だ。  
非常に多数だ。

直ぐに囲まれてしまった。

その数、約四千。

こうなると面倒だ。

三百六十度、ぐるりと殲滅しなければならぬ。

周囲から、攻撃は開始された。

先程の脳へのダメージを受けた攻撃のせいなのか、念導境界面が  
弱い気がする。

アシユマは鬼虎に光弾を纏わせて、鬼虎を振り切り発射したが威  
力が弱くなった気がする。

爆発をする機体がいつもより明らかに激減している。

しかも光弾を発射するたびに頭痛がする。

「いかん。頭が馬鹿になったか？」

アシユマはそう呟く。

鬼虎の表面を見てみると、古代文字が浮き上がって、何かが書か

れていた。

やはり、先程の攻撃で相当のダメージを受けているようだ。どうやら『YES』と『NO』を選ぶ形式らしい。

自分で『YES』と思われるほうに触れてみる。

反応しない。

やはり、アーチエルでないとアシユマを直す事が出来ないらしい。頭痛がするのはしょうがない事として、アシユマは鬼虎を振るう。魔導機兵の爆発する数が増えたような気がする。

魔導機兵が攻撃を仕掛ける。

アシユマの念導境界面に、魔導機兵の攻撃が当る。

その度に頭痛がするのか、アシユマは両手で頭を抑えた。

「うっうっ！……うっ！……うあぁっ！！」

全く困った攻撃をしてくれた物だ。

アシユマは激しい頭痛に見舞われながら、そう思った。

頭を抑えながら鬼虎を振り回した。

その度に敵は減っていくが、アシユマの頭痛も酷くなった。

が、確実に敵の数は減っていった。

そして、その数を約半数にまで減らしていた。

アシユマは確実に敵を倒す数を倍化させていた。

アシユマは鬼虎を二振り、三振りさせ、やっと魔導機兵を粗方片付けた。

残りの数少ない魔導機兵は、撤退して行った。

空母はと言うと、既に遙か沖合いにあって、狙えば狙えるが、と言う、微妙な位置にいた。

アシユマは空母を狙うのを止めた。

アーチエルではないが、無駄な殺生をしても始まらないのと、自分の消耗がかなり激しい事、その様な理由で攻撃するのを止めたのだ。

それよりも、一刻も早くアーヌの居所を突き止め、アーヌの持つ『天龍鬼』の秘密を封印しなければならない。

アシユマはイーチャイルドの館、中央棟のガラス窓を破って内部に侵入した。

「危ない、無礼な！」

「? ……誰だ? お前は」

アシユマがそう言った先には、車椅子に座りフードを被った年老いた男と、それを押す青年がいた。

老人はかなり年老いていて干からびた感じがする。

青年は年の頃は二十八〜九。

湧いてでる内なる覇気を抑えている感じがする。

その覇気は、アシユマだから見抜けた事かもしれない。

「誰だとは無礼な! このお方こそ、当代イーン・イーチャイルド様であるぞ」

「イーチャイルドだと? こんな干からびたジジイがか?」

「重ねて無礼な!」

「無礼無礼いうな。俺には、こんなジジイより、お前のほうがよっぽど覇気があるように見えるがな。お前何者だ?」

「イーチャイルド様を差し置いて己の名など言えん。そういうお前はアシユマ・アトーだな?」

「如何にも。……お前の事は覚えておこう」

「酔狂な奴」

「ところで、アー又はいるか?」

「そんな名のものなど知らぬ」

「イーチャイルド家は七賢人。アー又は七賢人に仕える身。そういう話ではなかったのか?」

「知らんな。その様な話」

「勝手に見させてもらっぞ」

「どっぞ?」

アシユマはその部屋からぐるりと周囲を見回して、めばしい所をざっと洗った。

すると、『棺桶』四対は意外なほどあっさりで見付かった。

だがアー又は見付からなかった。

しかし、アシユマは怒りの炎に身を焦がし、車椅子を押す男のところに行った。

「ここもか！ お前は恥かしくないのか！？ あの、『棺桶』のよ  
うな装置は一体なんだ！？」

「さあ？ なんでしょうな？」

「まだ、言うかッ！？」

アシユマは右手を振り上げた。

「おや、殴る？ さてどちらを殴るのですかな？ いたいけな老人  
と、その車椅子の押手である私。どちらを殴るのですかな？」

車椅子を押す青年はそう言った。

アシユマは振り上げた拳をゆっくり納め、その怒りを拳に固め耐  
えていた。

「流石のアシユマ・アトーも老人と民間人には手を出せませんか」

その時老人が

「う……う……」

と、呻いた。

すかさず青年が口元に耳を持っていく。

「はい、何で御座いますよう……？ はい。……はい……承りまし  
た。はい」

青年が老人と会話した後、

「アシユマ・アトー。もう、用は無いはずだ。この屋敷から去れ」

「それはイーチャイルドの言葉か？」

「そうだ」

「とてもそのようには聞こえなかったがな。お前の自作自演か？」

青年は多少うるたえたように見えたが、直ぐに気を取り直し、

「イーチャイルド様の仰せである！ 立ち去れい！」

「良かるう。その前にやる事がある」

「何をする気だ？」

「『棺桶』を破壊してくる」

「な、なに！？ や、止める！」

「知らぬのでは無かったか？」

アシユマは先程見つけた棺桶の部屋までやって来て鬼虎を抜き放ち、右手に持って掲げた。

イーチャイルドの青年は何が起こるのかと近くまで寄って見に来た。

アシユマは青年を一瞥し、

「下がってる。死にたく無ければな」

そう言った。

「なに？」

「はっ！！」

アシユマが気合を発し、鬼虎の念導境界面から電光が発し、部屋中隅々まで一瞬で到達したかと思うと『棺桶』が大爆発を起こした。それはその部屋の壁を吹き飛ばし、窓ガラスを破り炎と煙を出した。

青年は咄嗟に部屋から下がり、何とか難を逃れた

火災報知器のベルがなる。

ここに来てやっと保安要員が小銃片手にやって来た。

が、イーチャイルドの青年が指示した事は消火作業を優先させる事だった。

「アシユマは放っておけ。どうせ小銃では意味が無いし、剣で奴に勝てるものなど一人もおらん」

「おい」

アシユマが青年に声を掛けた。

「なんだ？」

青年が車椅子を押しながら答える

「今日は俺もこっぴどくやられた。痛み分けだ」

「痛み分けか。良いだろう。イーチャイルド様には後でその様に述

べておこう」

「俺はお前に言っている。『また』があるかは分からんが、さらば

だ

アシユマは入ってきた穴からまた出て言った。

「気障きざわな奴」

青年は呟いた。

あれだけの被害だ。

追っ手は来はすまい。

アシユマは黒龍号に戻ってきた。

黒龍号は丁度アシユマの援護の為、飛び立とうとしていた。

アーチエルはホツとした表情を見せた。

他のクルーもホツとした表情をした。

だが、アーチエルは次の瞬間、

「鬼虎を見せてくださいまし」

そう言った。

何故と聞くと、

「鬼虎が点滅しております」

と、言う。

しかし当のアシユマ以下アーチエル以外のクルー全員には、そんなものは見えないと言う。

「怪獣。姉様の言うとおりにせよ」

キユポアにまで言われて渋々鬼虎をアーチエルに渡す。

鬼虎をアーチエルが引き抜くとそこには古代文字が浮かび上がっていた。

アーチエルはそれを読んだ。

「システム本体に重大な損傷が見られます。修復しますか？ ……

はい、いいえ……アシユマさま！ 『重大な損傷』とはどういう事  
ですの！？」

アシユマは言われ、たじたじになった。

アーチエルは何故かこの古代文字が読めるらしい。

ちなみにキュポアにはサツパリであった。

ところでアーチエルに問い詰められたアシユマはどうしたかと言  
うと、戦艦からの特殊攻撃にあったこと。

そしてそれ以来、鬼虎の調子が悪い事。

そして鬼虎を使うたび頭痛がする事。

以上の事を白状した。

アーチエルはそれを聞いて怒り、

「だから、あれほど、お気をつけてと言いましたのに」  
涙目になって訴えていた。

「怪獣、悪い事は言わん。姉様が本気で怒る前に謝っておけ？ な  
？」

まるで小さい子をあやすようにキュポアに言われた。

「すまん、アーチエル」

アシユマは言いキスをしようとした。

が、アーチエルは、つい、と横を向きアシユマのキスを拒んでし  
まった。

「そうそう何度も同じ手には引つ掛りませぬ！」

アーチエルが言い放った。

「アーチエル……」

アシユマが寂しそうな声を出した。

キュポアは何故かその言葉に反発を覚えた。

何故だろう？

「そ、そんな声を出しても許さないモノは許しません！」

「そうか。分かった。頭もいたい。寝る」

アシユマはとぼとぼとブリッジを出て行った。

キュポアはこの言葉にも反応した。

何故か物悲しくその言葉はキュポアの胸に響いた。

「え？ あれ？ アシユマさま？ え、え〜と……」

アーチエルは戸惑った。

「取り合えず、追いかけた方が良いのではないか？ 姉様」

「そ、そうね……アシユマさま！ 待つてください、アシユマさま！」

その後、アーチエルにより鬼虎によるアシユマの修復が行われた。「キュポア様、先程は偉う御座いましたよ」

ヨデイが行った。

「いや、わらわの方こそ、不出来な姉でござ迷惑をお掛けする。相すまぬ。この通りじゃ」

そう言つてキュポアはそこにいる皆に頭を垂れた。

「急に大人びましたね。キュポア姫。何かありましたか？」

エファールに言われた

「い、いや？ と、特に何も無いが？」

本気でキュポアはそう思っているらしい。

が、キュポアがアシユマに密かに想いを寄せているが為、と、リイナは推量をつけていた。

アーチエルがブリッジに帰ってきた。

「アシユマ君は？ どうしたの？」

そうヨデイが訊く。

「少し横になると……」

「もう後三十分もしない内に、首都ガーファに着いてしまいますよ？」

「ほんの少しでいいからと……」

「アシユマ君はどこを損傷していたんですか？」

「脳だそうです」

「脳！ 大丈夫ですか？」

「大丈夫だそうです。ただ少しでも回復させたいから、時間をくれと……」

「分かりました」

キュポアはアーチエルが羨ましかった。

キュポアはアーチエルが時たましているように、アシユマの側にいたかった。

そして、アシュマを見守りたかった。

しかし、敏感なアシュマのことだ。

自分がアシュマの側に行く事によって眠りを妨げられるのをキュポアは怖れた。

が、この感情は何なのだろう？

抑えても抑えてもわき立つこの激情。

時に胸が張り裂けそうになり、泣きたくなるようなこの感じ。

キュポアはその感情に流され翻弄されるのを必死に歯を食いしばって耐えていた……。

## 第五節 鬼の秘密を守る者

アシユマが起きて来た。

アヘイビアの首都ガーファは目前だ。

アシユマが廊下を歩いてくる。

キュポアが目ざとくアシユマを見つける。

「怪獣、大丈夫か？」

ほかに、もつと沢山の何かを言いたかった。

だが、出てきた言葉はそれだけだった。

それに対してアシユマは、片手を挙げながら、

「大丈夫だ」

と、言ったのみだった。

皆が一斉に、

「アシユマ君大丈夫ですか？」

「アシユマ、大丈夫？」

「アシユマさま、大丈夫ですか？」

「アシユマ、大丈夫か？」

「アシユマ、平気？」

「アシユマ、大丈夫なのか」

「アシユマさま……」

そう言ってきた。

「皆、いつぺんに言ってくるな。大丈夫だ」

キュポアは悟った。

アシユマがいかに皆に頼りにされ信頼されているかを。

何故だかキュポアは鼻が高い感じがした。

「あと、十分ほどで首都ガーファに着きますよ」

ヨデイが言う。

「布陣はどうするんだ？ ヨデイ」

オルバニアンが訊いた

「布陣は、『黒龍号を護つちやうぞ』組は、アーチエル姫、オルバニアン、エフアールさん、リイナ嬢、アベニ爺。リイナ嬢とアベニ爺は黒龍の下部レールガンを担当してください。もう一方、『大統領府を襲つちやうぞ』組は僕、ヨデイと、アシユマ君、アルミナ嬢の三人で行く事にします。何か質問は？」

ヨデイがグルツと見回して質問者の有無をチェックしていた。

キュポアが大きく手を上げていた

「何です？ キュポア嬢」

「わらわに……わたくしに何か手伝える事はありませんか？」

おっ？ と、言う風に何人かはキュポアの変化に気が付いた。

「キュポア様！」

アンがキュポアまでもが戦闘をするのかと心配になった。

「大事無い、アン」

キュポアがアンを制した。

「そうですねえ、通信係になってももらいましょう。一応全員にインカムは渡しますが念のためです。全員予備の通信機も持っていつてください。その際もしかして、黒龍号に通信を入れなければならぬいかもしれません。その時のために、キュポア嬢、宜しくお願いできますか？」

「分かりました。微力ながらお手伝いさせていただきます」

今度は全員がキュポアの変化に気が付いた。

アンは、少しホツとした。

「期待している。キュポア」

アシユマが言った

キュポアは少し嬉しげに

「はい！」

力強く答えた。

黒龍号のステルス技術により、なんと大統領府まで一気にやって来た。

黒龍号は夜の大統領府の裏庭に降り立った。

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド！！ バイ・ハンドレッド」

早速アーチエルがシールドの魔法をかける。

アーチエルは半球板の上に手を置き黒龍号がいつでも発進できる

ようにしている。

そしていつでもシールドを掛けられるように待機している。

その側ではキュポアが暗闇の中そこだけ小さい明かりを点けてマイクの前にいた。

「ねえ、姉様」

キュポアはアーチエルに訊いた

「かいじゅ……アシユマ様を好きってどんな気持ち？」

「そうねえ、アシユマさまの事を想うとき……嬉しい時や好きだなあって思うときは、あま〜い感じ。で、アシユマさまの事、恋しいなあっと思うときや、やっぱり好きだなあって想う時に、何故だか胸が苦しくなったり、キュッってしびれるかんじがするの。不思議でしょ？ 後、怒った時は、頭が爆発するような感じ、悲しい時には文字通り悲しい感じね。嬉しい時は飛び跳ねたくなるような感じだし、幸せな時にはとっても安らかな感じがするわ。でも、不思議な事に幸せな時に泣いちゃうみたい」

「姉様、複雑ですね」

とは、答えたもののキュポアは幾つかの項目で共通する項目があることに気が付いた。

これを聞いてキュポアは何故か不安になった。

何故か、自分がアシユマのことをもしかして好きなのではないかと思ったからだ。

が、今それを議論しても始まらないので、キュポアは、

「集中、集中！」

そう言って頬を叩いた。

「？」

と、なったのがアーチエルで、

「キュポアそんなに肩肘張らなくて良いのよ？」

そう言った。

「その心の弛みで大失敗してしまうやもありません。ここは慎重に行かないと」

「はいはい」

通信が次々と入ってくる。

『こちら、オルバニアン！ 護りの位置に着いた。これから来る敵を殲滅する。以上！』

「はい、分かりました。御武運を」

キュポアは言った。

『有難う！』

『三番砲塔準備完了！』

この声はリイナだ

「了解しました」

『四番砲塔準備完了！』

こちらはアベニである

「了解しました」

準備完了の報はアシュマから入ってきた。

『こちらアシュマだ。これからヨディとアルミナとで行って来る』  
緊張した。

一瞬間の中が、真っ白になる。

「……りよ、了解しました。どうぞ御武運を」

『有難う、キュポア』

天にも昇る気持ちとはこのことなのか、喜びが全身を包む。

「さて行くか」

アシユマが言って、鬼虎を一薙ぎした  
すると、大統領府を護っていた警官隊は風圧で吹き飛ばされてしま  
った。

「アシユマ君は何でもありません」

「もう、ここまで来たら、怖い物なんて何も無い。こうなったら徹  
底的に潰しまくってやる！」

「アシユマ、それでは単なるテロだわ！」

アルミナは言った。

「今しようとしていること自体、既にテロだ。心配するな」  
アシユマは返した。

アシユマは、パニックになってる大統領府内をまかり通った。

アシユマは府内の人間を捕まえてきて、

「アー又はどこだ？ 『棺桶』はどこだ？」  
聞いて回った。

答えは、皆、

「知らない」

と、言う。

「話しにならない！」

アシユマは息巻いて大統領府のスタッフを突き飛ばす。

「アシユマ、ちょっと乱暴すぎよ！？ 非戦闘員なのよ？」

「分かっている。手加減はしている」

言っアアシユマは、またスタッフを放り投げた。

粗方スタッフか逃げ終わると、今度は黒尽くめの男たちとナンバ  
ーズが控えていた。

「今度は話の分かりそうな方々がやってきて下さったぞ？」

「話の分かりそうな方々って……」

ヨデイが苦笑していた。

そこから乱戦が始まった。

ただ、乱戦と言つてもヨデイと、アルミナは文字通り乱戦し苦戦もしたが、アシュマはまず、黒尽くめの男たちの両腕の骨を鬼虎で砕き、一人一人に、

「アーヌはどこだ？ 『棺桶』はどこだ？」

そう聞いて回った。

そして欲しい答えが得られないときは首根っこを押さえてブン投げた。

時にはヨデイやアルミナの戦っている相手を横取りしては聞いていた。

「いない。アーヌの行方を知る奴が」

「取り合えず大統領執務室へ行って見ましょう」

ヨデイは言った。

ここまですが黒龍号がタッチダウンしてから丁度、五分。

そして、大統領執務室へ三人は向かった。

大統領執務室にはまだ、驚いた事に大統領が残っていた。

「ヨデイ、この親父は誰だ？」

アシュマは言った。

「ああ、アシュマ君この人はですねえ……………」

ヨデイが言いかけたところへ……………」

「無礼な！ わたしのことも知らんのかね？ ワタシはアヘイビア

連邦共和国第四十三代大統領ジョージ・W・サバンナだ！」

「そのわりにSPがいませんねえ……………」

ヨデイが言った。

「お前たちは誰だ！？ 何の目的でここへ忍び込んだ」

サバンナは言った。

「時間が無い。単刀直入に聞く。アーヌはどこだ！？ 天龍鬼はどこにある！？」

アシュマは言った。

「アーヌ？ テンリュウキ？ 何の事を言っておるのかね？」

「時間が無いんだ知っているのか？ いないのか？」

「時間が無いんだ知っているのか？ いないのか？」

アシユマにしては焦り気味でサバンナを脅した。

そして、アシユマはサバンナの首根っこを掴んで持ち上げ、

「イエス、ノーで答える。事実と違う場合はお前を殺す。いいな」

「……」

「返事！」

そう言っただけアシユマはサバンナの首を更に締め上げた。

「ゴ……ゴホッ！ ……イ・イエス」

「アシユマ君！ アシユマ君！ 止めようよこんなやり方……問題になっちゃうよ！！ いろいろ」

ヨデイがおろおろしている。

「アー又はいるな？」

「イ・イエス」

「棺桶に入っているか」

「か……かんおけ？ ……ノ、ノーだ。ゴホッ！」

「アー又は今どこにいる！？」

「ここだ！」

アシユマはゆっくり首だけ回して後ろを見た。

「サバンナ！ これはどういうことだ！？ そこまで七賢人におもねらなければ、国政すらままにならないのか！？ 七賢人の力に頼らなければ、外交に睨みを利かせられないのか？ この体たらくはなんだ！！ これがその名に知られた、超大国アヘイビアのあるべき姿なのか！！」

そう言っただけアシユマはサバンナ大統領をぶんとブン投げた

そして、ドアにぶち当たり、ごろごろと転がる所を部下などに見られてしまった。

（くっ、屈辱だ！！ なぜ、ワシがこんな若造に……！！）

「アー又か。逢いたかったぞ！」

「ほう、お主の方からその様な言葉が聞かれるとは……」

意外な反応だがアー又が少し嬉しそうに（？）返した。

「で、おめしの用件はなんだ？」

すぐさまアー又が聞き返した。

「天龍鬼を渡してもらおう」  
アシユマが言った。

「!!! ……残念だぞ。アシユマ・アトーよ貴様も天龍鬼の謎を追い求める亡者か。だが、もう遅い。あと僅かで『鬼の秘密は閉じられる』それまではなんとしても、このワシが、秘密を護ってみせる!!!」

少しの寂しさと多大な憤怒。

今のアー又を支配しているのはこの二つの感情だ。

「その口ぶりだと、『鬼の秘密』は誰にも見せていないようだな…  
…それならばいい」

その代わり言った言葉が、

「!!! ……そうか！ お前も鬼を持っているんだったな。ではお前も『鬼の秘密を』護りに……ならば鬼虎を置いていけ。そのほうが『安全』だ」

アー又の憤怒は安心に変わった。

だが言った言葉はこのようなものだった。

「断わる。自分の刀は自分で護る」  
アシユマが拒否をする。

「ほう、ならば腕試しと行くかの」  
アー又はやる気満々だ。

「それが、はなから、その望みか」

「そうよ、ワシの生きがいといえば、それしかないからの」

「そうか」

「さて始めるか」

アー又が言った。

「仕方あるまいな」

アシユマが応えた。

アー又は天龍鬼を抜いた。

アシユマも鬼虎を抜いた。

アー又は刀をはずに構えた正眼に置き、アシュマは鬼虎をだらりと下げた右手に持ついつもの構えだった。

アー又が走った。

はずに構えた正眼はいつの間にか右の脇がまえになっていた。

アー又は、一足一刀の間合いなど、そんなものは最初から無かったものの様に、間合いの内に入るすると入ってきた。

(まずい！ やられる！)

アシュマは咄嗟に鬼虎を引き付け、アー又の刃を防いだ。

そして一步身を引きざまアー又に上段から斬り下ろしを見舞った。

アー又は体を開いてこれをかわした。

アー又は一旦身を引くと構えを正眼にした。

アシュマも身を引いて正眼に構えなおした。

そして今度こそ二人はじりじりと間合いを詰め始めた。

詰めながらアシュマは構えをゆっくり秘剣・裏・閃光一刀・崩しにした。

そして、アシュマは、

「アーアーゲー・アーゲーアー・ゲーアーアー……」

呪文を唱え始めた。

それに対してアー又は。

「以前にも話したじゃろう？ ブーストに頼りすぎるなど。例えば

このワシがブーストを掛ければどうなるかな？」

「ハッターだ！」

「なら、試してみるかの？ アーアーゲー・アーゲーアー・ゲーア

ーアー……」

アー又は何かしらの禁呪を唱え始めた。

「まさか！」

「嘘だろ？ おい！」

ヨディとアルミナが言った。

アシュマは

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。  
我はそこに汝はここに、  
無にして全、全にして無  
無限の力、その一端を見せん  
我を死の淵から救いたまえ  
纏え漆黒の羽根……」

アシュマは呪文の詠唱を終わった。  
後はトリガーキーとなる『ブースト』の一言を唱えるだけである。  
が……

「何故全部言い終わらないのさ」  
アルミナがヨディに詰め寄った。

「駆け引きでしょう」

「駆け引き？」

「後でお教えます」

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根……」

そう言ったつきり、二人は黙ってにらみ合い戻ってしまった。

「さっきの話の続きですがね……もし先にアシュマ君がブーストを掛けたとしましょう。残念ながら今のアシュマ君ではブーストを掛けたとしても致命傷を与える事は出来ない。そのうちにアシュマ君のほうが先にブースト切れで、アーヌにしてやられる。逆にブーストを掛け遅れたなら後にブーストを掛けたアシュマ君の負けは目に見える」

「じゃあどつするのさ打つ手無しじゃないか」

「いや、打つ手はあります」

「え？」

「こうやって……」

そう言いながらヨデイは顔の横に両手を持ってくると、  
ぱあん！！

と、手を叩いて、大きな音を立てた。

その時、二人は同時に

「ブースト！！」

と、唱えていた。

「ね？ 『打つ手は』あります」

二人とも、ブーストの結界内に入った。

結局二人と同じブーストの結界内にいるということは、相対速度が同じと言うことである。

アシュマとアーヌは真正面からぶつかり合いとなり、鏝迫り合いになった。

「全く、お前の連れにも困った奴がいる者よ。ヨ……ヨデイとか言  
つたか？」

「！ 俺の親友に手を出すつもりか？ アーヌよ！」

「それは無い。我が興味を引くのはお主、アシュマ・アトーだけよ」

「そうかい……っ！」

アシュマはアーヌを強引に押し戻していた。

アーヌは

「ちいっ」

そう舌打ちした後、強引に上段からの振り下ろしで、アシュマに  
切りかかってきた。

アシュマは、アーヌに抜き胴をかました。

それはアーヌの鎧に傷を付ける程度だったが。

「……」

アーヌはダメージ云々と言うよりも、自分の未熟さを恥じた。

アシュマの攻撃は続く。

反転してアシュマはアーヌを袈裟に斬り下ろす。

アーヌはそれを読んでいたかのごとく天龍鬼を後にかざし鬼虎の一撃をかわしていた。

そして、間を外すと、くるりと反転して天龍鬼を手にし正眼に構えを取り直した。

アシュマも正眼に構えを取った。

一瞬、間が空く。

そして二人とも真っ向唐竹割といわんばかりに顔面目指して対の鬼を落としてきた。

「ああつ、あぶないっ！」

アルミナは、思わず顔を背けた。

刃が二人の顔面に届きそうな時、双方の刀が弾かれた。

「なんて、高等技術を。二人とも、『合し打ち』を狙ってたただなんて」

二人とも数歩走りぬけくるとこちらを向いた。

「お見事。あと少しである」

「？」

「無想剣……」

そうとだけアーヌは言った。

天龍鬼と鬼虎が点滅する。

「これはなんだ？ アーヌよ」

アシュマが聞いていた。

「二つの鬼の秘密が暴かれる時間が過ぎたのよ」

一種の安堵感に包まれるアーヌ。

「そうか、こちらも終わりそうだ」

ブーストの世界からこちらの世界へ戻りつつあった。

次第にアーヌの身体に激痛が走る

「ぐ……う、があっ……が、かはっ……」

「アーヌよ今日はこれで帰る」

アシユマが言った。

「何ッ我に情けを掛けるというか！ 人に、特にお主に、こんな、なりを見せて、生き恥を晒してまで、生きていたくなど無いわ！」  
「アシユマ君アー又の言うとおりでですよ！ 今の内に止めを刺しちやいましょう」

ヨデイは穏やかな口調だが、穏やかならぬ事を言っていた。

「いや、今日はアー又に借りを作った」

アシユマが言った。

「何？ ……我は……貸し……など与えた覚えは……」

アー又は苦しげに言った。

「天龍鬼の秘密を護ってくれた」

「その代わりに我を残して去るといつのか？ ……とんでもなく甘ったれた小僧よ！ そこにいる、ヨデイ……とか言ったか？ お主のほうがよく状況判断が出来ておる」  
アー又が指摘した。

「だめだな。どうも殺る気が起きん」

「アシユマ君！」

「じゃあ、ヨデイ、お前がやってくれ」

「無理ですよ。普通の人には鬼虎は扱えません」

「その通り。人には無理なモノがある？ そうだろう？ ヨデイ」

「その言葉遣い間違ってますよアシユマ君」  
「帰るぞ」

そう言っアアシユマは鬼虎を鞘に収めた。

アシユマ達三人が外に出てみると庭の前に軍隊が例の新型のロケット砲弾で武装しており、そのど真ん中でサバンナ大統領がニヤニヤして笑っている。

勿論兵に護られてだが。

「我々はアヘイビアだ！ 負けてはならんだ！ 特にこんななら

ず者どもにはなあ！ 攻撃用意！」

「まだ分からののか？ 馬鹿が！！ サバンナ！！」

「撃てッ！！！」

例の魔導石が弾芯の砲弾がアシユマ目掛けて飛んできた。

「愚かな！」

例の砲弾は確かにアシユマに命中した。

ただしアシユマの念導境界面越しに。

砲弾は全て鬼虎の念導境界面で光となり電光となって鬼虎の鯉口へと吸い込まれて行った。

周りはもうもうと煙が立ち込めている。

アシユマの姿はと皆が見守る中、アシユマは一人踊りだし人間のバリケードを飛び越えて、又もやサバンナ大統領が捕まってしまった。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング！！！」

アシユマは飛翔してヨデイたちのところへ戻った。

その時連絡が入った。

『もしもし、聞こえますか？ かいじゅ……アシユマお義兄様  
キュポアだ。』

「どうした？」

アシユマが返す。

『姉様が倒れられました！』

「なんだって！？」

「先ほどから変な砲弾がシールドを破りまして、その度に姉様は、シールドなるものを五十枚だ百枚だにかけておられたのですが、魔力底をつき、ついに倒れられてしまいました。今、敵は不気味になりを潜めています。早く、早く来てたも！ 怪獣！」

「分かったキュポア。俺の回線をそっちに回すから、そっちのスピーカーに繋いでくれ」

「はい、どうぞ！」

「スピーカーの音量は少し絞って？」

「はい。どうぞ」

「アヘイビアの軍人諸氏にお伝えする！！ 貴国の大統領、ジョージ・W・サバナは当方で身柄を預かっている！！ ダストモンキーとその一党をを無事に飛び立たせる事！！ さもなければ！！…」

「かー！ー！ うっせえよ！！ アシユマ！！」

オルバニアンが……、

「もう少し声を絞って頂戴今の半分が良いわ」

エファールが言った。

「そうか、コツチはこれ以上絞れん。キュポア嬢！ 音量、半分に絞れるか？」

アシユマがキュポアに連絡を入れた

(キュポア嬢！ …… キュポア嬢！ キュポア嬢！ キュポア嬢！

キュポア嬢！ …… 初めて怪獣が大人扱いしてくれた~~~~。しあわせ~~~~。ん？ 何故わらわが幸せを感じなければならんのだや？ え~~~~と……)

「……！ ……ア！ ……ポア！ …… ユポア！ キュポア！」

「わっ！ なんじゃ、いきなり」

「お？ 素に戻ってるぜキュポアの奴」

オルバニアンは言った。

「！ そんな事は御座いませんのよ？ おほほほ。音量を半分にでしたわね。どうぞ！」

『うむ。であるからして！……！』

『だー！……！ キュポアうつせえよ！ それは二倍！ 半分はその逆だ』

オルバニアンは言った。

「ご、御免なさい……」

…… キュポアは失敗ばかりしてしよげていた。

『そこへ、キュポアのせいじゃない。しよげるな。もう一度！』  
アシユマが言ってきた。

キュポアは天にも昇る気になりそうになったが、今度こそ失敗は許されない（大袈裟）慎重にポリュームの目盛を半分セットした。そして、

「ど、どうぞ」

と、言った。

『……さもなければ、サバンナ大統領の命の保障は出来かねる！！  
それが証拠に！』

言ってボキリとサバンナの小指の骨を折ってしまった。

『づぐうづぐうっ！！』

『諸君、聞こえたかね？ 今のうめき声を。今のは大統領の右手の小指の骨を折った。まずは我がサイコフライヤーの周りにいる奴等を退避させてもらおうか？』

アシユマは言った。

「き……、君があれかね……ダストモンキーかね？」

大統領がアシユマに聞いた

「まさかダストモンキーは……」

アシユマはヨディの方を振り向いて見たら、ヨディは  
（いないいない！ そんな奴アここにはいない）  
と、ジェスチャーで示した。

「ふっ！ ダストモンキー様は俺のような下っ端には目もくれない  
な」

アシユマは言ってみた。

「何！ お前のような輩で下つ端か！ ダストモンキーとは一体！？」

「ダストモンキー様と言え！」

「くすくすくす……」

「うふっうふふふ……」

ダストモンキーと『その一党』の方が笑いをこらえるので精一杯だった。

黒龍号を攻撃していた部隊はすぐさま退いたようだ。

「皆、中に入れ。シールドの解除を」

アシュマが言った。

「アシュマ！ シールドの解除は？」

アルミナが聞いた。

「まった！ コイツ、気絶させる」

アシュマはそう言い、サバンナ大統領は、

「なっ！ 何をするのかね？」

不安顔だ。

「死ぬわけじゃないさ」

アシュマはそういうと大統領の後頭部に指二本を当て気を叩き込んだ。

大統領は死んだようにぐったりした。

アシュマは大統領を芝生に寝かせそのままに、自分は黒龍号の中へ。

アーチエルは丁度今ヨデイの手によってベッドに寝かされた所であつた。

「アーチエル、アーチエル……」

アシュマはアーチエルの頬を手で、はたはたさせて見た。

そしてアシュマは顔をアーチエルの顔へと近づけて行った。

「見てな。今にアシュマアーチエルにキスするぜ」

アルミナがキュポアに耳打ちした。

「な、なに!？」

キュポアは憤り、アシユマの前に行き、  
「姉様に何をしようとしているのですかッ!？」  
そう言った。

「キス」

アシユマは悪びれもせずそういった。

「そ、そなた、そ、そんな事を悪びれもせずに……!」

「だめか?」

「と、とにかくこれ以上姉様に何かするのは厳禁とします」

と、キュポアは決めた。

「治療だが、それも駄目か?」

「だめです! お姉様はこのまま寝かせておきます」

「そうか、分かった」

どうせいつもの押し問答だとしてアシユマとキュポア以外のクル  
ーはベッドブースから引き上げてしまった。

アシユマも引き上げようとした。

それをキュポアが、

「あ、あの……」

と、引き止めた。

「なんだい? キュポア」

「ワタシもつたないけれど、ここまで頑張りました。だから、ご褒  
美に、『ぎ、ぎゅ』して頂けたら……」

「……………いいよ。おいで」

アシユマが言った。

「アシユマお義兄様……………」

アシユマはキュポアを優しく抱きしめてあげた。

キュポアもアシユマに必死にしがみついた。

キュポアは何故だか幸せを感じそれを噛み締めていた。

サバンナ大統領は特殊部隊によって助け出され黒龍号から離れて

行った。

それと同時に始まる攻撃。

しかし既に黒龍号には、アシユマの念導境界面が張られ、アシユマはゴンドラの上の人になっていた。

「ヨデイ、出してくれ」

「はいな」

浮かび上がる黒龍号。

「逃げるぞ！ 撃て！ 撃て、撃て！！」

叫ぶ大統領。

「大統領ここは危険です。早くこちらにおいでなさって下さい！」

大統領はこれまで受けたことの無いような屈辱感に塗れながら黒龍号を目で追っていた。

アシユマは黒龍号が取り合えずアヘイピア圏から脱出できたのでゴンドラごとブリッジに降りてきた。

「ヨデイ、様子はどうだい？」

「今のところ、追っ手はなさげですよ？」

「そうか、次はどうする？」

「そうですねえ……」

「よ、予言ではなんと？」

アシユマが言った。

「え、ええと……」

ヨデイ予言書に目を落す。

ヨデイがルーンの黙示録を広げた。

「『この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混乱する。あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である』と、ありますね」

「この『黒き太陽が』って表現、嫌だな」

「嫌も何もレンヌ王子がアシユマ君のこと、この世の事救ってくれ

るって言ってましたよねえ」

「そうだったっけ？ ちょっとブリッジ離れる」

「あら？ 結局、アーチエルちゃんのところなのね？」

エファールが言った。

「そうだ。敵が来たら教えてくれ」

「分かったわ。さて、オロの所にも定時連絡でも入れようかしら？」

アシユマは廊下を渡り艇後部の生活ブロックへやって来た。

そして、そこを抜けベッドブース群へとやって来る。

進行方向左が女子だ。

手前の一番から一番奥の十番までがある。

ちなみに使用している番号は二番エファール、三番アルミナ、六番アーチエル、八番キュポア、九番リイナ、十番アンとなっている。

アシユマは女子ブースへと入って行きアーチエルのブースへと行く。

確か、アヘイビアを出した時はブースは開きっぱなしだったから、

上手くすれば気を注入できるかもしれない。

アシユマはアーチエルのブースへやって来た。

アーチエルは死んだように眠っていた。

そうだろう魔力……生命エネルギーを極限まで使い尽くしたのだ。疲れて当然である。

アシユマはその生命エネルギーをアーチエルに分け与えようと思っただのである。

「アシユマお義兄様……また、姉様にえっちい事をするのね……？」

側でアーチエルを診ていたキュポアが言った。

「しないよ。治療をするだけ。見せてあげよう」

キュポアはアシユマを見た。

アシユマはベッドの端に座りアーチエルを見た。

アシユマは右手の人差し指と中指をアーチエルの眉間に軽く当て

気を注入した。

眉間を中心に、淡い緑色の光が優しく広がる。光が収まった。

アーチエルがゆっくり目を覚ます。

「あ、アシユマさま……おはよう御座います……」

「お早うアーチエル」

キュポアは短いながらもその一連の二人の会話や細かい仕草、特にアシユマのアーチエルを気遣うような仕草が腹立たしくてならなかった。

「あ、……済みません」

「あ、姉様まだ起き上がらぬ方が」

「キュポアの言う通りだ。今は起き上がらない方が良い」

アシユマはアーチエルを気遣った。

キュポアは段々我慢がなくなってきた。

「怪獣は、こんな事をわらわに見せつけるために、ここに来たのかッ……」

「キュポアだって、アーチエルの事が心配だったろう」

「心配じゃが……心配じゃが……怪獣の……怪獣のばかッ……」

キュポアはベッドルームを飛び出してブリッジの方へと走っていった。

「キュポア……!!」

アーチエルは咄嗟に起き上がろうとしたが、

「あッ……」

眩暈めまいを起こした。

「起き上がらない方が良い。まだ、気が身体になじんでいないはず。少し横になって休むと良い。キュポアは俺が見てこよう」

「済みません……」

「いや、アシユマが見に行くより私が行こう」

リイナが言った。

「リイナ、居たのか」

「居て悪いか？」

「いや？」

「アシユマ、大体お前もお前だ。中途半端すぎる」

「中途半端？」

「中途半端に人の気持ちが分かったりするから、相手の扱いも中途半端になる。キュポアを泣かすようなことをしてみる！ わたしが許さんからな！」

そう言っつてリイナはベッドルームを出て行つた。

「また随分と悪役にされてしまいましたわね」

アーチエルが言つた。

「いいさ、別に。アーチエルはどんな心境だい？」

「姉としては矢張りキュポアに泣いて欲しくないし、恋人としてはアシユマさまに困つた事態にはなつて欲しくないですし、難しいです」

ベッドルームの扉が開いて先ほどと間も無くリイナが戻つてきた。

「アシユマ、アーチエル、来てくれ。緊急事態だ」

アシユマはアーチエルを抱き上げてブリッジまでやって来た。

そして皆、通信機の前に揃つた。

モニターにはオロが映つている。

『全員揃つたようだな……では始める。その後の事情も含め改めて話す事にする。今から約六十時間前に現れた岩塊……コードネーム『岩のピザ』は依然その進路をワイライ方面へと取っている。このまま行けば十二時間前後でワイライの上空に着くという所にまでになった。今後の出方はクーロン政府次第だが、現地ワイライではかなりのパニック状態になっているというこらしい。その上で君達にして欲しい事がある。その岩のピザの正体を君達に調べてもらいたい』

そうオロは言つた。

「調べるのは良いとしてそれだけか？ 危険な物と分かつたら破壊するとか……そういうのはこちらの判断で行つて良いのか？」

ヨデイが言う。

オロは暫く考えた後、

『そちらの独自の判断に任せる』

そう言い切った。

それだけに、ヨデイは

「責任重大だな」

そう漏らした。

そして通信は切れた。

「そうと決まればクーロン行きだ。さあ、準備準備。あ、これまで強行軍でしたからね。休める人は休んでください。どうせ勝負は八〇九時間後。その間は休んで置いてくださいよ」

ヨデイはそう言った。

「そういうヨデイも休んでおいた方が良くんじゃないの？」

オルバニアンが言った。

「いや、私は大丈夫ですよ？」

「何言ってるんだい！ 寝てねんだから、休めつつの！ いざつて時に指揮官が指揮を誤ったら大変だろ？ 操縦席には俺が座るから」

「う〜〜ん、でも、エファールさんを残して僕ひとりが休むわけには……」

「それなら大丈夫。私が代わりに通信士になるから。ささ、エファール姉さんは休んだ休んだ」

アルミナがエファールに言った。

「でも、アーチェル嬢は……って、アシュマ君がいますものね」

ヨデイが一人で言っ一人で解決した。

「そういうことだ。休め休め」

アシュマが言った。

「そんな、アシュマさまだっで殆ど休んでないじゃないですか！」  
アーチェルが言った。

「俺はイレギュラーナンバーだぞ？ 一週間や二週間ぐらい寝なく

ても大丈夫だ。それに引き換え、アーチエルは気がまだ定着していない。休むべきだ」

アシユマは言い、

「三人まとめて休んで来い」

そう言った。

「それじゃあ、休ませてもらおうか……なあ？」

ヨディは遠慮がちに言った。

「ああ。休んで来いよ、ヨディ。きっちり見といてやるからさ」  
オルバニアンは仕切った。

「済みませんねえ。オルバニアン」

「それじゃあ、アシユマさま……」

アーチエルが言う。

「うん、ゆっくりお休み。アーチエル」

二人はキスをしようとした。

「またそこでアーチエル姉様にキスをしようというのか？ 怪獣」  
なみだ眼のキュポアが言った。

「キュポア……あなた、それほどまでに……」

アーチエルが言った。

「なっ、すっ、好きなわけ……好きなわけ、あるかあっ!!」  
キュポアは自分のブースに走って行った。

## 第六節 岩のピザ

あと、一時間程で『岩のピザ』の上空と言つところに来て来た。ヨデイたちが欠伸をしながらやって来た。

「どうですか？」

ヨデイが聞く。

「不気味なほど静かだぜ」

オルバニアンが答えた。

「ヨデイよ。俺は、念のためゴンドラで外へ出る」  
アシユマが言う。

「そんなに危険ですか？ あの『岩のピザ』は？」

「分からん。分からんから、念のため出ておく」

アシユマはエナジアのバーを下げようとする。  
するとアーチェルが手で制した。

「アシユマさま、交代の時間に御座います」

「すまん、アーチェル」

「それは逆に御座います。感謝すべきはこちらの方」

「そうか」

アシユマは言いつつ

「ヨデイ、ゴンドラを頼む」

そう言った。

「はい、はい、ちょっと待ってておくんませ〜……ゴンドラを用意、出来たよ〜ん」

ヨデイが言った。

アシユマはインカムを着けながらゴンドラに乗った。

アシユマがゴンドラでせりあがるのとはほぼ同時に、ひとりで鯉口が切られた。

「何かが来るというのか鬼虎よ？」

アシユマがそう呟くのとほぼ同時に岩塊から眩い煌きが起こって

黒龍号を直撃した。

「きゃあっ！」

黒龍号内は眩い光の中で一瞬パニックになる。

岩塊から起こった眩い光は鬼虎の念導境界面で他の種類の光に変換され電光として鯉口の中へと吸収されて行った。

『ヨデイ、今の攻撃は『ピザ』から来た様に思われるが如何に？』

「どうやらアシユマ君の言う通り見たいですねえ。あんな超長距離からなのに……」

「まって！ その岩のピザから入電よ……いえ、違うわ。全世界へ向けて、発信しているわ。これは……宣戦布告だわ！ 全人類に対して宣戦を布告しているわ」

『我は全てを無に帰すものなり。全人類諸氏に告ぐ。我は今より諸君等人類に対し宣戦を布告する。さて、当面の攻撃目標はクーロン人民共和国の首都ウイライとする』

「ふざけた宣戦布告もあつたもんだ。『当面の攻撃目標は』と来たもんだ」

オルバニアンが憤慨して言った。

そのオルバニアンの声が聞こえたのかどうかは知らないが、岩塊の攻撃がこちらと首都ウイライに降り注いだ。

攻撃は、岩の淵前面から左右にキツカリ九十度の角度までを使って行った。

それは、ヨデイに言わせればビーム砲と言う奴らしくて、あのかい図体は加速器だろうという事だった。

兎にも角にも『岩のピザ』のビーム攻撃をくらったクーロンの実質上の首都、ウイライはどうなったか？

地獄絵図だった。

ビルと言うビルは全て融かされ無に帰し、地上には大火災があちらこちらと起こり……いや燃えているなどと言う表現は適当ではない……。

全ては灼熱地獄だった。

地上に動く者など無い。

融かされていないものなど無い。

燃やされていない物など無い。

人間は全て炭化し、燃やし尽くされて、全くこの世から消滅させられてしまった。

遅れてクーロン艦隊が発進した。

が、発進したはいいが全て、超長距離ビーム砲の餌食になってしまった。

瞬殺だった。

これを見る限り、世界中でこの化け物に勝てる艦隊などあるのであろうかと思う。

「みんな、岩のピザの次の声明よ。次の目標はアヘイビアの首都ガ  
ーファよ」

エファールが言った。

「また、逆戻りかよ」

オルバニアンが言った。

「ぼやかない、ぼやかない。これも仕事の内！　ね？　オルバニア  
ン」

アルミナが元気付けた。

やっと、キュポアとリイナが起きて来た。

二人はあの後遅くまで話しをしていたらしい。

そして、そのまま同じブースで眠ったようだ。

「あれ？　怪獣は？」

キュポアはアシユマを捜した。

「ああ、アシユマ君だったら、ゴンドラに乗って上で待機してもら  
ってますよ」

ヨデイが応じた。

「ずっと船の外におるのか？　可哀相じゃのう……過酷な仕事じゃ  
のう」

「お？　キュポア様」

「何です？ ヨデイ様？」

「しゃべり方が元に戻りましたね」

「？ そうかのう？」

「『岩のピザ』が速度を上げたな」

リイナが言った。

「お？ リイナ女史早速お仕事ですか？」

ヨデイが茶化す。

「冗談を言ってる場合じゃないぞ？ 引き離されたら追いつけないぞ？」

「え？ そんなに？ あ、ホントだ。立っている皆さん、加速しますので何かに捕まってください〜い」

「どうやら、ノリトレアは通過するようだな。ここで加速するとう事は」

「まあ、そういうことになりますかね」

ヨデイが複雑な心境でそう言った。

今、アヘイビアは大パニックになっていた。

クーロンのウィライの惨状が報じられ、『岩のピザ』の目標がアヘイビアの首都ガーファに向けて、進行しているからである。

人々はバスに乗り、車に乗り、列車に乗り、旅客機に乗り、民族大移動を始めた。

時に我先にと争い、時に助け合って……。

そして、行き着く先は港か空港か郊外。

港と空港はそれこそパニックになっていた。

アクシデント、小競り合い、強盗、暴行、殺人……。

大きい犯罪から、小さい事柄まであちらこちらで起こっていた。

黒龍号は着かず離れずどうするか攻めあぐねていた。

その上定期的にビーム攻撃をしてくる。  
それもそのうち収まった。

「ヨディよお」

「なんですか？ オルバニアン」

「降りてみねえか？」

「あのピザにですか？」

「だって、黒龍の装備じゃあ全然ダメージ与えられねえしよお。こ  
うなったら内部から……」

「アシユマ君はどう思います？」

『この敵を叩くには、俺一人で十分だ』

アシユマはゴンドラの上から答えていた。

「それはいいんだけどよお、アシユマの『ウイング』で追いつける  
の？ 音速に近いぜ？ ピザ」

オルバニアンは言った。

『う……』

「だろう？」

『……分かった』

全員が聞ける体勢になって改めてオルバニアンが言う。

「これにはアヘイビアの民の命運が掛かってる。さっきも言った通  
り俺はあの岩のピザに乗り込もうかと思っている」

「ほう。それで？」

ヨディは先へ促した。

「内部から破壊しようと思っている」

「命掛けですな」

「それだけの価値はあると思う」

「アシユマ君一人に頑張ってもらおうというのは？」

「駄目！ それは駄目！ また危ない仕事をアシユマさま一人に押  
し付けて！ そういうやり方はわたし、納得いきません！」

アーチェルが悲鳴に近い声で叫んだ。

『だが、それが一番効率がいい解決方法なんだがな』

アシユマの声が通信席のスピーカーから聞こえてきた。

「いやです！ 納得できません！ 行くなら私も連れて行ってくださいー！」

『アーチエルが行く必要がどこにある？』

「……呼ばれています……」

『呼ばれている？』

「……はい、上手くはいえませんが、そういう気がします」

「アシユマよお、どっちにしたって、アシユマー人じゃあの岩のピザに追いつけねえんだからさ、今回は素直に皆で一蓮托生って事で、いいんじゃないかねえの？」

オルバニアンは話をまとめに入っている。

「あたしもお？」

とは、エフアール姉さんだ。

「そうですねえ、エフアールさんは黒龍に残ってください。アベニ爺とリイナ、アン嬢はキュポア王女の面倒を見てもらわないと」

ヨデイは自慢の長くて蒼い髪の毛を弄りながら言った。

これは、ヨデイの癖である。

「アタシそっち側に行きたくなってきたわ」

「エフアールさんはシールド張れましたよね？」

「ま、一応ね」

「あと、キュポア姫とリイナとアベニは砲座を担当してください」

「そんな、ヨデイ様キュポアまで戦闘にかりだすのは……」

「そうは言っても、本人達がやる気みたいですし……」

「十字の真ん中に敵を合わせて打つだけだ……」

「なんだ、簡単ではないか。これで、並み居る敵を粉碎できるのう！」

リイナとキュポアは二人して盛り上がった。

「貴女達は、人殺しの道具で喜んでるのではありません。めっ！  
アーチエルはまた皆の話の輪の中へ戻って行った。

「この年齢で『めっ！』って怒られてもなあ」

リイナがキュポアに同意を求めた。

「そうか？ わらわは最近までこうして怒られてきたぞ？ あのときの姉様の怖い事怖い事、おおお……今頃になって、震えが来たぞ」  
キュポアは自分にとっては恐怖だという事を訴えていた。

「そうか、そんなに怖いのか」

「そうじゃ、姉様は怒ると、とことんまで怒るからのう。際限がないのじゃ。だから怖いのじゃ」

「そうか、それは怖いな」

「じゃろう？」

「え……じゃあ、攻撃部隊はオルバニアン、アシユマ君、アルミナ嬢、アーチエル様、そして僕、ヨディ。艦内居残り組はエフアルさん、キュポア様、リイナ嬢、アベニ爺、そしてアンさん」

「あの、……」

アンが声を掛けた。

「何です？アンさん」

ヨディが受けた。

「私にも何かをさせてください」

「アン！ 貴女まで……そんな危ない事、主人として認められませんか！」

アーチエルがアンの戦闘行為を拒否した。

「でも、他の方々が戦っておられるのに、私だけ何もしないなんて気が咎めます」

「う……」

これにはアーチエルも何も言えなくなっていた。

「では、アンさんにも砲座について貰いましょうかね？ 詳しい事は爺とリイナ嬢にでも訊いて……」

ヨディはそう言った。

「さて戦闘準備に掛かりましょうかね？」

黒龍号は『岩のピザ』に追いつくために速度を上げた。

「ではエフアールさん、最初のシールド五百枚はワタシが掛けますね。皆さんは先に船を降りて下さい」

アーチエルは事も無げにそう言った。

(……ごっ、五百枚!!!)

オルバニアンやヨデイ、アルミナ、エフアールなんかは、桁の違いを思い切り見せられた感じがした。

オルバニアン達は黒龍号から降りてきた。

アシュマもウイングでオルバニアンたちのところへ降りてきた。

オルバニアンたちは少し歩を進め後を振り向いた。

魔法、シールドが掛けられた念者ならば、どれ程の量のシールドが掛かっているか感覚的に分かるものらしい。

最高級のシールド五百枚。これがどれ程の念が使用されたか凡人には、はかり知る手立てが無い。

アーチエルが、黒龍号から出てきた。

さして念を消費したようには見えない。

「さあ、皆さん参りましょう?」

アーチエルは言った。

暫く歩くと前方に岩で出来た人形のような物が立っていた。

身長十二〜三メートル。

かなりの巨体だ。

「人間? いや、人形か?」

オルバニアンが判じかねていた。

それが動いた。

「!!!」

一行は驚愕し、戦闘態勢をとった。

アシュマが素早く鬼虎を抜刀し、その『気』圧で以って十数メートル先の人形を真つ二つに切り裂いていた。

「やった！」

オルバニアンが声を大きくした。  
が、次の瞬間、岩人形は上半身と下半身を繋ぎとめ再び立ち上がった。

「ゴー……レム……」

アーチエルは呟いた。

「何？」

「ゴーレムです！ 黙示録戦争の伝説に出てくるゴーレムですよ」

「不死身の肉体を持つというあれか？」

「物理攻撃が全く効かないらしいです」

「ならもう一度試してみるか」

アシュマが言った。

左の脇がまえから鬼虎の刀身に光の弾を浮かべ、

「せいっ！！」

気合と共に鬼虎を振りぬいた

光の弾は幾線條の光の束になってゴーレムを襲った。

ゴーレムは穴だらけとなって、原型を留めず穴だらけになって、崩れ落ちた。

「これなら、蘇るまい」

「さすがアシュマさま」

……が、次の瞬間幾体ものゴーレムが現れた。

数えるのが嫌になるほどの数である

「どうするの？ アシュマ？」

アルミナが悲鳴を上げた。

「任せろ。対多敵戦に威力を発揮するのが鬼虎だ」

アシュマは、鬼虎を鞘に収め腰を沈めた。

「……サンダーストライク！！」

その呪文がアシュマの行動より早く、アーチエルによって唱えられた。  
そして次々と崩れるように倒れていくゴーレム。

その時アーチエルは見た。

胸の飾り玉が可電流によって、破壊されそれからゴーレムが崩れていく所を。

「皆さん！ 胸の飾り玉です」

「飾り玉ア？」

オルバニアンが聞き返す。

「そうです。あの胸の飾り玉を攻撃してください」

「どれ。そこまで言うならちよつと試してみましようかね」

オルバニアンが、

どるるるっ！！

六連装バルカン砲を撃った。

弾は見事胸の飾り玉に当りゴーレムは崩れ落ちた。

「ありやま！ ホントだわ。こりゃ」

「よし、俺も試してみるか」

アシュマは言つて鬼虎の柄に手を掛けた。

(イメージ……)

アシュマは数々のゴーレムの胸の飾り玉をイメージした。

そしてイメージしたまま抜刀、幾線條の光の束が直進せずに紆余曲折して次々ゴーレムの胸の飾りだまを貫いていく。

アーチエルの携帯にコール音がした。

アーチエルは携帯を取る。

「はい、アーチエルです！ ……まあ、キュポア、どうしたの？」

「姉様あ、ゴーレムじゃあ。ゴーレムの大群が……死なないいい！ ……」

「落ち着きなさい！ キュポア！ 胸の飾り玉をを狙いなさい。いいですか、慎重に狙いなさい」

「胸の飾り玉あ？ ……あれかな……えいつ！！」

ビシツと言つ音を立てて玉が壊れた。

忽ち崩れ落ちるゴーレム。

「姉様、ホントじゃあ。崩れ落ちよる。皆！ 胸じゃ胸の飾り玉じ

「や！ 飾り玉を狙うのじゃあ！」

「と、言ってもここから狙えるのわたくしと、キュポア様しか居りませぬ。後のお二方の角度では狙えませぬ」

アンが言った。

「そうか」

キュポアが得心した。

「じゃあ、ワタシが弾の補給をしてやろう」

リイナが言った。

「そうかそうしてくれるか、すまないのう」

『キュポア、どうしたの？ 大丈夫なの？』

「姉様！ 大丈夫そうな予感がしてきました。えいつ！」

『そうですか。では私達は行きますよ？』

「分かりましたあ。姉様……よく撃って撃って撃ちまくるのじゃあ！」

「どうしたんですか？」

ヨデイがアーチエルに訊く。

「いえ、黒龍号付近にもゴーレムが出たらしいので……」

「それでキュポア姫にも胸の飾り玉の事を教えたと……」

「はい」

「なるほど」

一応は納得したヨデイだった。

アーチエルは黒龍号の護りの要であるシールドが気になってきた。

アーチエルはエファールに連絡を入れることにした。

アーチエルは携帯を取り出した。

『はい、エファールです』

「ああ、エファアさんアーチエルです」

『あら、どうしたの？ アーチエル』

エファールは余裕しゃくしゃくだ。

「あの、エファさん、シールドの方の具合どうでしょう？」

『ああ、ゴーレムの事で、誰かに聞いたのね？ シールドは頑丈そのものよ。まだ五枚しか破られていないわ』

「たったの五枚？」

「そんなはずは無い。」

「幾ら自分が強念者であつたとしてもそこまで頑丈にシールドは張れない筈。」

「何故だろう。」

「アヘイビアでの戦いときはいとも簡単にシールドを破られていたのに。」

「最近、わたしの身に何が起こつたのか……。」

『アーチエル、アーチエル、どうしたの？ アーチエル』

「あ、済みません。少し考え事をしていました物ですから」

『そう？ とにかくこちらは余裕で大丈夫だから、安心なさいな』

「はい」

『じゃあね。また』

「はい」

「どうしたんですか？ 今度は」

「ヨデイが再びアーチエルに尋ねる。」

「いえ、シールドの具合はいかがなものかと、エファさんに訊いていました」

「どうでしたか？」

「ええ、大丈夫のようです」

「そうですか。それは良かったですね」

「アーチエルは自分の念について考えてみた。」

「最近何かあつただろうか？」

「アーチエル、どうかしたか？」

「アシュマはアーチエルを気遣った。」

「ええ、おかしいんです」

「おかしい？」

「シールドの強度が、いつものわたしが掛けているモノよりも、遙かに強いんです」

「それは、能力が開花したからだろう」

「開花？ わたくしそんな覚えは……」

「アーチエルが念を使い果たして倒れたろう？ その時俺が気を注いで、アーチエルを起こした事があつたな？ 丁度キュポアが怒って出て行ったときだ。多分あのときに開花したんだろう」

「じゃあ、シールドが異常に強いのはアシュマさまの気……念の幽陰！」

「そうともいえない。開花した、アーチエルの力が働いていると見たほうが自然だな。俺はきっかけを与えてやったに過ぎない」

「そうですか。なんだか複雑な心境です」

「そうか。複雑な心境か」

「はい」

その後は何事も無く、一行は内部への入り口を捜していた。

特に、アーチエルの不思議な感応力が一行を導いていた。

アーチエルに言わせると『呼ばれている』との事だった。

「この下です」

アーチエルが言った。

多分この下に、『岩のピザ』の内部に通じる入り口があるということなのだろう。

アシュマはその上に立ち鬼虎を突き立てて気合を發した。

すると岩は崩れ小砂利状になり、皆で掻き分けていくと、内部に通じるであろう入り口らしき物を發見した。

直径三メートルほどの円形のモノだった。

そこには古代文字が刻まれていた。

その古代文字の上にアーチエルが手をかざすと文字が光り、入り口らしきその場所はスライドして一行の目の前に階段を晒した。

当然行こうという事になって、一行は中に入って行った。

黒龍号が岩のピザの中心部に降り立ったのに、入り口が何故こん

なに離れているか、一行は悟った。

それは巨大な螺旋階段だったからだ。

螺旋階段の幅は広く一段が十メートルほどの幅を持っていた。

一行はゆっくり降りていく。

急いではいたが、何があるかわからないからだ。

案の定、敵が現れた。

機械の骸骨……スケルトンであった。

階段の横の壁がスライドしてスケルトンが出てくるのである。

これにはアーチエルも積極的に攻撃をした。

何せ相手は『生きた人間ではない』のだから。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!」

アーチエルはサンダーストライクを掛けた。

幸いな事に、相手は機械だった。

ただ、数が多かった。

敵は万単位でいそうだった。

これには皆閉口したが……。

何故これ程多くのスケルトンが現れたか？

そのカラクリは、階段・階段の横の壁がスライドしてスケルトン

が出てくるのである。

全ての階段の横の壁からスケルトンが現れればそれは、万単位の敵となる。

アシユマならいざ知らず、他の者にとって、これほど多くの敵と対するのは体力のみならず、念の力の相当な消耗となる。

「怒りに燃えるその瞳

正義の名の元、力を示せ

我等の敵を滅ぼさん

出でよ雷竜

サンダードラゴン！！」

ヨデイが初めてティアマツトとは別の、見たことの無いドラゴンを召喚した

サンダードラゴンである。

ドラゴンが階段を降りながらサンダーブレスを吐いて、撃ち漏らしたスケルトンにはその巨体で踏み潰し蹂躪していく。

実に効率的だ。

だが、それと共にヨデイの気も減っていく。

ヨデイの気が底を付いた所でアシユマにボタンタッチとなった。

アシユマは抜刀の構えを見せ腰を降ろし

「鬼虎秘剣、三日月」

そう呟いた。

スケルトンは目前にまで迫っている。

アシユマは一気に鬼虎を引き抜いた。

鬼虎の刀身から生まれた十幾つもの三日月形の刃は直線に飛んでは行かずゆっくり大きな円弧を描いて敵を切り刻んで行った。

丁度二周半した所で三日月は掻き消えた。

階段を降りていくと、無残に切り刻まれたスケルトンの残骸が転がっていた。

綺麗な切り口で実に細かく切り刻まれていた。

気をつけないと、スケルトンの切断面でこちらの方が怪我をしそ  
うだ。

アーチエルはウィングを使ってチャツカリふわふわ浮きながら階段を降りてきた。

再び敵が迫ってきたが、アシユマは同じ事をするだけだ。

アルミナが、

「今日、何の役にもたっていない」と、落ち込んだ。

「これで、最後の、一体じゃあー!!」  
ドドドーン!!

最後の一体を片付けて、キュポアは砲台から降りてきた。続いてアンが砲台から降りてきた。

「キュポア様やりましたなあ」  
アンが言った。

「アンこそキビキビとよう撃っておったなあ。もっとトロくさいかと思っておったぞ。」「アーチエル様では御座りませぬゆえ」

「くしゅん!!」

「どうした? アーチエル。風邪か?」

アシユマがアーチエルに訊いた。

「いいえ、特にたいしたことでは……」

「そうか? 気をつけるよ」

(誰かが噂しているのかしら?)

「今どこら辺なんだろう?」

オルバニアンが誰に訊くでもなく訊いた。

「今は四分の三ぐらいです」  
アーチエルが答えた。

「いや、そうじゃなくてこの『岩のピザ』がどの辺までアヘイビアに近付いたんだろうって事さ。あれから優に五時間は過ぎてるだろう?」

「確かに気になりますね。エファさんに今現在どの程度まで『岩のピザ』がアヘイビアに近付いたか訊いてみましょう」

そう言って自身の携帯端末を取り出した。

そして、ヨディはエファールにコールする。

『はい、ソーファです。』

「エファさん、僕ですよ」

『何？ ヨディじゃない。何よ全く、皆して無線を使おうともしないで。何のためのインカムよ？ …… って、インカム持って行ったのって誰と誰』

「インカムは…アシユマ君だけですわね」

『この、ばかッ』

「そんなこと言ったら、ばか四人になっちゃういますけど……」

『アンタが一番ばか！ 皆に徹底させないから……』

「まあまあ、エファさん。聞きたい事があるんですよ」  
『なによ？』

「エファのスリーサイズ。特におなか周り」  
プツツ。

ツー、ツー、ツー、ツー……。

「切られちゃいましたよ。えぐえぐ」

「当たり前だろ。今度は俺かける」

オルバニアンは自分の携帯端末を取り出した。

そしてエファールにコールする。

『はい、ソーファ。言っておくけど、あたしのスリーサイズは教えませんがからね』

「そんなことあ興味も無いぜ」

『興味も無いですってえ！？ 妻に向かってなんて事…… って、誰？』

「オルバニアン！」

『！！ オルバニアン……で、うちの人は？』

「そんな事より聞きてえことがあるんだよ！ 『岩のピザ』はあと

どのくらいで、アハイビアの西海岸地域に到達するのか教えてくれ  
」！

『ああ、そーゆー話なのね？ 詰まらない。』

「詰まる、詰まらないの話じゃ無いだろう!？」

『はいはい、ちゃんと出してあるわよ。あと、二時間と十五分。ちゃんと脱出の用意もするのよ？ 分かっているわよね？』

「二時間十五分!？ それしかないのか!？」

『そうよ？ だから言ったじゃない脱出の時間も考えろって』

「皆と相談する。一旦切る」

そう言って、オルバニアンは通話を切った。

「みんな、聞こえての通りだ。出来るなら海上でけりを付けたかったがそれも難しくなった。なぜならこのまま中枢部へ行って、脱出する時間も考えなければいけないからだ。皆の考えを聞きたい」

「よくぞ、ここまで成長した。オルバニアン」

ヨデイは喜んだ。

「いやあ、そんな……」

オルバニアンは女の子のように照れた。

「で、実際の意見はどうなのさ？」

アルミナが言った。

「かぁーっ！ 手厳しいですなアルミナ嬢。じゃあ、言いましょう。僕の意見はこのまま進むです。どちらにしろ破壊しなければならぬ物は破壊しなければなりません。脱出時間と言うのは、あくまでも我々の都合だけを言っているものであって、絶対的なものではありません」

「わっ、わたしは引いた方がいいと思うなっ!」

アルミナが自説を述べようとしていた。

「もし爆破するにしても、爆破までの時間に脱出する時間が間に合わなかったら、どうするのさ？」

「うーむ、それも一理ある」

ヨデイが納得した。

「そういうことは最初に考慮に入れとくでしょ。てゆーか、むしろそれがフツー」

アルミナは何故か勝ち誇るように言った。

「でもタイマー使えば問題ないし」

ヨディは背中の中のナツプザックの中にある爆薬とタイマーを見せた。「あと、召喚獣使う方法もありますよ？ 後で死ぬような目にも遭いますけど」

「うぐぐぐぐぐ……悪かったわね！？ 知ったような口ぶりで！

……！！ オルバニアン！ そうよオルバニアンの意見は！？」

アルミナは訴えるような眼差しをオルバニアンに向けた。

しかしオルバニアンはそんな事もお構い無しに、

「俺も先に進むべきだと思う。矢張り、この『岩のピザ』を前に進ませるわけには行かない」

そう言った。

アルミナはその瞬間、がくーっとなつて、世界が真っ暗闇になった。

そんな事も気付かずにオルバニアンは話を進める。

「後……アシユマは？」

「俺も前へ進む」

「じゃあ、アーチエルの姫さんは？」

「わたしも先へ進みます。脱出の事なら心配ありません。目指す場所に小型のサイコフライヤーがあります。それに乗っていけば脱出は三分、黒龍に乗って安全圏に出るのに……どのくらいでしょう？」

「十分ぐらいだな」

「じゃあ、それくらいで。多く見積もっても十五分」

「何でサイコ・フライヤーがあるって分かんのかよ」

アルミナは半分泣きべそをかいていた。

「さつき、入り口を見つけたときに情報が流れ込んできました」

「アーチエルの姫さんて、時々不思議な事言うよなあ？」

オルバニアンが感心して見せた。

「さあ、いこうぜ」

オルバニアンが皆を先導していた。

そしてほんの暫くしてから、アルミナの所に行った。

アルミナは、

「何よ？ 笑いにでも来たの？ どうせアタシだけが反対派だったしね」

いじけたが、オルバニアンは

「そんな事無いって。少数派の意見は大事なんだぜ？ 多数派の意見に冷静さを取り戻させる意味ではね」

言っただけだ。

「皮肉？」

「何でわざわざ皮肉を言いに来なきゃならないんだよ？ 本音さ、本音」

「オルバニアン、アタシあんたのそんな優しい所、好き」

アルミナは泣きべそをかきながら、キスをしてきた。

一行は暫くすると眼の前に、スクリーンのようなイメージ画像が浮かび上がっているのを見た。

「な、なんだあ？ こりゃあ？ キネマか？」

驚くオルバニアン。

だが、スクリーンのように見えるだけで、実際にスクリーンがあるわけではない。

純粋な画像だけのような物で、半透明だった。

そしてアルミナは皆を促す。

「見て！」

そこにはアヘイビアの艦隊が横一列隊形に陣を組み、岩のピザを待ち受けていた。

水際の背水の陣である。

艦隊としては一步も引くわけには行かなかった。

もし引けば、アヘイビア本土上陸と言う事になる。

一行は、歩けば一緒についてくるそのスクリーン画像を見ながら階下へと降りて行った。

どうやら、アーチエルから見る位置が一番のベストポジションのようである。

アヘイビア艦隊が攻撃を開始した。

明らかに遠すぎる攻撃だ。

あたるわけが無い。

それとも牽制しているのか？

その通り。

中央に位置する、アヘイビアの旗艦、ダークファイアーが魔導砲の発射準備をしていた。

魔導砲ならばこの岩のピザのビーム砲と同等の射程を維持できるだろう。

だが威力は？

破壊力は？

これだけの距離があると疑問視せざるを得ない。

魔導砲の発射準備が整ったようである。

ダークファイアーの艦首魔導砲口が激しく光った。

魔導砲は真っ直ぐ『岩のピザ』を目掛けて飛んでいた。

途中で自然拡散されそれが丁度いい具合に『岩のピザを』飲み込んだ。

『岩のピザ』は、魔導砲の直撃を受けその岩盤部分を破壊された。当然岩盤部分に乗っている黒龍号はシールドを五十枚ほど破られ、機体を大きく傾けた。

「こりゃイカンわい」

アベニ爺がエナジアのバーを倒し、コクピットに座った。

「きゃああああ！」

女の悲鳴が悲鳴があちこちで上がる。

アベニ爺は黒龍号を浮かせ、元の相對座標に黒龍号を下ろした。床面が滑る素材なので、フックを打ち込んだ。

「なんだったの今の？」

エフアールが訊いた。

「分かって御座る」

としか答えようの無いアベニ爺であった。

そして、アーチエル達は……

「驚いたな」

オルバニアンが素直な応えを見せていた。

そして、スクリーンは二面になっていた。

「こつちが、アヘイビアの艦隊で、こつちの金属製？ ……の円盤は？」

アルミナはアーチエルに訊いていた。

「この円盤は『岩のピザ』です」

アーチエルは答えた。

「嘘!？」

「本当ですよ」

「じゃあ、この画像どこから撮ってんの？ どう見ても、離れて撮った画像じゃん！」

オルバニアンはそう言った。

「黙示録大戦時代の衛星からだそうです。アヘイビアやノリトレア、ノーツ連邦でも同様のことでますよね？」

「へへえ、衛星ねえ。随分ながもちなんだねえ」

アルミナが変に感心した。

「燃料に核を使ってるらしいですよ？」

「核！ アタシヤニンニクと核は嫌い！ って地球に再突入したらヤバいんで無いの？」

アルミナはそう言った。

「そうなる前に地球の引力圏外から離れるそうですよ？ また宇宙環境問題が……」

「何でそんなに詳しいの？」

「教えていただきました」

「誰に!？」

「『岩のピザ』さんに……」

「二人ともお喋りしてる場合じゃないようですよ。何か起こりますね」

ヨディはスクリーンを見た。

スクリーンではダークファイアーが魔導砲にエネルギーを充填して次弾を発射しようとしていた。

ところが『岩のピザ』からビームが一筋伸びた。

そのビームはダークファイアーの舳先から船尾までを寸分変わらず貫いて爆発させてしまった。

それが合図だった。

艦隊は次々と針の穴を狙うような正確さで、『岩のピザ』の放つビーム砲に一艦一艦正確に葬り去られて行った。

「むごい。……一艦一艦髑るように破壊していくなんて……。どうせやるなら一思いにとか、せめてそれくらいの情けつてもものは無いの？」

アルミナが憤った。

アーチェルも手を口にあててなみだ目になっていた。

シヨックを隠せないようだ。

そこへアルミナはアーチェルに質問をかぶせる。

「ねえ、これが『岩のピザ』のやり方なの？ アーチェル！」

「わたしもそう言いたくなる位です。弁護するわけではないので勘違いしないで下さい。効率性の問題だそうです。今後いかに効率よく都市を破壊していくかの見せしめだそうです。都市を破壊しようとするたびに艦隊に出てこられるのは非常に鬱陶しいそうです」

「なんて事を……『ピザ』野郎め！」

残り数段しかない階段を一気に降りていくアルミナ。

その手をオルバニアンが掴んだ。

「何をすんのさ、オルバニアン！」

「ちよつと冷静になるうぜ、アルミナ。この先何があるかわかんねえ。慎重に行こう！」

一行はとうとう『岩のピザ』の最深部にやって来た。

「ここで終わりがいい？」

アルミナは自慢の大剣を握り締めて辺りを見回した。

「皆様少し離れてください……もうすこし」

アーチエルは床に刻まれている古代文字に手を触れた。

すると、文字が光り更に下へ続く階段が現れた。

「皆さん下の階着いたら急いで端にある段まで走ってください。段を上りきってください」

階段は三メートル程で終わり、次の足を出せば床に付く。

アーチエルは緊張し、

「まず、わたしが行きます」

アーチエルが走る気配を見せた。

そしてトンと跳ぶと床に脚を付き、全速力で走り始めた。

すると床と段差のスリットから細いファイバースコープのような

モノが何千本と出て来てアーチエルを追った。

それは同様に天井のスリットからも出ていた。

アーチエルは必死で走る。

しかし間に合いそうにも無い。

その時アシユマが、

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根

ブースト!!!」

呪文を唱えた。

アシユマは超高速で走り、アーチエルの足に絡み付こうと知るファイバースコープの『触手』を斬り飛ばし、アーチエルの腕を取ろうとする『触手』を斬り飛ばし、アーチエルの首に巻きすこうとする『触手』を斬り飛ばしていた。

アーチエルはそれにも気付かずただ必死に走って、段差の上についていた。

アシユマは自分の手足に絡みそうな触手をも斬り飛ばしアーチエルと、ほぼ同時に段差に着いた。

「忘れよ止めよ解き放て

我に一時の安息の時を与えたまえ

我に枕とベッドを与えたまえ

開放の彼方へ

リムーブ・スペル

安息は我とともに」

アシユマは魔導術『ブースト』を途中解除した。

アーチエルは後にアシユマがいることなど知らずに、何気に振り向き、

「わあっ！ ビックリしましたあ。アシユマさま驚かさないで下さいまし……？ ……なんでアシユマさまがこんな所に？ ……ブーストを使いましたわね？ アシユマさま」

そう言い、アシユマを責めた。

当のアシユマは悪びれた風も無く、

「俺がそうでもしなければ、アーチエルは、ああなっていただろう」  
そう言っって鬼虎の切っ先を向けた。

その先には、身体をファイバースコープのような触手で雁字搦めにされ、目に触手が刺さり、それが耳にもそして口にも刺さった男

の姿がそこにあつた。

アーチエルは、

「ああ、この人だね。わたくしを呼んだのは」

そう言い、

「皆さん待つててくださいね」

と、言いながら壁に刻まれている文字に手をかざし横に滑らせた。

「皆さんもう大丈夫です。『触手』はでてきません」

「ふい~~~~~」

ヨデイが安堵した。

「てつきりアーチエル嬢のように走らなければならないのかと思いましたがよ」

ヨデイ、オルバニアン、アルミナの三人は階段を降りてきて十字架の貼り付けになつてゐるが如く宿主にまかれた男……僧形の男のところへやつて来た。

残るアーチエル、アシユマも僧形の男の所へとやつて来た。

「この人です。わたくしを呼んだのは」

再びアーチエルはそう言った。

「この男は何者なんですか？」

ヨデイはアーチエルにそう尋ねていた。

アーチエルは男の額に手をかざして、目を瞑り、

「……この男の人はクーロン人民共和国のエージェントの方です」  
そう答えた。

「生きていますか？」

「……いいえ。残念ながら……。最早、脳細胞以外その機能を停止しています。既にその人は『岩のピザ』の起動キーでしかありません」

「何故、この『岩のピザ』の事を？」

「……古代文献の分析の結果だそうです」

「それではこの『岩のピザ』は古代の遺物だと？」

「……はい」

「それが、何故現代の都市名や艦隊などの事を？」

「……全て、このエージェントさんの記憶を元に戦略を立てているみたいですよ」

「この『岩のピザ』の目的は？」

「……全人類の抹殺……滅亡させる事です」

「この岩のピザの正体は？」

「……『バヴェル』のプロトタイプです」

「馬鹿な！！　こんなモノが？　似ても似つかないじゃあないか！　オルバニアンは叫んだ。

「そうか！　バヴェル！　それでアーチエルが呼ばれたんだな？」

アシユマは納得した。

「どうやらその様です」

アーチエルもその様に理解したらしい。

「分かった。じゃあ、皆は脱出してくれ。その手段があるんだろ？」

アーチエル

「アシユマさま何を言い出します？　脱出するなら皆で一緒に脱出しましょう？　……それともまた一人で犠牲になれるおつもりなんですか？」

「犠牲にはならない。鬼虎の力を解放するだけだ」

「鬼虎の！？　その封印された力を使うのですか？　賛成しかねます！」

「議論している時間が無い。オルバニアン、『ピザ』が海上にいる時間はあと何分ある？」

「ん？　……三十分弱だな」

オルバニアンは言った。

「聞いての通りだ。ここからミニ・サイコ・フライヤーで脱出し、黒龍号で安全区域まで逃げるのに十三分、更に鬼虎の力の及ぶ範囲を多く見積もってプラス五分。残り十分強。ギリギリの時間だ」

それに対しアーチエルは、涙目で

「納得いきません！　絶対に駄目です。行くのならアシユマさまも

「一緒に！」

と、言い張った。

こうなったアーチエルは梃子でも動かないことをアシユマは知っている。

アシユマは、思い切って強硬手段に出ることにした。

アシユマは徐にアーチエルを抱き寄せ、

「アーチエル、愛している」

耳元で囁いてアーチエルにキスをした。

口と口を重ねるだけの優しいキスだ。

そして、口を解き

「俺を信用してくれ、必ず戻る」

そう言った。

アシユマのせいでもあるのだろうが、普段『愛している』と言う表現を使わない為であるう、アーチエルはアシユマのその『愛している』と言う表現に『酔った』。

そしてアシユマの意見を受け入れた証拠に、

「アシユマさまはズルいひとです。こうやってアーチエルを強引に納得させてしまうのですね？ 仕方ありません。アーチエルは信じて待ちます」

そう言わしめた。

「アーチエル、必ず戻る。待っていてくれ」

アシユマは言った。

「アシユマさま、必ずですよ？ 必ず戻ってきてくださいましね？」

アーチエルが返した。

そして、アーチエルが床の文字に手をかざすと円形に床が切れて浮き上がり、更にその円内で手すりとは足掛けが競りあがった。

そして、天井はその円形のモノが通り抜けるのに十分な広さで左右に開き、遙かに上方、この内部に到る入り口でも天板が円形に左右に開いた。

その、ミニ・サイコ・フライヤーにアシユマ以外の四人が乗って

いよいよ脱出と言う事になった。

「では、アシュマさま。必ず戻ってきてくださいましね?」

「アーチエル。俺がアーチエルに嘘を言った事があるかい?」

「はい。何度も」

「……………ま、まあ、いい。気をつけて帰ってくれ」

「はい。アシュマさまもお気をつけて」

「ホントに必ず帰ってきてくださいよ」

ヨデイが言った。

続けて、

「頼むぜ旦那」

オルバニアンが、そして

「今日何にも出来なかったけどさ、何にもいえないけどさ、無事に帰ってきてよな。それしかいえない。アタシ」

アルミナが付け加えた。

「分かった。必ず戻る」

アシュマは応えた。

そして

「ヨデイ、後を頼む」

そう言った。

「分かりました。でもこのサイコ・フライヤーはどうやって操縦するんでしょうねえ?」

「イメージすればいいんです」

アーチエルがその様に言った。

「あ・成る程。では皆さん行きますよ」

サイコ・フライヤーは水平に浮かび上がった。

「アシュマさま。アーチエルもお慕い申し……………」

アーチエルが何かを言いかけたが、サイコ・フライヤーはそのままの姿勢で勢い良く飛んで行ってしまった。

もうアシュマは遙か下方だ。

そして入り口だった、天板を通過して、地上にでた。

地上と言つても『ピザ』の上甲板である。  
それは磨かれて鏡のようになっていた。

ミニ・サイコ・フライヤーは一路、黒龍号に向けて猛スピードで飛んだ。

黒龍号に着いた。

だが、そのままでは中に入れない。

アーチエルがかけた魔法『シールド』があるからだ。

しかし、アーチエルはシールドの側まで歩み寄り、

「ワーム」

と、唱えた。

すると、『シールド』に穴が開いたらしい。

アーチエルは

「皆さん早く！」

皆を促した。

そして、全員が『穴』を通過するとアーチエルは、

「クローズ」

言つて穴を閉じてしまった。

これらは『シールド』を掛けた本人にしか出来ない魔法である。

一行は急いで黒龍号に乗り込み所定の位置へと着いた。

キュポアはアシユマがいないことに気付き、椅子に座つてベルトを締めながら、

「姉様、怪獣はどうしたのじゃ？」

そう訊いた。

それに対しアーチエルは、沈黙を守つた。

「姉様、お義兄様は？」

「……………」

「姉様、アシユマさまは！？」

「……………察して頂戴。キュポア」

「！！ 姉様はアシユマさまをお見捨てになられたのですかッ！！」  
「見捨ててなどおりませぬ！！」

「しかし現実にアシユマさまがいらないではありませんか！！」

「ちゃんと、御勤めを果たし、必ず戻って参ります」

「本当でしようなあ！？」

ヨデイは二人の喧嘩の最中黒龍号のスロットルを握り、

「黒龍号発進！！」

と、叫んでいた。

「発進！？ 発進してしまうのですか？ ヨデイ様！！ 皆してアシユマさまをお見捨てになさるのですか？」

黒龍号は上昇を続けていた。横に飛んでは『ピザ』の餌食になるからだ。

「アシユマさま……」

キュポアは呟いた。

そして涙を流していた。

涙を流していたのはキュポアだけではない。

見かねたオルバニアンが

「キュポアの姫さんここを押せばアシユマにつながるぜ」  
携帯端末をキュポアに渡した。

「……相すみません」

キュポアはボタンを押した。

数コールの後、アシユマが出た。

『アシユマだ。もう危険区域を脱したのか？ 早いな』

「違うのです。わたしです。キュポアです。義兄様」

『キュポア、いつもの様に怪獣と言ってくれ。でないと調子が出ない』  
『い』

「アシユマさ……怪獣……」

『なんだい？ キュポア？』

「寂しいとか、辛いとか、怖いというのは無いですか？ 大丈夫ですか？ わたしはいつでも怪獣の味方です。怪獣の危難となればい

つでも助勢に行きます」

『それは有り難い。キュポアその時には是非頼む』

「いま、そちらにお伺いしても……」

『今はその時期じゃない』

アシユマはそう告げた。

「そうですか……」

『今は信じて待っていて欲しい』

「はい。分かりました」

『ヨデイに代わって欲しい』

「はい、少々お待ちを」

携帯をオルバニアンに渡し、

「ヨデイ様に代わっていただきたいそうです」

オルバニアンに告げた。

「ヨデイ、アシユマからだ」

「ほい」

ヨデイはオルバニアンの携帯を取り、アシユマと通話を始める。

「ほいほい。ヨデイですう。そっちはどうですか？」

『静かな物だ。あとどのくらいで安全圏に入る？』

「二分弱ですね」

『分かった。アーチエルに代わってくれ』

「ほいほい……オルバニアン……これをアーチエル様に」

「分かった」

そうして携帯はアーチエルの手に。

「はい、アーチエルです。アシユマさま」

『すまない。つらい思いをさせて』

「いえ、いいんです。わたくしは女ですから、アシユマさまを信じて待ちます。その代わり、必ず帰ってきてくださいましね。私もアシユマさまの味方ですよ」

『有難う。千万の味方を得た気分だ』

「その代わり約束してください。必ず無事に帰ると」

『約束しよう』

「お慕い申し上げております」

『……俺もだ』

「うつつ……アシユマさま……」

アーチエルは低く嗚咽を漏らしながら泣き始めた。

直ぐまえの操縦席でヨデイが大きく輪っかを作っていた。

「アシユマさま……ぐすっ……ヨデイ様がOKだそうです」

『わかった。アーチエル。取り合えずここまでだ。また後で』

「あっ？ アシユマさま！？ アシユマさま！？ ……うつつ……う

つつ……うつつ」

「……さて始めるか」

アシユマは独りごちると鬼虎を抜いて水平に掲げ、目を瞑り言葉を発しようとした。

すると、機能が停止したはずの触手が再び出てきてアシユマの手足に絡みついた。

アシユマは途端に手足と首を取られた。

触手が目を刺そうとしている

アシユマは喉を閉められながら呟く

「鬼……虎よ……我が、前に……その力を……」

そこまで行って、アシユマの喉は更に絞られる。

手足も更に絞られる。

手足が捻られ千切れそうだ。

目と耳にはいよいよ触手が刺さるうとしていいる。

アシユマは最後の力を込めて搾り出すように言った。

「示せ！」  
と。

決まった言葉は無い。

音声入力でもない。

おそらく発動キーは、アシュマの『意思』だろう。

だが鬼虎の力は余りにも強大であるゆえ、アシュマの意思のけじめとして、ああいう言葉で表現しているのだろう。

その強大な鬼虎の力が解放された。

それは縦は楕円状に広がり横は円状に広がった。

『岩のピザは』（もう岩ではないが）内側からどんどん光に侵食され光の粒になっていく。

アシュマは途中で意識を持った自我を保っており、光の浸食の中心にいた。

光はある程度広がると暗転し黒い塊となり、すぐさま縮小して行った。

それは黒龍号のすぐ下まで来て、もう少しでアシュマの念導境界面の内に入る所だった。

危ない所だったのだ。

そしてアシュマはと言うと、元の場所にいた。

魔法『ウイング』をかけてないので落下して行ったが、すぐさま

『ウイング』を掛け浮かび上がった。

## 終節 魔電対魔電

アシユマは岩のピザから戻ってきた。

ゴンドラから帰ってくると、アシユマを待ち受けていたのは、アーチエルではなくキュポアだった。

アーチエルは気の安定がとれるまで半球板から手が話せなかったのである。

「ただいま、キュポア」

「お帰りなさい。怪獣……」

キュポアはその後ほそぼそと喋ったのでよく聞こえなかった。

「なんだい？ キュポア」

と、アシユマが耳を持っていくと

キュポアは

「褒美じゃ」

と声を低くして、そしてアシユマの唇に軽くキスをして去って行ってしまった。

アシユマは、見られたかなと思ひ、辺りを見回してみた。

ヨディは機の安定をとるのに必死だった。

エファールは各国の情勢を探るので手一杯だったし、オルバニアンとアルミナはいざと言うときのために砲座についていた。

アベニ爺は相変わらず我関せずだったし、リイナもアンモレーダーを見ていてこちらを見ていなかった。

ただ、アーチエルだけがこちらを見ており、目を合わすと、なぜか、顔を赤くして俯いてしまった。

「……と言うわけで、『岩のピザ』の報告は終了だ。オロ」

ヨディはこれで報告終了と言う顔をした。

『まさか『岩のピザ』がバヴェルのプロトタイプだったとは、いや、

皆「苦勞だった」

「おい、オロが人を褒めてるよ……どうしたんだ？　アイツ。何か変なもんでも食ったのか？」

「聞こえてるぞオルバニアン！」

「お、やべえ」

「どうせこの後はレキシタニアにでも行くのだろう。特別ボーナスをやるから、一旦帰って来い。それに連れて行って欲しい人間がいる」

「ボーナスう？　連れて行って欲しい人？　てか却って遠回りじゃん」

ヨデイが怪訝な顔をする。

「北極を経由すれば割りと直ぐに帰れるではないか。それに、別に怪しい人とか危ない人とかじゃないぞ？」

「分からんぞ？　ヨデイ、体のいい厄介払いかも知れねえぞ？」

オルバニアンが言い出した。

「誰が我が妹アリアを厄介払いなどする物か！」

オロが怒り叫んだ。

「まあ、二名ほど連れ去って欲しい者はいるがな」

「「だれ！？」」

オルバニアンとヨデイは「はもった」。

「サーナリア・ノリトレア王女とフェリア・ファソーイ姫をだ……」

……少々……内密に……保養などを」

「体の良い厄介払いじゃねえか！！」

オルバニアンが叫んだ。

「まあ、取り合えず、一度寄れ」

と、言って通信は終わった。

「何のお話だったのー？」

とは、エファール。

丁度外への買出しから戻ってきた所である。

「ああ、オロに……」

ヨデイが受け何かを喋ろうとした時……、  
『オロ!!』

アーチエルを含め女性陣に驚きと嫌悪の感情が湧いた。

「そうなのかあ。オロと言う奴は。あまり評判よろしくないようじや。姉様まで敬遠させるとは……皆の話聞いてオロと言う人間の一端を垣間見たぞ」

とは、キュポアは言ってみたが……

「しかし、うちの通訳には敵うまい」  
そう言い切った。

さて、その、通訳であるが、それがこの彼である。

「アーチエル、このパイ生地はここで良いのか？」

アーチエルを呼び捨てにし、質問する男、そうこの男こそ名通訳、アシユマ・アトーその人である。

……などと、大げさに紹介する必要はなく、キュポアはこう言いたかったのだろう。

うちの通訳は、買い物も値切る事も出来る重宝な人で、オロ・エバスなどと言う、良く分からん者よりよっぽど使えると。

今日はレキシタリアに帰る途中での食料の補給をしてきたのである。

と、言っても数日分の食料であるが。

それにしても怪獣は使えると思った。

野菜の品評から入って、これなら買ってもいい品質だと見極めると店の親父と交渉事を始める。

アシユマは大抵の国の言語を網羅しているから下手な通訳なしで直接交渉事が出来る。

そして最後は値切る、値切る。

今日の所はノーツ連邦の外れの村だった。

アシユマは地方で訛りが酷く喋りにくかった、と言っていたが十分渡り合っていたと、キュポアは思う。

そしてそれの方が剣術なんかより余程凄い事だとキュポアは思い、

少し鼻が高かった。

「と、言うわけで皆さん。次はオロ・エバス財団本部です。気を引き締めて掛かってください」

ヨデイが注意を喚起した。

「へ〜〜〜〜い」

だが皆の返事はどこか投げやりである。

レキシタニアの帰路の途中、オロ・エバス財団本部……即ちオロの屋敷に立ち寄る。

そこで彼等は驚くべきボーナスを支給される。

それは純度九十九、九パーセントのミスリルのインゴットの山であつた。

皆口々に、「へー」とか「ほー」とか言っていた。

「オロ、これは？ こんなにボーナスを貰ってもいいのかい？」

ヨデイが驚いていた。

ヨデイ（アルステイン）でもこれほどの金品を見る機会は少ないからである。

「駄目だ。正式にはこれは君達への支給品ではないからだ」

「では？」

「これはオロ・エバス財団よりレキシタニアへの見舞金である」

「！……いけませんオロ様！ その様な大金受け取る謂れが御座いません。父も反対なさいますし、国民も納得しないでしよう」

アーチエルはそう言って、この多額すぎる見舞金を断わろうと思つた。

「その国民の方々ですが、相当の被害は出ていませんか？ そうなつた方々への保障はどうなっていますかな？ けが人が出て苦勞なさつている方々とかはいませんか？ それとは別に、この金を

国のインフラに使用としても構わないのですよ？」

「うっ……」

いってアーチエルは言葉に詰まってしまった。

為政者の一族としては、痛い所を突かれたからである。

「自分で言うのもなんだが、私が厚意でここまでするのは珍しい。

気まぐれと言っても良い。高圧的に聞こえるかもしれないがそれは度外視して、こう言うときは素直にもらっておくものだ。アーチエル王女」

「分かりました。ありがたく頂戴します。でもこんなに要りません。後で父と相談させていただきます」

「強情な娘だ。まあ、良かろう。後で連絡を取ってみるが良い」

「有難う御座います。ちなみにこのミスリルの総額はいか程になるのでしょうか？」

「時価、金一千億と言ったところだろう」

「一千億……！」

アーチエルは卒倒しそうになった。

食事までは皆暇なので、居間でごろごろしながらTVを見ていた。

『……今回のアヘイビアによるレボトミノ連邦共和国大統領官邸襲撃事件に対しレボトミノ当局は国元連を通じて正式にアヘイビアの謝罪を求めて行くと共に事件の真相を究明して……』

アシユマは、レボトミノでの出来事をテレビで流れているのを聞き、

（あの大統領もやるもんだ）

そう思った。

『……これでこの時間のニュースを終わります』

アシユマは、おやつ？ と思った。

法皇庁襲撃事件とイーチャイルド邸襲撃事件のニュースが入っていないからだ

それはヨデイも同じだったようだ。

二人は顔を見合わせた。

「ヨデイ、どう思う？」

「そうですね、アシユマ君はどう思いますか？」

「矢張りここは圧力が掛かったんだと思う」

「そうですね。七賢人は余程その存在を世に出したくないんですね。そう思います」

「アシユマさま？ ヨデイ様？ 何のお話をしているの？」  
と、アーチエルは二人の会話に割って入った。

「いや、ちよつとね。なんでもないんだ」

アシユマが言った。

「ふ~~~~ん……？ ……そうだ。結局予言のとおりになりましたね」

「予言？ ルーンの黙示録？」

「はい、そうです。『この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混乱する。あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である』。『あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である』  
つて言うのはアシユマさまの事と、レン又王子も言っていました」  
「そういわればそうかな？」

「そうですね。きっと」

「アーチエルは賢いな」

アシユマはアーチエルの頭を撫でた。

アーチエルは嬉しそうだ。

「そうだ。ヨデイ、イーチャイルドの屋敷で不思議な男に出会った。結局名前は分からなかったが、知っているか？ ヨデイ」

アシユマはアーチエルの頭を撫でながら言った。

「いや、知らない……。オロなら……」

「イーンの子椅子を押している男か？」

「オロ！」

ヨデイが見上げた。

「ああ、そうだ」

アシユマは答えた。

「ネリア・クーシ・カハデクサンだろう。多分」

「女性みたいな名前の方ですね」

ヨデイはそう寸評した。

「どんな男だ？」

アシユマが尋ねた。

「俺もよくは知らん。合った事は無いしな。知っているのは名前だけだ。寧ろ会ったお前のほうが分かっているんじゃないのか？」

「……………ネリア・クーシ・カハデクサン……………」

「皆さんお久しぶりです」

「やあ、アリア。久しぶりですね」

アリアがやって来て、ヨデイがで迎えた。

「アリアさん」

アーチエルが喜色を見せる。

ヨデイがふと向うを見るとサーナリアとフェリアがやって来た。

今はサーナリアはルーランの姿かたちだ。

アリアはアーチエルと話をしている。

部屋の中に入ってきて、ヨデイが挨拶した。

「ルーラン陛下……………でよろしいですか？ お久しぶりで御座います」

「それで構わぬ。久しいのう。兄上は？ 兄上はどこにおられる？

オルバニアン兄上？ 兄上？」

ルーランは頭をぐるりと見回すと、別のドアからこっそり逃げようとしていた。

「兄上っ！ 昔のような無体な真似はしませんので、お逃げにならないで下さい。ただ、私達の間柄を認めていただければ……………」

フェリアが言い添えていた。

「それが嫌だから逃げるんじゃないかッ！」

そんな中……………」

「オルバニアン殿とアルミナ殿はおられますかッ!?」

程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持った、軍人のなりをした女性が入り口に立っていた。

それを見たオルバニアンは

「やあ、コクレト軍曹！ 良く来てくれたね！ 助かるよ。いろんな意味で」

そのコクレトのいる方へと歩み寄って行った。

「は、はあ。そうでありますか」

事情を飲み込めていない、コクレト……アリシアナはどう対処して良いか困った。

「丁度良い。黒龍号をちよつと覗いて行こう。さあ、こっちだ」

オルバニアンはアリシアナを引つ張って部屋を出て行こうとする。

「ちよつと待つてよ、オルバニアン！ アタシも行くよ」

アルミナが付いて行く。

「！ 余も付いて行きます。お待ち下さい、兄上！」

と、ルーランも付いていけば、

「あ、陛下、お待ち下さい。私も付いていきます」

と、フェリアまでもが付いていく始末。

これでは、何のためにアリシアナをダシに部屋から脱出するのか分からなくなってしまった。

「アリアさん、私達も行きませんか？ ベッドシエルの割り振りもしなければなりませんし」

「そうですね。そう致しましょうか」

オルバニアンを中心とした一大ツアーが出来上がりつつあった。

「オルバニアン、夕食までには戻りなさいよ」

ヨディが言って送り出した。

アーチェルは黒龍号のブリッジにいた。

向こうでは、オルバニアンまでもが加わって女子のベッドルーム

の振り分けに、わいのわいのやっている。

アーチエルはこの時間に機会を見つけ、レキシタニアに連絡を取るつもりでいた。

通信席に腰を下ろす。

周波数を合わせる。

最初は向うの通信士が出る。

アーチエルだと知らせると慌てて王エドスを呼びに行く。

そして……。

『エドスじゃ、アーチエルかな？ アーチエルじゃな？』

「はいお父様。アーチエルに御座います」

『キユポアは？ キユポアはどうした？』

「いま、ここには居りませんが健在です。元気良くやっております」

『他の物も健吾か？』

「はい」

『うむ。そうか。そうか』

「ところでお父様、そちらの様子はどのようなのでしょうか？」

『こちらには三人やられた。いずれも扶養家族を持つものばかりじゃ。田畑もやられた。半分ほどは焼けてしまった。それで収穫前の作物もやられた。民の為を思えば作物の買い付けをしたいところなのが、金蔵も底を付いておる。どうしたら良いものやら』

「父上そのことでお話が。実はオロ氏から……」

アーチエルはオロから送られたミスリルのインゴットの話をした。

最初その話に難色を示していた王エドスだったが……

『厚意と言う話しなければもらっておいた方が良いでしょう。で、幾

らほどかな？ 金二千五百万かな？ 金五千万かな？』

「金…… 一千億だそうです」

王は暫く言葉を失った。

「これはこのお金で我が国のインフラ整備にも充てて構わないとの事です」

『確かにそれも有り難い。ただの生意気な若造ではなかったのだな』

「お父様。それを聞かれては話しがややこしくなります。」

「そう出るか。王よ！ ならばこちらも本音を言わせて貰おう」  
「いつの間にかアーチエルの後ろに来ていたオロが言った。」

『矢張りそうだと思ったワイ。この強欲な若造め！ 何が狙いじゃ』

「レキシタニアの深く豊かな森だ！」

『そうれそう来たか！ お前のような若造に、木一本でもくれてやる物か！』

「我々が欲しいのは木などではない。森にある、苔<sup>こけ</sup>だ」  
「苔？」

「そうだ。苔だ。種類によって苔の中にはその中に抗がん剤に似た作用を持つ成分の物もある。抗がん剤だけではない。その他、色々な薬用物質を内包しているものもある。つまりはこれを採用して薬品として売り出す。この手の市場は三兆とも五兆とも言われている。つまりは一十億の投資など安い買い物なのだ。我が、オロ・エバス財団はこれをレキシタニア王国と正式に契約し定期的に金五十億を支払っていく。先ず契約金と初期投資として金一千億。そういう事だが如何か？ 王よ」

『そ、そうか。まあ、そういうことならこちらも引け目を感じなくても済むわけだ。良かろう。わしも男じゃ。その話し乗ろうじゃないか！』

「お父様……」

アーチエルが感慨深げに呟いた。

「ところでオロ様は何をしにいらしたんですの？」

「な、なに。す、少しアリアの事が気にかかったものでな……」

オロは多少うろたえた。

「嘘付け。一生懸命アーチエルに、どうやったら金一千億を受け取っていたか思案してたくせに」

ヨデイの声がした。

直ぐにヨデイの姿がアシユマと共に現れた。

「ば、馬鹿なことを言うな。私は純粹にビジネスとしてだなあ……」

「ま、良いじゃないか」

「いや、よくないぞビジネスと私事は……」

オロはヨディと共に、消えて行った。

その代わりアシユマが側に来た。

「アシユマさま……」

「アーチエル。義親父殿と話しがしたいが宜しいか？」

「ええ、どうぞ。お父様、アシユマさまと代わります」

「おお、婿殿か」

「義親父殿、相すまぬ事をした。国が大事の時に指揮を取る王の側に居られなんだ」

「何を言っておるのじゃ、その代わりアーチエルとキュポアを連れ戻して来てくれたではないか」

「しかし元はといえば俺の持つ鬼虎が敵を招き寄せたせい。その為に国の民達に多大なる迷惑を掛けてしまいました」

「婿殿、勘違いをしておられぬか？ 悪いのはクーロンの艦隊どもであつて、婿殿ではなからう。ワシはこの事をクーロン人民共和国の政府に正式に抗議するつもりだ」

「義親父殿……相すまぬ」

「それは、もう良いというに。早く帰ってきてサケでも一杯やろうじゃないか」

「義親父殿……」

「アシユマさま。お父様の仰るとおりですよ。お気になさらずに一緒にレキシタニアに帰りましょう」

「そうじゃ。早く戻ってまいれ」

「わかりました」

「ではな。アーチエル、しっかり、婿殿についてゆくのだぞ。キュポアたちにも宜しくな」

「はい」

アーチエルが頷く。

通信は切れた。

見ると、丁度皆が館に帰るところだった。

キユポアが来たのは丁度そんなときだった。

「なんじゃ。皆帰るのか？ 折角、皆がこっちにいると思ってこっちに来たのに。まあ良い。姉様、一緒に帰る」

「はいはい。一緒に帰りましょうね」

アーチエルがあやしつける様に言う。

全員黒龍号から降りて館に向かってあるきだした。

アシユマは一番後ろから皆の後について行った。

「姉様？ もし怪獣がわらわの事を好きになったらどうする？」

十数歩先にいるといっても、アシユマにはまる聞こえである。

一体何を言い出すのかキユポアはと、アシユマは思った。

「その時は、姉として引き下がるわけには参りません。アシユマさまをもう一度振り向かせて見せます」

姉妹揃ってなにを言っているのかと呆れる。

「！」

その時、アシユマは何かを感じて振り向き、そっと列から離れた。

アシユマは森の中、池のほとりを歩いていた。

空を見るともう夕暮れだ。

もう、暗くなりつつある。

向うを見ると人影が見える。

人影が言う。

「アシユマ・アトーか？」

「そつだ。お前は？」

「ロイグネン・ウムラオト」

「知らん名だな。何奴？」

「ガルマイン様の刺客」

「いつまでお前らはこの俺を付けねらう」

「今日で終わりだ。ここで貴様は死ぬからな」

「皆そう言って死んで逝ったぞ」

「それはこれを見てもいえるかな」

それはロイグネン・ウムラオトの身体を周囲の背景に溶け込ませ消して行った。

(これは……朧霞！)

『どうだ？ お前には俺の姿が見えているかもしれないが、存在として認識できない』

ロイグネン・ウムラオトは喋った。

「秘剣・朧霞……」

アシユマも急いで姿を消した。

『秘剣・朧霞』は徹底的に気配を殺して初めてできる技である。

それを双方すればどうなるか？

それは持久戦を意味していた。

それも自分の気配を消しながらの持久戦である。

そう、それは相当量の精神力を使用する事を意味していた。

アシユマは最初に、ロイグネン・ウムラオトがいたところに目をむけ気の流れを追ってみた。

しかし気の流れは途中で途切れていて、そこから先ロイグネンの行き先は杳として知れない。

『どうだ？ 自分の得意技が使われる感想は？』

アシユマはロイグネンが発する声によって生ずる僅かな気配を察知してみようとした。

そしてある箇所に向かって棒手裏剣を三本打った。

勿論こちらの気配を殺してである。

『驚いた。まだこんな芸当が出来るとは。今のは危なかったよ正直言っただがもう喋らない。これで根負けした方が負けだ』

暫くは何も無い時間が過ぎた。

そして……

「アシユマさま」

「怪獣ごはんだぞ」

なんとこの池までやって来たのは、アーチエルとキュポアだった。ロイグネン・ウムラオトは勝ったと思った。

おそらくアシユマはあの二人を守る為、勝負を焦るに違いない。焦った時がアシユマの負けである。

何せ二人の保護の為に身を晒さなくてはならないからである。

一本の柳の木の下に気配がふわりと沸き起こった。

アシユマが気配を表したのである。

「あつ、アシユマさま」

「怪獣」

二人はアシユマに歩み寄って行った。

が、次の瞬間二人が見たものは、ふうっと現れた長身の男にアシユマが切り裂かれる場面だった。

「きゃあつ！」

アーチエルとキュポアは悲鳴を上げた。

ロイグネンは

「勝った!!!」

と、思った。

が、一種の違和感を瞬間的に覚える。

空を切ったような感覚にである。

そして、

「しまった!!!」

と、思った時には既に遅く、アシユマの居合いが両腕を両断して尚、ロイグネンの胸を深々と斬り裂いていた。

どお、と倒れるロイグネン。

「な……、何故……」

「秘剣・空蝉。『そこ』に『気と念と気配』を置いてくる技だ。アーチエル達が来て勝ったと思ったのだろうが、勝負を焦ったな。ロイグネン・ウムラオトよ」

ロイグネンは暫く何かを言おうとしていたがやがて痙攣を起こし、がっくりとうなだれてその後動かなくなってしまう。

そう。

勝負を焦ったのはロイグネン・ウムラオトの方だったのである。  
アシユマは鬼虎に血振りをくれると、納刀し、アーチエルとキユ  
ポアの待つ丘の上へと上って行った。

第八話 了

以下続刊

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5693f/>

---

デュエリスト アシュマ 第八話 対の鬼

2010年10月8日14時55分発行